
風の葵 黒い救急車

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の葵 黒い救急車

【Nコード】

N7150K

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

日本史上最強の忍び軍団である月一族の長の娘である水無月葵は、最強の敵である星一族との戦いで重傷を負った。やがてその傷も癒え、事務所の活動を再開した頃、更に厄介な事が起こる。「黒い救急車」が医療ミスを誤魔化す医師を連れ去りに来るといふ都市伝説通りに事件が起こり、葵達は調査に乗り出す。

ブログ 皋月喜蒲（さつきあやめ）の訪問 10月1日午前10時（前書き

風の葵シリーズ第三弾です。不定期に更新していきます。

あの凄絶な「星一族」との戦いの傷がようやく癒え始めた頃。

「所長、どうされたんですか？」

みなづき水無月探偵事務所の所員である神無月美咲は、かなづきみさき所長の水無月葵からの連絡を携帯電話で受けていた。

「ね、美咲、そこにあの人来てる？」

葵の声は、辺りを憚るかのようになり、小さかった。美咲はキョトンとして、

「あの人って誰ですか？」

「外科医よ、外科医！」

葵の声は相変わらず小さかったが、トーンは強くなった。美咲はその言葉でようやく葵が誰の事を言っているのか理解した。

「いらしてませんよ。お話があつたんですか？」

美咲は自分の席に座りながら尋ね返した。

「今朝早く、携帯にメールが入っていたのよ。用があるから、事務所に行くつて。私は出張中つてことで頼むわ」

「ええっ？ そんな、困りますよ。所長に御用がおりなんですから、出かけるのはまずいですよ」

美咲もその「外科医」が苦手なのだ。もちろん、葵は美咲以上に苦手である。

「それなら、病院に入院していますつてことにして」

「そんなことしても無駄ですよ。あの人は、東京中の病院の連絡先をご存じなんですから」

「どうしたらいい？」

天下無敵とも思える程の強さを誇る水無月葵にも弱点はあった。

美咲は呆れ顔で、

「とにかく、事務所にいらして下さい。そんな嘘や誤摩化しが通用

するような方ではないですよ」

「わかったわよ。顔は出すけど、用件は貴女が聞いておいてよ」

葵はそう言うのとサツサと携帯を切ってしまった。美咲は溜息を吐き、携帯を机の上に置いた。

「所長、どうしたんですかア？」

そんな二人の会話をソファに座って聞いていた事務所の経理担当の如月茜がニコニコして尋ねた。

「菖蒲さんあやめがいらっしやるのよ。所長、あの人の事、本当に苦手なのよね」

茜の顔色が「菖蒲さん」という名前を聞いて変わった。その可愛らしい、表現を変えれば幼い容貌からは想像もつかない程強くて、ヤクザを何十人相手にしても怯む事を知らない茜も、その「菖蒲さん」は怖いのだ。

「わ、私イ、早退していいですかア？」

茜は苦笑いして言った。美咲は軽蔑の眼差しで、
「構わないけど、後で菖蒲さんに何されても知らないわよ」

「そ、そんな、脅かさないで下さいよオ、美咲さん」

茜は立ち上がった美咲に近づいた。美咲はパソコンを操作しながら、

「別に茜ちゃんに会いに来るわけではないんだから、そんなに怖がらなくても大丈夫よ」

「こ、怖がってなんかいないですよ。ただ、あの人、ちょっと苦手なんです」

茜は腕組みをしてそう言った。美咲は茜を見て、

「それはわかるけど、早退はまずいわよ」

「わかりましたよ。何か買って来た方がいいですかね？」

茜は自分の小さめのショルダーバッグを机の引き出しから出した。美咲はニツとして、

「買い物に行くフリをして逃げようとしてもダメよ」

「そ、そんなつもりないですってエ！ 菖蒲さん、お茶受けにうる

さいからア、何か買って来ようかなって思っただけですよ」

茜は嫌な汗をかきながら必死になって否定した。美咲はクスツと笑って、

「そんなに気を遣わなくてもいいわよ、茜ちゃん」

「そうですかア？」

茜はバッグを引き出しにしまい、椅子にドスンと腰を下ろした。

「所長は来ないんですかア？」

「来るわよ。でもすぐには来ないわね、多分」

美咲がそう言った時、ドアフォンが鳴った。二人は思わず顔を見合わせた。

「菖蒲さんですか？」

茜が立ち上がって美咲のパソコンのディスプレイを覗き込んだ。

美咲はマウスをクリックして、

「そうね。菖蒲さんのご到着よ」

と言うと、立ち上がってドアに近づいた。

「いらつしゃいませ」

ドアを開くと、そこにはグレーのスーツに身を包んだ「私女優」と言い出しそうな美貌と高慢さを兼ね備えた顔の女性が立っていた。黒髪をバツサリと肩上でカットした髪型は、葵が言った「外科医」という職業故の長さなのだろうか？ 年は葵より上だろう。貫禄すら漂わせているその風貌は、他者を威圧するオーラのようなものを放っていた。

「逃げたのね？」

その女性は事務所に足を踏み入れるなり、そう言った。美咲は苦笑いをして、

「いえ、逃げたのではありません。今こちらに向かっているところです」

「おかしいわね。私が葵にメールしたのは、今から3時間も前よ。どうしてまだ着いていないの？ 私の家の方が、葵のマンションより遠いはずよ」

女性の言葉に美咲はたじろいだ、

「水無月は朝が弱いんです。その後眠ってしまったようで」

「そんな言い訳聞きたくないわよ」

女性はスタスタとソファに近づき、優雅に腰を下ろした。茜はさつきから硬直したままだ。

「あら、茜。貴女もここにいたのね？ 葵とはうまくやってる？」

「は、はい、菖蒲さん」

茜の声は完全に裏返っていた。菖蒲と呼ばれたその女性はフツと笑って、

「何そんなに緊張しているのよ。私は別に貴女達に怒っているんじゃないわよ。葵に腹を立てているだけ。将来義理の姉になる私に対して、こんな対応をするなんて」

「はあ……」

茜は美咲と顔を見合わせた。将来義理の姉になるとはどういう意味なのか？ それはこの後すぐにわかる。

「姉さん！」

美咲が閉じかけたドアを押し戻して、男が入って来た。彼の名は

しのはらまもる

篠原護。防衛省統合幕僚会議情報本部の所属だ。葵の幼馴染みで、

自称「恋人」である。葵はそれを完全否定であるが。篠原は美咲に「ごめんな」と手で合図して中に入った。

「何があっただ？ 葵に話があるって、病院に欠勤届まで出してさ」

彼はソファに悠然と座っている菖蒲に捲し立てた。しかし菖蒲はニツコリして、

「あら、私が自分の可愛い弟の将来の奥さんに会いに来るのが、そんなに迷惑なの、護君？」

と尋ね返した。篠原は向かいのソファに腰を下ろして、

「そうじゃないって。あまり葵にプレッシャーかけるなよ。そうでなくても、俺達ギクシャクしてるんだからさ」

「ギクシャク？ 貴女達、うまくいっていないの、護君？」

菖蒲がいちいち「護君」と言うのが恥ずかしいのか、篠原は赤面して、

「姉さんには関係ないだろ？ 俺と葵のことなんだから」

「悲しい事言わないでよ、護君。二人っきりの姉弟じゃないの」

菖蒲は悲しいそうなフリをした。そのあまりにもあからさまな演技に、篠原は呆れ顔で、

「葵だつてこの前死にかけたんだ。彼女もいろいろ大変なんだよ。そんな時に姉さんのいらない嫌味を聞かされたら、あいつだつて参っちゃうよ」

「いらぬ嫌味？」

菖蒲の顔が一瞬にして氷のように冷たい表情に変わった。美咲と茜はビクツとして二人から離れ、給湯室の陰から姉弟の言い合いを見ていた。

「私は一度だつて葵に嫌味なんか言つた事なくてよ」

菖蒲はそれでも穏やかに反論した。しかし篠原は、

「姉さんの葵に対する言葉は全部嫌味じゃないか。わからないのか？」

とさらに言い返した。菖蒲はそんな弟の暴言を去なすように、

「護君、姉に対して言葉が過ぎるわよ。美咲と茜が、貴方の暴言にびつくりして、隠れちゃったじゃないの」

「……」

篠原はもう何も思いつく言葉がなくなつたのか、額に手を当てて頭垂れてしまった。美咲と茜は思わず顔を見合わせた。

「美咲、すぐに葵に連絡を取ってちょうだい。事は一刻を争うの。私の事が嫌いだからつて、逃げ回っていたら、人がまた死んでしまつかもよ」

「えっ？」

菖蒲の不吉な言葉に美咲と茜ばかりでなく、篠原までもがビクツとした。

「どういう意味だよ、姉さん？ 何があつたんだよ？」

篠原の問いかけを完全に無視した菖蒲は、

「美咲。早く葵に連絡して」

「は、はい」

美咲は大慌てで携帯を取り出し、葵に連絡した。すると、

「ただ今到着いたしました」

と葵がドアを開いて現れた。

「葵！」

「所長！」

「やっと来たわね、葵」

菖蒲がゆつくりと立ち上がり、葵を睨んだ。葵は愛想笑いをして、

「いらつしゃいませ、菖蒲さん。事件が起こったのですか？」

と篠原を横に移動させて菖蒲の向かいに腰を下ろした。

「あーら、そうして二人で並んで座ると、本当にお似合いなこと」

菖蒲の強烈な皮肉とも取れる言葉に、葵は苦笑いをしただけだっ

たが、篠原はムツとして、

「姉さん！　そういう嫌味を言うためにここに来たのなら、俺は姉

さんを力ずくで連れて帰るぞ」

と怒鳴った。しかし菖蒲は、そんな篠原の怒りを全く意に介してい

ないらしく、

「実はね、葵、貴女に調査の依頼に来たのよ」

「調査の依頼？」

葵はいきり立つ篠原を押し止めながら、菖蒲に尋ねた。菖蒲はゆ

つくりと頷いて、

「そう。私の勤務していた病院で殺人事件が起こったの」

「！」

葵は美咲と茜に目配せした。美咲は席に戻り、パソコンを開いた。

茜は給湯室で飲み物を準備し始めた。

「被害者はその病院の外科医で、かねむらよしき金村芳樹、三十歳。大学の医学部

で、私と同期だった男よ」

菖蒲は先程までとはうってかわって、真剣な表情で話し始めた。

ようやく篠原も落ち着きを取り戻し、ソファに座り直して自分の姉の持ち込んだ話に耳を傾けた。

「3日前の事件ですね。確か、ワイドショーとかでも大きく取り上げていました」

美咲がパソコンで検索しながら言った。菖蒲はチラッと美咲を見てから葵を見て、

「貴女、黒い救急車って聞いた事ある？」

「は？ 黒い救急車、ですか？」

葵は美咲に視線を送って検索を促した。すると茜が、

「私知ってます。それ、都市伝説ですよ。」

と口を挟んで来た。菖蒲は意外そうに茜を見上げて、

「へえ、茜が知っているなんて意外ね。そう、都市伝説よ、黒い救急車は」

「姉さん、その都市伝説が、姉さんの元同僚の医者殺人事件とどう繋がるんだよ？」

篠原は菖蒲の勿体つけた話の進行にイライラしていた。菖蒲は真顔のまま葵と篠原を見て、

「金村君は、その黒い救急車に殺されたのよ」

「何ですって？」

葵は仰天した。篠原も啞然としている。茜が、

「じゃあ、あの都市伝説は本当だったんですか？」

と身乗り出して菖蒲に尋ねた。菖蒲はフツと笑って、

「それはどうかわからないけど」

葵は美咲を見た。美咲は頷き、

「では、その黒い救急車の都市伝説について、解説したサイトが見つかりましたので、今お話しします」と言った。

第一章 都市伝説「黒い救急車」 10月1日午前11時

美咲はあるサイトの内容のプリントを葵達に渡した。

「それが所謂『都市伝説 黒い救急車』です。その話は作り話とい
うのが多くの人の意見ですが、事によつたら話の核となる部分が実
話として存在しているのでは、という仮説もあるようです」

美咲は席に戻ってパソコンを操作しながら言った。

「このサイトの話を読む限りでは、作り話の域を出ていないような
気がするが」

篠原はプリントから顔を上げて美咲を見た。美咲は頷いて、

「はい。そのサイトはほんの一例なんです。もっと詳しいサイトも
ありますが、量が膨大過ぎてプリントアウトできませんので、私が
その都市伝説の概要をお話しします」

葵達は一齐に美咲を見た。美咲は葵と菖蒲の視線に少し気圧され
たが、

「黒い救急車は、医療過誤によって命を落とした人々の怨念が作り
出した妖怪だというのが、多くのサイトでの意見です。今お渡しし
たプリントの内容もその説に立って書かれています」

「それを誰かさんが実体化したってわけね」

と葵。菖蒲は、

「続けて、美咲」

と葵に一瞥をくれてから言った。葵は苦笑いをして肩を竦め、美咲
を見た。そこに茜がトレイに飲み物を載せて戻って来た。

「ありがと、茜」

菖蒲はそう言って自分の好きな紅茶のカップを取った。茜は作り
笑いをして応じた。

「医療ミスを犯し、それをもみ消した上に患者の遺族達に何の補償
も謝罪もしない病院に、黒い救急車は現れます。そして医療ミス
をした医師、それに協力した看護師、さらに握りつぶした病院の経営

者達を真つ黒な隊員服に身を包んだ救急隊員が強制的に救急車に押し込め、そのまま連れ去ってしまいます。そして数日後、攫われた人達は河原や公園、山の中などで変死体で発見されます。いくら調べても何故死亡したのかわからない状態で」

美咲の話を聞いているうちに、葵はバカらしくなってしまったが、自分の様子をしっかりと横目で観察している菖蒲に気づき、欠伸を噛み殺した。

「まるで怪談ね。死んだ患者の怨念が救急車になって、自分達の命を結果的に奪った医師達を連れ去り、殺す。でも何で救急車なの？ 殺すのなら、霊柩車の方がそれらしいと思うけど」

葵は菖蒲が睨んでいるのを無視して尋ねた。すると美咲は、
「そのことについて、お手元のプリントには書かれていないのですが、この伝説に関する最大のサイトにはこう書かれています」

美咲はブラウザを操作して、そのサイトを開いた。そして、
「何故黒い救急車なのか？ その疑問はまだ完全に解消されたわけではないが、一つの説がある。人の命を救うはずの病院で、命を奪われた患者達は、人を助けるために現場に向かう救急車で、命を助けるべき立場の医師達を拉致し、殺害する事で、その矛盾を指摘しているのではないか。だから霊柩車ではなく、黒い救急車なのだろう」

とそこに書かれている文章を読み上げた。菖蒲はニツコリして美咲を見て、

「ありがとう、美咲。そのくらいでおおよそのことは把握できたと思うわ」

「はい」

美咲も微笑んで応じた。茜は給湯室から戻り、自分の席に着くなり、

「それで、菖蒲さんの元同僚の人は、やっぱり医療ミスをしたんですか？」

と尋ねた。菖蒲は紅茶のカップをソーサーに戻し、

「それが金村君は一度もミスはしたことがないのよ。もし本当に黒い救急車が存在するとしても、彼が殺される理由がないの。そこが今度の事件の最大の謎」

「謎でも何でもないだろ、姉さん。犯人が只単にその都市伝説を利用して警察の捜査を攪乱しようとしているだけさ。動機は他にあるよ」

篠原の素っ気ない言葉に、菖蒲はムツとして、

「うるさいわね。私だってそのくらいのこととはわかってます。謎なのは、どうしてそんなわかり易いことをわざわざしたのか、よ。現実は何人も病院関係者や患者さんが、黒い救急車が現れ、黒い救急隊員が金村君を連れ去ったのを目撃しているの。そんな大掛かりな事をして、どうするんだろうつて、疑問に思うでしょ、護君」

「……」

篠原は「護君」と呼ばれるのが本当に鬱陶しいようだが、何故かそのことを菖蒲に言わない。

「目撃者はいるんですか？」

葵が退屈そうな顔で尋ねた。菖蒲は葵を睨み据えて、

「いるわ。たくさん。でも、警察は犯人の偽装工作だと断定していて、全く目撃証言を無視して捜査しているの。このままじゃ、この事件は迷宮入りしてしまうわ」

葵は菖蒲の鋭い視線をまともに受けていられないのか、美咲を見て、

「都市伝説の方では、その辺はどういう展開になっているの？」

と尋ねた。美咲はマウスを動かしながら、

「目撃者は多く存在しますが、誰も詳細を覚えていない、ということになっているようです。つまり、目撃者は黒い救急車によって記憶を操作されていると解説されていますね」

「警察がそう考えるはずもない。救急車の目撃証言を無視しているのが本当なら、そこには何か理由があるはずだな」

篠原の「無視しているのが本当なら」という言葉が引っかかった

のか、菖蒲は不機嫌そうな顔で、

「無視しているのは本当よ。私も証言しているんだから」

「えっ？ 姉さん、現場にいたのか？」

「たまたまね」

篠原は葵と顔を見合わせた。菖蒲は篠原を見て、

「黒い救急車は、間違いなく現場に現れて、金村君を連れ去った。

そして彼は後日遺体で発見された。それは動かし難い事実なのよ。

それなのに警察は、救急車の事を何も調べていないし、目撃者の事情聴取もしていないわ」

「事情聴取もしていないんですか？」

さっきまでとは違う顔をして、葵が言った。菖蒲はニヤツとして「とうとう興味を示したわね、葵。この殺人事件は、決して怪談ではないし、都市伝説でもないのよ。事実なの。それなのに、誰かが圧力をかけたのか、警察の捜査がどうも信用ならないの」

茜は大原が信用されていないようなことを言われた気がしてムツとしたが、さすがに菖蒲に対して口答えする勇氣はないらしく、何も言わなかった。

「都市伝説の解説では、黒い救急車のことを調べようした人達は皆、謎の死を遂げていると書かれています。だから未だに真相がわからないのだと」

美咲が言い添えた。篠原は腕組みをして、

「都市伝説とか怪談話は大概そうだよな。だったらどうして黒い救急車は殺された患者の怨念だということがわかるのか、全く説明がつかない。それはすなわち、誰かが調べたという事だからな。調べようとした者が皆怪死しているのなら、そんなことすらわかるはずがない」

「そうね」

珍しく自分の意見に葵が同意したので、篠原はギョツとして彼女を見た。葵は菖蒲の意見に賛同したくないので、自分に同意したのだろう。彼はそう考え、葵が自分に理解を示してくれたなどという

樂觀的な考えを捨てた。悲しい習性である。

「警察は信用できないから、未来の義理の妹に事件の調査の依頼に来たのよ、葵」

菖蒲は妙に嬉しそうに言った。葵は苦笑いして、

「妹になるかどうかは、まだ未定ですから」

「あら、護君とは遊びだっという事？」

「姉さん！」

葵より篠原が慌てた。美咲と茜は顔を見合わせた。菖蒲はフツと笑って、

「冗談よ。いちいち真に受けないでよ、護君」

と言ってから、

「警察が事件を有耶無耶にしようとしているのははっきりしているわ。そんなことはさせない。だから貴女に頼みに来たのよ」

「その辺の事情はウチの事務所に近い警察関係者に調べてもらいましょう」

葵はそう言いながら、茜に目配せした。茜はニコツとして、

「了解です、所長」

と携帯を取り出し、メールを打ち始めた。

「依頼料は高いですよ、菖蒲さん」

葵が言くと、菖蒲は、

「護君につけといて」

「ええっ？」

護はまだ菖蒲さんに翻弄されている。情けないな、と葵は思った。しかしやっぱり、この人苦手だ。帰ったらたっぷり塩を撒かなくちや。

「一つ訊いていいですか？」

葵が居ずまいを正して菖蒲を見た。菖蒲はゆっくりと葵に視線を移して、

「何かしら？」

と貴婦人のような仕草で言った。葵はその仕草に苦笑いして、

「何故菖蒲さんはこの事件が有耶無耶になるのを阻止したいのですか？ 亡くなった金村さんとはどういうご関係なのですか？」

「……」

菖蒲は一瞬口を開きかけたが、何故か躊躇した。葵はそれを見逃さなかった。

「なるほど、仇を討ちたいのですね、金村さんの」

やっとこの女の弱みを握ったわ、と葵は心の中でガッツポーズをした。菖蒲はそれでも表情を変えずに、

「別に彼とは特別な関係ではなかったわよ、葵。何を勘ぐっているのか知らないけど、貴女の想像とは違うわ、確実に」

と応じた。しかし凶星に近い事は、葵を見なくなった事で明らかだった。

「帰るわ。今日は午後から出勤しますと言ってあるから」

菖蒲は不意に立ち上がり、

「護君、病院まで送ってくれる？」

「ああ、いいよ」

篠原も、初めて姉が狼狽えたのを見て、笑いを噛み殺して応えた。

台風のような菖蒲が、篠原と共に事務所を出て行くと、

「大原さん、こっちに来るそうです」

と妙にハイテンションな茜が言った。葵は茜を見て、

「そんなに急がなくてもいいのに。ズルズル引き延ばして、虐めてやるつもりなんだから」

「ひつどーい。所長つてば、サディストなんですね？」

茜の言葉に葵はフンと鼻で笑って、

「とんでもない。菖蒲さんが究極のサディストよ。発する言葉全てが他人を傷つけているんだから」

「ああ、そうかも」

茜はすぐく納得してしまった。美咲が、

「いずれにしても、この事件、何か裏がありそうですね」

「それはね。だからあの意地悪姉さんの話に乗ったのよ。でなければ、誰があんな依頼受けるもんですか。多分タダ働きになるんだし」

「えっ？ 篠原さん、払ってくれないんですか？」

茜が素っ頓狂な声で尋ねた。葵は呆れ顔で、

「いくら私でも、護に請求できないわよ。それをしたら、あいつ腹いせに今までの情報料を逆に請求して来るわよ」

「篠原さんはそんな人じゃありませんよ、所長」

美咲がたしなめるように言った。葵は美咲を見て、

「そんな奴なのよ。あの姉にしてあの弟。日本最悪の姉弟だわ」と身震いしてみせた。美咲は呆れて溜息を吐いた。

「ホントにもう……」

葵は急に思い出したように、

「ああ、そうだ、茜、もうすぐお昼だから、大原君にここじゃなくてこの先にあるファミレスで落ち合いましょうってメールしておいて」

「えっ？ ファミレスですかア？」

茜が不満そうに言うのと、

「別にいいのよ、高級レストランでも。但しその場合は貴女の来月のお給料から差し引くけどね」

「いいです、いいです、ファミレス大好きーっ！」

茜の慌てぶりに、美咲はクスツと笑った。

第二章 後小松総合病院外科医殺人事件 10月1日午後1時

確かに異様な光景だった。

国道沿いにあるそのファミリーストランは、ランチを楽しむ有閑主婦や、忙しい合間を縫ってカウンターで本日の日替わりメニューをかき込むサラリーマンでこった返していたが、あるボックスシートはそれとは異質だった。

何しろ、三人の美人 しかも可愛い系、綺麗系、ツンデレ系と盛りだくさんな が、一人のイケメンと一緒にいるのだ。

イケメンの隣には可愛い系、向かいには綺麗系とツンデレ系。目を引かないわけがない。店員も他の客も、何の集まりかと、固唾を呑んで見守っていた。

「何か、注目されてる気がするのおかしな感じがするは、自意識過剰かな？」

警察庁のエリートである大原統は隣に座ってニコニコしてチョコレートパフェを食べている茜に小声で尋ねた。

「そりやそうですよ。美人が三人と、イケメンが一人なんですからア。注目されて当たり前ですって」

茜は陽気に答えた。大原は苦笑いして、

「後小松総合病院の事件のことですよ、それ？」

と葵に言った。葵はムスツとした顔で頬杖を突いてコーヒーを一口飲み、

「ええ、そうよ」

「あのオ、水無月さん、何か怒ってます？」

大原は慎重に尋ねた。葵はフツと笑って、

「怒ってなんかいないわよ。ただ、茜があまりにもアホなこと言うたから、呆れてるだけ」

「アホな事って何ですかア？ 美人三人とイケメン一人で正解じゃないですかア」

茜は剥れて反論した。美咲は大原同様苦笑いして紅茶を飲んで
いる。葵は茜を見て、

「美人二人とイケメン一人と子供一人が正解よ」

「こ、子供って何ですか？ 私、二十歳ですよオ！ 子供じゃない
ですってば！」

茜はますます剥れた。しかし葵はそれを無視して、

「ちよつとワケありで、その事件の事を詳しく知りたいのよ。大原
君、知ってるんでしょ？」

「ええ、まア。僕の高校時代の先輩が事件の担当なので、知って
はいます」

大原は無駄な質問かな、と思いながらも、

「ワケありって、どんなワケなんですか？」

葵は頰杖を着くのをやめてシートにもたれ掛かり、

「ちよつとね。取り敢えず、聞かせてくれないかな？」

ああ、やつぱり教えてくれないのか、と大原は思いながら、

「事件がちよつと変わっているんですよ。目撃者の証言によると、
『黒い救急車』が現れたとか」

「その事なんだけど、警察は『黒い救急車』については、どうい
う扱いをしているのかしら？」

葵が何故そんなことを訊くのか、大原は不思議に思った。

「都市伝説なんですよ、その『黒い救急車』っていうのは」

「それは知っているわ。だから知りたいの。警察の見解を」

大原は辺りを憚るように声を低くして、

「公式には、都市伝説を真似た劇場型犯罪と発表することにしてい
たのですが、あるところから圧力がありました」

「圧力？ どこから？」

葵は身を乗り出した。どうやら菖蒲の話は見当違いではないよう
だ。

「それが医師会からなんですよ。そんな妙な話を広められると、三
流週刊誌やら下品な夕刊紙やらが取材に殺到して、病院の威信に関

わるから、公表しないでもらいたいと」

葵はその圧力は確かに医師会からのものだろうと思ったが、理由が嘘臭いと判断した。

「信じられないわね。確かにマスコミ共が集まって来ると医療に支障が出たりすることもあるでしょうけど、病院の威信がどうのこのつて、あまり関係ない気がするわ」

「ええ。僕もそう思います。しかし捜査本部はそうは思わなかったようで、医師会の意見を尊重し、都市伝説絡みの話は一切公表していません。捜査に支障はないし、報道機関に発表する必要もない、というのが表向きの言い訳なんですが」

大原は自嘲気味に笑って言った。すると茜が、

「その医師会って、誰がトップなんですか？」

と尋ねた。大原は感心したように茜を見て、

「鋭い質問だね、茜ちゃん」

「えっ？」

当の茜はキョトンとした。彼女は会話に割り込みたくて言うてみただけだったのだが、何か事件の核心に迫るような質問だったらしい。

「医師会の会長は、事件の起こった病院の院長である後小松謙蔵。ちよっと引つかかるんですよね」

大原は葵を見た。葵は腕組みをして、

「その人、どんな人なの？」

「手広く病院を経営している、医療より利益の人ですね。後小松総合病院の他、いくつかの病院の院長や理事長を兼任しています。あちこちの病院から優秀な医師をヘッドハンティングしています。そのせいで潰れた病院もあるようです」

大原の言葉に茜は、

「何か見えて来ましたね。そいつが黒幕でしょ。自分の意に沿わない人を誰かに殺させたんじゃないですか？」

すると大原は苦笑いをして、

「それはあり得ないな、茜ちゃん」

「えっ？」

今度是否定されてしまい、茜はションボリしてしまった。葵はそれを見てニンマリしたが、美咲は顔を俯かせてクスツと笑った。大原は三人を順番に見ながら、

「殺された金村医師は、後小松院長が自ら出向いて自分の病院に迎えた人です。意に沿わないから殺す、なんて事は決してないですね」「じゃあ、ライバル病院が殺し屋を雇って……」

茜がもう一度割り込みを敢行した。すると葵が、

「殺す必要はないでしょ？　そこまでの危険を犯してする事ではないわ。むしろ殺すとすれば院長でしょ」

とあっさり一蹴した。茜はますますションボリした。それに気づいた大原が、

「ただ、金村さんは真面目過ぎる人だったようですから、後小松院長のやり方を全面的に支持していなかった可能性はあります。我々警察が掴んでいない何かがある可能性は否定できません」

と言い添えた。茜は目をウルウルさせて大原を見た。大原は茜にニコツとしてから、

「捜査本部は、怨恨の線で捜査を進めていますが、わからないのは救急車をどうやって調達したのか、なんですよ」

「そんなに精巧なものだったの？」

葵が尋ねた。大原は頷いて、

「外見は完全に本物と同じで、色が違うだけだったようです。そして、中から出て来た救急隊員も、隊員服の色が違っていただけで、ストレッチャーから中の装備まで全て本物と同じだったようです。

現場にいた医師や看護師が証言しているので、間違いないと思います」

「ただの怨恨による殺人に、そこまで手間暇かけるバカはいないし、かけられる奴は少ないわね。第一、そんな事をしてどんな意味があるのか」

葵はコーヒーカップを手を取って言った。

「そうなんです。疑問は尽きないんです。犯人が誰なのか以前に、どうしてこんな事をしたのか。そしてどうして後小松総合病院は黒い救急車が現れた事を隠そうとするのか？」

「答えはこれからわかる……。もしかして、事件はまだ終わらないんじゃないの？」

葵の言葉に大原と美咲はギョツとした。茜はピクンとして大原を見た。

「何か意味があるはずなのよ、黒い救急車を使った……。犯人の大きくじりは、そんな大掛かりなやり方を選んだ事そのものなのかも知れないわ」

葵はさらに、

「それで、黒い救急車の事は抜きにして、金村医師を殺す動機のある人間はいるのかしら？」

「殺したい程憎んでいたかはわかりませんが、動機らしきものを持っている人物はいます」

大原の言葉に葵達は彼を見た。彼は美人三人に一斉に見つめられて照れた訳ではないだろうが、一瞬たじろいで、

「金村医師の同僚の海藤充。医療に対する見解で対立していたようです」

「対立？」

茜は鸚鵡返しに尋ねた。大原は頷いて、

「金村医師は、医は仁術を地でいくような人だったようです。ところが海藤医師は医は錬金術の人らしくて、手術方法を巡って対立が尽きなかったようです」

葵は金村医師と菖蒲に恋愛関係に陥る共通点がないような気がしていた。金村医師は医者鑑のような人だ。それに対して菖蒲は確かに腕はいいが、性格が悪過ぎる上、人情より金に動くタイプだ。どう考えても、これは菖蒲の一方的な片思いではないかと思った。「でもいくら対立していたとしても、殺そうとは思わないわよね」

葵は大原を見て言った。大原は真剣な顔で、

「そうなんです。動機にはなるかも知れませんが、実際に殺人を犯すほどの事ではないんです」

「そうよねエ」

葵は腕組みしてシートから身を乗り出し、

「金村医師の死因は？」

「鈍器による撲殺です。頭骨が陥没する程強く殴られていました。そして、近くの河原に置き去りにされていたんです」

大原の言葉に茜はグクツとした。美咲が、

「都市伝説通りですね。黒い救急車の手口と一緒にです。但し、都市伝説の方は死因は特定できないんですけど」

と言い添えた。葵は美咲を見て、

「都市伝説では、黒い救急車がターゲットを連れ去ってから遺体が発見されるまでの時間に決まり事はあるのかしら？」

美咲は葵を見て、

「特にないようです。数日後としかどのサイトにも書かれていませんから」

「死因が特定できないのよね、確か」

「ええ」

美咲はキョトンとして葵を見た。葵は腕組みを解いて髪を掻き揚げ、

「どうして死因が特定できないのかは書かれていないの？」

「それも書かれていませんね。怪奇現象っぽくするために死因が特定できないとされているだけなのかも知れません」

「うーん」

葵はコーヒーを一口飲んでから、

「黒い救急車って、本当に都市伝説なの？」

「えっ？」

美咲は葵の意外な疑問にビックリした。大原と茜も意表を突かれたのか、顔を見合わせた。

「私にはそうは思えなくなってきたのよ。黒い救急車の都市伝説は、この殺人事件を起こそうと考えた者が作り出した、殺人予告の話なんじゃないかって思ったんだけど」

奇想天外とも言える葵の話に茜が、

「黒い救急車の都市伝説は何年も前からあるんですよ。そんな前から殺人を犯そうとしていたのに、どうして今になって決行したんですか？」

と反論した。葵は真剣な眼で茜を見て、

「準備に時間がかかったんじゃないの？」

「へっ？」

茜はあっさり反撃されたので、言葉が出なかった。すると考え込んでいた美咲が、

「考えられない事ではないです。黒い救急車の都市伝説は、突然ネットに流れ出して、あちこちの掲示板に書き込まれ、非常に短時間に広まった形跡があるんです」

「えっ、そうなんですか？」

茜は意外そうに美咲を見た。大原が頷いて、

「捜査本部の中にも、そんな事を言っていた人がいたらいいですね。どちらかと言うと、都市伝説を利用した殺人という発想より奇想天外ですが、あり得なくはないですよね」

と言った。そして葵を見て、

「どうしてそう思われたんですか？」

葵は肩を竦めて、

「あまり根拠らしい根拠はないんだけど、この黒い救急車の話、何か酷くあいまいなのよ。都市伝説って、話は荒唐無稽なのが多いけれど、変な所が律儀で、三日後に死ぬとか、必ず同じ死に方をするとか、法則性があるのよね。作り話だからこそ、そういう傾向が現れるのだから」

「でも、黒い救急車が現れてっていうところに法則性があるじゃないですか」

と茜が膨れっ面で反論した。葵は呆れ顔で茜を見て、
「だから、根拠らしい根拠はないって言ったでしょ。何となく、都市伝説とは異質な感じがするって思っただけなのよ」

「そうなんですか……」

茜はあまり納得していない。大原が、

「とにかく、どちらにしても、この事件は何か裏があるようですし、いろいろと複雑な様相を呈しているようですので、僕も探りを入れてみます」

「連絡は茜の携帯にね」

と葵が言ったので、茜はビックリして彼女を見た。実は美咲が以前、「大原さんからの連絡は、茜ちゃんの携帯にするように言って下さいね」

と言われていたからなのだ。別に葵が茜に対して気を遣った訳ではない。彼女は今でも茜と大原がいい関係だとは思っていないのだから。

「わかりました」

大原はそう答えてから茜を見てニッコリした。茜もニッコリした。

「それから、捜査本部に高校時代の先輩がいるって言ってたわね」

葵が唐突に切り出した。大原はハッとして葵を見た。

「ええ。それが何か？」

「名前教えてくれない？　こちらからコンタクト取りたいんだけど」

「はア、構いませんが。どうするんですか？」

大原が不安そうに尋ねた。すると葵はチラッと美咲を見て、

「色仕掛けよ、色仕掛け」

「ええっ!？」

葵の視線に気づいた美咲が、大原と同時に大声を出した。

第三章 崩せないアリバイ 10月1日午後2時

「どうして私を見たんですか？」

美咲が疑惑の眼差しを葵に向けた。葵は愉快そうに微笑んで、

「だってエ、初対面の男の人を一撃で落とせるのは美咲だけだし」と急に10歳程若返った口調で言った。茜がそれを受けて、

「そうですねエ。美咲さんてば、初対面の男子には無敵ですからねエ」

と同調した。大原は苦笑いして、

「僕の先輩は、高校時代から筋金入りの硬派なので、そういう作戦は成功しないと思いますよ」

「それは普通の女子だからよ。神無月大佐にかかれば、どんな難攻不落の要塞もあつと言う間に陥落しちゃうわよ。大原君、試してみる？」

葵が冗談でそう言うと、茜が仰天して、

「や、やめて下さいよオ、所長！ 美咲さんが相手じゃ、私惨敗しちゃいますウ」

「ハハハ、そうかもね」

二人が面白がっているのを美咲は呆れて見ていた。

「ホントにもう……」

すると大原は全員が凍りつくようなことを言った。

「僕は、大人の女性は苦手なんですよ」

「……」

葵と美咲は目が点になってしまった。茜は何とも複雑な顔をした。

「多少は自覚してたんだ、大原君……」

葵がやつとそれだけ言った。

警視庁管内のとある所轄署のロビーは、「後小松総合病院殺人事件」のせいで、いつになくごった返していた。普段はそれほど出入

りしない新聞記者やテレビ局のクルー達が屯（たむろ）している。外には野次馬もいる。大した用もないのに建物の中に入って来る人間もいた。「黒い救急車」の事は伏せられてはいたが、ネットではそれとなく噂され、知っている人は知っているといるという状態だった。

「邪魔な奴らだ」

ロビーにいる連中を見渡して、1人の刑事が呟いた。彼の名は皆村秀一（むかしゅういち）。どちらかというと「強面（こわもて）」の部類に入る、バリバリの現場担当。今回の事件の捜査本部の一員で、後小松総合病院の胡散臭さに不満を持つ男だ。ガタイの良さとその面構えで、取り調べと聞き込みにはかなり長けていたが、どうしても先走る癖があり、上層部には煙たがられている。それでも彼が捜査本部から外されないのは、年齢（まだ28歳）の割に高い検挙率を誇っていたからだ。

「何も話す事はないですよ」

皆村に気づいたマスコミの連中が彼に群がるが、皆村は何も答えず、ロビーから奥へと歩を進めた。その時女性警察官が、

「皆村さん、警察庁の大原さんから紹介された方がいらしてますよ」と声をかけた。皆村は鬱陶しそうな顔で、

「ああ、そう言えば、そんな連絡受けたな。面倒臭いから適当にあしらってよ」

「何言ってるんですか。署長もご存じなんですから。ちゃんと応対して下さいね」

女性警察官はムツとして言い添えた。皆村は肩を竦めて、

「へいへい」

と応じると、その紹介された人物が待っている応接室に向かった。

「大原の奴、俺が死ぬ程忙しいのに、変な事言って来やがって……」皆村はブツブツ言いながら応接室のドアを開いた。パーティーションの磨りガラスの向こうに薄らと人影が見えた。

（女？）

髪が長いのはわかった。

（　　）　　「ったくよオ、大原の奴、どんなところに頼まれたんだよ。ちょっ

と怖い顔して話せば、すぐに帰るだろう」

皆村は頭の中でいろいろと作戦を考えてパーティーションの向こうに回り込みながら、

「時間がありませんので、手短にお願いしますよ」

と言ってその女性の座っているソファの反対側に腰を下ろした。

「……」

皆村は固まってしまった。そこにいたのは、ガサツで軽薄な女性記者ではなく、深窓の令嬢のような上品なスーツ姿の女性。しかも自分のタイプと真ん中だったのだ。

（や、やばい……）

皆村は決して女性が苦手な訳ではない。普通に話くらいはできる。しかし、それがタイプの女性だと全然違ってしまふ。もうまともに顔を見る事が出来ない。話をするなんて絶対無理。

「ご迷惑をおかけします。なるべく短くすませるように致しますので、よろしく願います」

もちろん、その女性とは神無月美咲。別名「撃墜女王」（水無月葵談）。美咲はゆっくりと頭を下げた。皆村は卒倒しそうだった。

（ひーっ、仕草が全部素敵過ぎる……）

皆村が全然自分の方を向いてくれないので、美咲は少し悲しくなってしまうた。

（そんなに私の事が嫌なのかな？ 所長の作戦が裏目に出たのね）

葵の「色仕掛け作戦」の内容はこうだ。

硬派で鳴らしている男は、清纯派に弱いはず。美咲はそんな男のストライクゾーンと真ん中の存在だ。だから、彼女が何を訊いても全部答えてくれる。捜査上の秘密でさえ、聞いてもいい事まで全部話してくれるだろう。

（そんな簡単に行くワケないのよ。所長は男性を見くびり過ぎだわ）

美咲は皆村が顔を俯かせたままなので、何とかこっちを向いても

らおうと思ひ、

「大原さんから聞きました。甘いものが好きだそうで。どうぞ後で皆さんでお召し上がり下さい」

と近くの和菓子屋で購入した饅頭の詰め合わせをテーブルの上に置いた。しかし皆村は、

「あ、ありがとうございます」

と相変わらず美咲の方を見ないで答えた。とうとう美咲は我慢できなくなり、

「あの」

「はい？」

皆村はそれでも俯いたままだ。

「そんなに私の事が嫌なんですか？」

「へっ？」

皆村はビクツとした。

（やべ、彼女を不愉快にさせちまったぞ……。大原に言いつけられて、俺は署長に大目玉だ。それは困る。でも顔を見るのは無理だ。眩し過ぎる……）

ここまで来るともうバカである。皆村はその時はたと気づき、ジヤケットの内ポケットからサングラスを出してかけた。

（これで何とか……）

皆村はゆっくりと美咲の方を見た。美咲は皆村が何故いきなりサングラスをかけたのか理由がわからないので、呆気に取られていた。「さて。何でも訊いて下さい」

皆村は引きつったような笑顔で美咲に言った。

（しっかし、これでもまだ眩しい……。ホント、女神みたいな人だ）

皆村には美咲がどんな風に見えているのだろうか？ 美咲はニツ

コリ微笑んで、

「ありがとうございます。ではお尋ねします」

皆村は居ずまいを正した。美咲は真顔に戻り、

「後小松総合病院殺人事件の事についてなのですが、疑わしい人物はいるのですか？」

と尋ねた。皆村も真剣な顔で、

「容疑者とまでは言えませんが、それに近い存在の人物はいますね」「それはどなたですか？」

皆村は危うく、

「そんなこと教えられるわけねえだろ、何考えてるんだ？」

と言いつうになつたが、こちらを見ている美咲の眼は、今にも泣き出しそうにウルウルしている。実は美咲の目は元々ウルウルしているのだが、知らない男には泣きそうな瞳に見えてしまうのだ。葵はこれを「悪魔のウルウル」と呼んでいる。皆村はその瞳にまさしくノックアウト寸前だった。彼は遠のきそうな意識を何とか保ちながら、

「海藤充。同僚の外科医です。ガイシャとは悉く対立していたようです」

「そうなんですか」

美咲はごく普通に相槌を打っただけなのだが、皆村はもはや神無月教の熱狂的な信者になつてしまつていて、

「もつと詳しく教えて下さい」

と言われたような気がしてしまった。

「しかしですね、動機はあるんですが、厄介な事がわかりまして……」

「厄介な事、ですか？」

「ええ」

皆村は、まるでスキューバダイビングをしていた人が、酸素ボンベの故障で慌てて海上に顔を出した時のようにゼイゼイと息をした。（ダメだ。限界に近い。どうすればいい？）

皆村は美咲と話す事に息苦しさを感じていた。美咲は皆村の様子がおかしいので、

「あの、お身体の具合が悪いのですか？」

と小首を傾げて尋ねた。皆村はそれを見てしまった。まさしくそれは「悩殺」ポーズに等しかった。

「い、いえ、そんな事はありません。ちょっと失礼します」

皆村はバツと立ち上がると応接室を飛び出し、男子トイレに駆け込んだ。

「畜生、何であんなに綺麗な人がこの世にいるんだ？」

皆村は手洗い場で顔を洗い、火照る自分を冷やそうとした。

「よし！　なるべく彼女を見ないようにしよう。サングラスをうまく使えば、どっちを見ているのかわからないだろう」

皆村は意を決して応接室に戻った。

「申し訳ありません」

皆村は美咲を視界に入れないようにしてソファに座った。美咲は何が何だかわからない状態だったが、話を進める事にした。

「厄介な事って、何ですか？」

「あ、ああ、そうでしたね」

皆村は自分が何を話したのか思い出すのに手間取ってしまった。

「ガイシャが拉致された時、海藤はその場にいたんです。他の目撃者と共にガイシャが連れ去られるのを見ているんですよ」

「という事は、犯人ではあり得ないのですね」

皆村はつい美咲を見てしまいそうになるのを必死で堪えながら、

「そうです」

美咲はちよつと考える仕草をしてから、

「金村さんが殺害された日時はどうですか？　その時もアリバイがあるのですか？」

皆村は顔を美咲に向け、視線だけ下に向けて、

「はい。海藤は、金村氏が拉致された当日、アメリカに出張しています。帰国したのは、金村氏の遺体が発見された翌日です。つまり、昨日まで日本にいなかったのですよ」

「……」

美咲はちよつと驚いていた。

（ 拉致された日にアメリカに行つて、遺体が発見された翌日に帰国なんて、都合が良過ぎるアリバイね ）

「 出入国管理局にも照会しましたが、海藤は確実に渡米していました。完璧なアリバイがあります。直接手を下す事は不可能なんです。作つたようなアリバイですね 」

美咲の言葉に皆村は苦笑いして、

「 確かに作為が感じられますが、海藤が実行犯でない事は動かし難い事実です。こればかりは、どうする事も出来ません 」

「 そのようですね 」

美咲は完全に探偵モードに入っていた。さっきまでの「 悪魔のウルウル 」は消え失せ、今度は凜々しい顔だ。皆村はそれをつい視界に入れてしまった。

（ この人、泣いても怒っても笑つてもど真ん中だ…… ）

神無月大佐はこうして皆村を完全攻略してしまった。しかも全く無意識のうちに。

「 あの 」

美咲が声をかけると、皆村はビクツとして彼女を見た。

（ しまった、真正面に…… ）

皆村は美咲の顔をまともに見てしまった。意識が遠のきそうだったが、

「 な、何でしょうか？ 」

と問い返した。美咲は何故か申し訳なさそうな顔で、

「 捜査資料とかを見せて頂く事は出来ますでしょうか？ 」

普通ならテーブルを蹴飛ばして、

「 巫山戯るな！ 何でてめえにそんな大事なものを見せなくちゃならねえんだよ！ 」

と怒鳴りつけるはずだが、今の皆村にそんな発想はなかった。

「 ちよつと待って下さいね 」

と言うや否や、彼は応接室を飛び出し、捜査本部のある第一会議室に走った。そしてそこにある山のような書類を抱えると、他の刑事

達が啞然としている中、美咲の下へと駆け出した。

「どうぞ。お持ち下さい」

美咲はその書類の山を見て呆気にとられた。

「いえ、あの、これ、資料の原本ですよ？ 持ち出すのはまずい
のでは？」

「大丈夫です。大原に頼んで全部うまくやりますので。お役に立て
て下さい！」

何故か皆村は敬礼して言った。

「はア」

美咲はどう答えていいのかわからない状態で皆村を見上げた。

「やっぱり、良くないですよ、捜査資料の持ち出しは。これ、ここ
で全部目を通しますので」

「はっ？」

皆村は美咲の返答に仰天した。そこにある資料は、仮に分速10
00文字で読んだとしても五時間はかかる量だ。

「そう言えば、自己紹介もしていませんでしたね」

美咲は立ち上がって名刺を差し出した。

「水無月探偵事務所の神無月美咲と申します」

「あ、自分は刑事課の皆村秀一です」

皆村は慌てて名刺を探して美咲に差し出した。美咲は名刺を受け
取り、

「素敵なお名前ですね」

と葵に言われていた言葉を口にした。皆村は真っ赤になった。

「いや、そんな事は……。貴女のお名前は本当に素敵ですが」

「ありがとうございます」

という返事も葵の仕込みである。

「その、自分はこれから捜査会議がありますので、おそばにいら
れないのですが」

皆村は火照る顔をハンカチで拭いながら言った。美咲はソファに
腰を下ろして資料を見渡し、

「大丈夫です。何かわからない事があれば後程お伺いしますのでどうぞ、会議にいらっしゃって下さい」

「は、はい」

会議は二時間はかかるだろうが、神無月さんが捜査資料に目を通し切るのは早くても五時間後だ。その後もう一度ここに来て話せばいい。皆村は自分が美咲と話せるのを楽しみにしているのに気づいてギョツとした。

（俺、何考えているんだ？）

「では、失礼します」

「お手数をおかけしました」

退室する皆村に、美咲は立ち上がってお辞儀をした。

「皆村、捜査資料をどこに持って行っただ？」

会議室に入るなり、刑事課の課長が怒鳴った。皆村はハツとして、

「いえ、あのその、えーと……」

大バカである。捜査会議があるのに、捜査資料を持ち出して貸してしまうとは。皆村は課長にさんざんどやされ、仕方なしに応接室に向かった。

「返してもらえないか」

彼は落ち込んでいた。美咲にそんな事を言うのも恥ずかしいが、捜査会議があるのに資料を貸した自分を軽蔑されるのではないかとも思った。

「あの」

応接室にそつと入ると、美咲が捜査資料を抱えてパーテーションの向こうから現れた。

「あつ」

皆村は、美咲が捜査資料が必要な事に気づいたのだと思った。

「すみません、それ、必要でした」

「そうですね。でも、間に合って良かったです」

「はっ？」

美咲の言葉に皆村はキョトンとした。美咲はニコツとして、
「全部目を通しました。ありがとうございます」

「……」

皆村は呆然とした。

（嘘だろ？）

「では私はこれで。まだご連絡致します」

「は、はい」

美咲はニコリしたまま応接室を出て行った。皆村は美咲が気を遣って嘘をついたと思ったのだが、資料のところどころに付箋紙が張ってあるのに気づいて、

「本当に読んだっていいのか？」

と驚愕してしまった。

「なるほど。それは鉄壁のアリバイね」

美咲からの報告を受け、葵は椅子に身を沈めて呟いた。茜がコーヒーを出しながら、

「でも、胡散臭いですよね、そのアリバイ」

「そうは言っても、どんな方法を使っても海藤氏に犯行は不可能なのよ。それだけは動かし難いわ」

と美咲が言った。葵は、

「やっぱり、裏があるわね。美咲、後小松総合病院の情報を収集して。まともなやり方だと、何もわからないかも知れないわ」

「そうですね」

美咲は自分の席に着き、パソコンを起動させた。

第四章 医療ミスの巢窟 10月1日午後4時

しばらくしてそれぞれの情報屋からメールが戻って来た。不思議な事にどの情報屋も口を揃えて、

「後小松総合病院は医療界のブラックホールだから、下手な詮索は命取りになる」

という返事で、用を為していなかった。美咲が腑に落ちないという顔で葵を見た。葵は腕組みしてソファに座り、

「うーん。情報屋がここまで尻込みするなんてあり得ないわね。どういうことなのかしら？」

「医療界のブラックホールという例えが一致しているのが気になりますね」

美咲も深刻な顔で相槌を打った。

「手を出してはいけないって事なんですよ。関係ないけどね」

葵は肩を竦めた。

「殺人事件の背景は複雑です。後小松院長がどこまで絡んでいるのか、そして何故金村さんは殺されたのか、何故重要参考人の立場にある海藤氏は完璧なアリバイに守られているのか？ 謎は尽きません」

美咲の言葉に葵はフツと笑い、

「ブラックホールが怖くて探偵事務所は開業できないわ。この事件何としても私達の手で解明するわよ、二人共」

「はい、所長」

美咲と茜は真顔で応えた。

一方大原は、皆村に呼び出されて喫茶店にいた。

「どうしたんですか、先輩？ お忙しいのではないですか？」

椅子に座りながら大原が尋ねた。皆村は煙草を灰皿にねじ伏せて、
「忙しいよ。もう二つ身体が欲しいくらいな！」

「だったらどうして……」

大原が言いかけると、皆村は何故か赤面し、

「お前、どうしてあんな人を俺に紹介したんだよ」

「はっ？」

大原は一瞬何を言われているのかわからなかった。皆村は大原が話を理解していないのにムツとして、

「あの女性の事だよ！」

と大声で言った。店中の視線が集まるのを感じて、大原は、

「先輩、声が大きいですよ」

「うるさいよ」

皆村は酷く苛ついていた。美咲が帰ってから捜査会議に出たのだが、彼の頭から美咲の顔と声が離れず、ボンヤリとしてしまい、何度も叱責されたのだ。

「神無月さんが何か？」

「何かも何も、あれは反則だぞ」

「はア？」

大原はますます訳が分からなくなってしまった。皆村は言いにくそうに、

「か、彼女、俺のタイプだ」

と蚊の鳴くような声で言った。大原は何とかそれを聞き取った。

「そ、そうなんですか」

彼はホッとした。葵の作戦が失敗して、皆村に激怒されるかと思つてヒヤヒヤしていたからだ。

「無理だ」

「えっ？」

また奇妙な言葉である。

「無理つて何が無理なんですか？」

「彼女と何度も顔を合わせたら、俺は多分死んでしまう。それくらいあの人は俺のタイプなんだ」

また蚊が鳴いたのかと思うような声で皆村は言った。

「もう無理なんだ。後はお前が何とかしてくれ」

「いや、それは……」

大原がそう言いかけると、皆村はテーブルに頭をこすりつけるようにして、

「申し訳ない。こんな事を言えば、間にいるお前に迷惑かけるし、署長にも怒られる事はわかってる。でも俺には無理なんだ」

大原はフツと溜息を吐いて、

「わかりました。この依頼を拒絶するのなら、貴方を警察機構から締め出すしかありませんね」

「なっ？」

皆村は思ってもいないことを言われて凍りついた。

「この依頼は絶対に拒否できないんです。どうしても言うのなら、そういう事になります」

大原は冷静な顔で続けた。皆村は驚きを通り越して混乱していた。

「自分はこの依頼を遂行するためなら、誰に何と言われようと、どんな手を使おうと、貴方を逃がしませんよ」

「大原……」

皆村はこれほど熱い大原を初めて見た気がした。

「お前、変わったな」

「そうですか？」

大原はフツと笑い、

「とにかく、続けて下さい。降りる事は許しません」

「……」

皆村は大原を見た。そして肩を竦め、

「わかったよ。続ける。純愛に殉じるのも悪くねえかもな」

「皆村さん！」

大原は皆村とガッチリと握手を交わした。

「正面突破、ですか？」

美咲は葵の提案に仰天していた。葵はソファにふんぞり返って、

「そう。後小松総合病院に乗り込んで、真相を暴くわ」

「そんな事が出来るんですか？」

茜が心配そうな顔で尋ねた。葵は茜を見上げて、

「出来るわよ。意地悪姉さんに協力を依頼してね」

「菖蒲さんが手を貸してくれるとは思えませんが」

美咲が反論した。しかし葵は、

「菖蒲さんは何だかんだ言っても、金村医師の事が好きだったのは確かよ。だから必ず協力してくれるわ。どうしても首を縦に振らないなら、私にも奥の手があるから」

「えっ？ 奥の手、ですか？」

美咲はキョトンとした。葵はニツとして美咲を見た。

「えっ？ 何ですか、今の笑いは？ また私に何かさせるつもりですか？」

「考え過ぎよ。違うわ」

葵は苦笑いした。すると茜が、

「菖蒲さんの事を意地悪姉さんと言う事は、やっぱり所長は篠原さんと結婚するんですか？」

と突拍子もない突っ込みを入れて来たので、葵はビクツとして、

「バ、バカな事言わないでよ。意地悪姉さんは語呂がいいから言うただけで、護と結婚なんてしないわよ！」

と焦り口調で言い返した。

菖蒲は現在出身大学の付属病院にいる。金村もその外科医だったが、後小松謙蔵の引き抜きで後小松総合病院に移ったのだ。

「今私は忙しいのよ。手短かにお願いするわね」

病院の応接室でソファに座りながら菖蒲は言った。向かいのソファに座っているのは、何故か葵ではなく美咲だった。彼女は引きつった笑顔で菖蒲を見た。

「実は、後小松総合病院に行くに当たって、菖蒲さんの紹介状を頂きたくて参りました」

「それは無理ね」

美咲が言い終わるか終わらないうちに菖蒲は答えた。あまりにも早い拒絶に美咲は啞然としたが、

「何故ですか？」

「私は後小松総合病院の誘いを断わっているの。そのために後小松院長には相当怨まれているわ。だから私が紹介状を書いても、何のメリットもないわよ」

「そうなんですか」

美咲は菖蒲の答えに納得した。しかしこのまま帰ったりしたら、葵に何と言われるか分からない。

「わかりました。ではこの依頼はなかった事に致します」

美咲は賭けに出た。菖蒲はムツとした表情で美咲を睨んだ。

「何、その言い草は？ 依頼をなかった事にする？ 誰に向かってそんな事を言っているのか、わかつているの？」

「はい。ご協力いただけなのなら、この依頼の遂行は無理です。ですから、お断わりするしかありません」

「……」

菖蒲は苦虫を噛み潰したような顔をした。悔しいのだ。だが彼女は、葵にそれほど高圧的に依頼を受けるように迫った手前、そう簡単に

「わかったわ」

とは言えない。美咲の作戦勝ちだった。菖蒲はまさに美咲のまいたエサに食いついてしまったのだ。彼女は真剣な顔で、

「紹介状は書く。でもそれは後小松院長宛ではないわ。弁護士に書くわよ」

「弁護士、ですか？」

菖蒲は立ち上がった、

「松木麗奈。医療関係専門の弁護士よ。今は後小松総合病院の医療過誤訴訟を準備しているわ」

「医療過誤訴訟を？ でもそれは後小松総合病院と敵対している弁

護士の方ですよ？ そんな方を紹介されても……」

「彼女は海藤の医療ミスを調査しているのよ」

菖蒲の言葉に美咲はハツとした。

「麗奈が会いたいと言えば、後小松院長は嫌とは言わないはず。あいつは麗奈を抱き込もうといういろいろ画策しているから、守って欲しいのよ」

「守る？」

菖蒲は美咲の隣に腰を下ろして、

「そう。海藤の医療ミスは、金村君も知っていたわ。麗奈にその事を話したのは金村君なの」

「その事、警察に話しましたか？」

「誰が話すものですか。連中は私の話を全く無視したのよ。信用ならないわ」

菖蒲の顔がまた険しくなった。

「海藤は医療ミスをたくさんしているらしいの。後小松総合病院は、医療ミスの巣窟だと金村君から聞いたわ。後小松院長がそれを全部握り潰しているという噂なの」

「それが金村医師殺害の動機だとすれば……」

「後小松院長も絶対にこの事件に絡んでいるわ」

菖蒲はキツとした顔で美咲を見た。美咲はニツコリして、

「菖蒲さん、本当に金村さんの事を愛していらしたのですね」

「な、何を言っているの、美咲。今度そんな妄言を口にしたら、私も怒るわよ」

「はい」

菖蒲が何時になく焦った様子で言い返したので美咲は笑いを噛み殺して返事をした。美咲が笑いを我慢しているのに気づいたのか、菖蒲は不愉快そうな顔になった。

「とにかく、麗奈の事務所に行ってちょうだい。彼女なら必ず貴女達の力になってくれるわ」

「わかりました」

美咲は菖蒲から紹介状を受け取ると、大学病院を後にした。

「松木麗奈、か。美咲なら大丈夫かな？」

葵は携帯を切るとそう呟いた。茜がそれを聞き逃さずに、

「それ、どういう意味ですか、所長？」

「松木弁護士は有名な……」

と言いかけ、口を噤んだ。茜はムツとして、

「何ですかア？ どうして言うのやめたんですかア？」

葵は肩を竦めて、

「あんたには刺激が強いかと思って言うのを躊躇^{ためら}っただけど、そこまで言うなら教えてあげるわ」

「えっ？」

葵の意味深長な言葉に、茜はギクツとした。葵はニヤリとして、

「松木麗奈は女性が好きなの。要するにレスビアンて奴ね」

「ええっ!？」

茜は美咲の行く末を想像して驚愕してしまった。

「美咲さんが危ないじゃないですか！ すぐに助けに行かないと！」

茜はバッグを肩にかけ、今にも事務所を飛び出しそうな勢いで言った。すると葵は、

「心配いらないうて。松木麗奈も神無月大佐の敵じゃないから」

「えっ？ 美咲さんてば、そっち系の人にも強いんですか？」

茜が目を見開いた。葵はフツと笑い、

「神無月大佐は無敵よ。多分松木弁護士も陥落しちゃうわ」

と答えた。

その頃、話題の人である「神無月大佐」は、銀座の一等地にあるオフィスビルの最上階にいた。そこに松木麗奈の事務所がある。

「医療過誤訴訟が専門の正義感の強い弁護士のはずなのに、どうしてこんな凄いビルに事務所を構えられる程収入があるのかしら？」

一般論として、医療訴訟で患者側に立つ弁護士は採算を度外視し

て戦うタイプが多い。美咲は、経営状態が良くない事務所をいくつか知っているのだ。そのため不思議に思いながら麗奈の事務所のドアフォンを押した。

「どちら様でしょうか？」

事務員の女性らしき声が尋ねた。美咲はコホンと小さく咳払いをして、

「水無月探偵事務所の神無月と申します。皐月菖蒲さんの紹介で参りました」

「お待ち下さい」

その言葉の直後にドアのロックが解除される音がした。

「どうぞお入り下さい」

美咲はドアノブを回してドアを開き、中に入った。

「えっ？」

美咲は一瞬ドアを間違えたかと思った。内装がまるで「ファンタジー」だったのだ。いや、「メルヘン」の方が近いかも知れない。何しろ、壁一面少女趣味全開の壁紙。可愛い動物達が楽しそうに駆け回っている絵が描かれている。

「……」

言葉を失うとはまさにこういう事を言うのだろっ、と美咲は思った。

（託児所を兼ねているのかしら？）

彼女は本気でそう考えた。

「お待ちしております。松木は只今電話中ですので、こちらでお待ち下さい」

先程ドアフォンで応対したと思われる紺の制服を着た女性が美咲をソファに案内した。

「はい」

美咲は導かれるままにソファに腰掛けた。松木麗奈がいるのは、彼女が案内されたソファの横に設置されている白いパーティーションの向こう側のようだ。麗奈の声は丸聞こえだった。

「はい。わかっております。はい。それも承知しております」

麗奈の声はまるで舞台女優のように良く通る声だった。

「できません。どれほどの額を提示されても、取り下げは致しません。これ以上お話されてもお互い時間の無駄になりますよ」

その言葉は若干の毒を含んでいた。相手は被告側の弁護士だろうか？

「いいえ、もうお電話下さらなくて結構です。法廷でお会いしましょう」

ガチャンと受話器を置く音がした。続いてコツコツと靴音がし、パーティションの向こうから松木麗奈が現れた。ショートカットの黒髪に切れ長の眼。その知性を象徴するような高い鼻。優れた弁舌を繰り出しそうな唇。淡いピンクのスーツとタイトスカート。モデルのような細く長い脚。その容姿は美咲に決して負けていなかった。この場に皆村がいたら、瞬殺されているだろう。麗奈は皆村の好みではないかも知れないが。

「お待ちしてましたア。神無月さんですね？ 私が弁護士ひまわの松木麗奈です。麗ひまわしいに奈良の奈と書きます」

麗奈はニコニコしながら名刺を差し出した。美咲は慌てて立ち上がって微笑み、

「神無月美咲と申します。お忙しいところ申し訳ありません」

と名刺を取り出した。その時美咲は麗奈の様子がおかしい事に気づいた。

「どうされたんですか？」

麗奈はドサツと向かいのソファに倒れ込むように座り、グッタリとしてしまった。

「お身体の具合が悪いのですか？」

美咲はビククリして麗奈の横に座って麗奈の顔を覗き込んだ。

「貴女、私の好みだわ。今度一緒にお酒飲みませんか？」

「えっ？」

美咲はギョツとして身を退いた。思いもしない方向にボールが飛

んで来た時のバッターのようだった。麗奈の発言は、美咲にとってデッドボールスレスレである。

「ど、どういう事ですか？」

その手の類いの話に疎い美咲は、真顔で尋ねた。麗奈はウツトリとした顔で美咲を見て、

「もうダメ。貴女を見ていると、私の名前が恥ずかしいわ。麗しいに奈良の奈だなんて、とてもおこがましく思えて来るの」

「そんな事ありませんよ。お名前通りの女性ですよ、松木さんは。私なんて全然敵いません」

「その謙虚さも素敵。もう私、貴女にメロメロよ。菖蒲も罪な事をしてくれたわ。貴女のような人を私に紹介したりして」

麗奈のその言葉に美咲はハツとして、

「ああ、そうでした。菖蒲さんからの紹介状です」

「いいわよ、そんなもの。どうせロクな事書いてないんだから。それより、貴女のところのボスは元気？」

麗奈は美咲から菖蒲の紹介状を受け取ると開ける事なくポイント投げ捨ててしまった。

「えっ？ 水無月をご存じなんですか？」

「ええ。護君の彼女でしょ？」

「……」

美咲は苦笑いした。そして、

「篠原さんとも面識がおありなんですか？」

「もちろん。彼が篠原さんのところに養子に入っただのは私の紹介でなの。だから良く知っているわよ」

「はア」

篠原は元々「皇月姓」である。諸々の事情から養子になったのだが、その理由はおいおいわかるだろう。

「護君も早いと結婚すればいいのにね、貴女のこの所長と」
「はア」

美咲は苦笑いを続けるしかなかった。すると麗奈はその様子に気

づいて、

「さてと。飲み会の件はまた後で話す事にしてと。本題に入りましょうか」

「はい」

麗奈が弁護士の顔に戻ったので、美咲は向かいのソファに移動して居ずまいを正した。そこへ事務員の女性がコーヒーマグを持って来た。「どうぞ」

「ありがとうございます」

美咲がそう言うと、その女性は顔を赤らめてそそくさと立ち去ってしまった。

「ごめんなさいね。彼女も貴女にヤラれちゃった一人なのよ」

麗奈がニコツとして凄い事を言った。美咲はポカンとしてしまった。

（あの事務員さんも女性が好きなのかしら？）

「後小松総合病院には何のために行くの？ 菖蒲からは詳しい話は聞いていないのだけれど」

「殺人事件の事でお尋ねしたい事があるんです」

「金村医師の事件ね。菖蒲が頼んだんでしょ？」

「はい」

「あいつ、金村医師にベタ惚れだったのよ。私が金村医師と訴訟の事で会っていたのに誤解して大騒ぎだったんだから」

「そうなんですか」

菖蒲の普段の言動からは想像もつかないような話である。嫉妬に狂って冷静さを失っている菖蒲を見たら、葵は大喜びするだろう。

「普段の言動からは想像できないくらい乙女なのよ、あいつは」

麗奈は嬉しそうに言った。菖蒲はあちこちに敵がいるようだ。

「まア、あんな性格の悪い女の話はやめて、本題に入りましょうか」
さつきもそんなことを言われた気がする。美咲はまた苦笑いした。
「後小松総合病院は医療ミスを連発しているとんでもない医療機関なの。でも院長があちこちに手を回して、それを握り潰しているわ。」

ある遺族は金を積まれて、ある遺族は根も葉もない噂を流されて。とにかく、酷い奴なのよ、後小松謙蔵は」

「医療ミスをしているのが海藤さんなんですよね？」

「ええ」

美咲は身を乗り出して、

「どうしてそうまでして後小松院長は海藤さんを庇うのですか？」

「海藤を庇っていると言うよりは、自分の信奉者を守っていると言った方が正しいわね。あのジイさんの最終目標は、東京の私立病院の制覇らしいから。医は錬金術の権化なのよ」

麗奈はソファにふんぞり返って脚を組んだ。美咲は更に、

「金村医師は貴女と医療過誤訴訟を起こそうとしていたのですか？」

「正確には私が起こそうとしていたのよ。ある遺族の話を聞いてね。それで大学の悪友である菖蒲に金村医師を紹介してもらった訳。あいつ、それを口実に私にくつついて来て、金村医師と話をする機会を得ようとしていたの。バカでしょ？」

麗奈は肩を竦めて笑いながらそう言った。美咲は愛想笑いをしながら、

「松木さんは黒い救急車が来た時、現場にいらっしやいましたか？」

「麗奈って呼んでよ。苗字で呼ばれるのって、何か疎外されてる感じがしちゃうから」

「はア」

菖蒲の同級生なら葵より年上のはずだが、麗奈は見た目は美咲と同じくらいに見えたし、言葉遣いに至っては茜に近いものがある。

「その時は残念ながらいなかったわ。菖蒲はいたけどね」

麗奈は陽気に答えた。

「菖蒲さんはどうして現場にいたのですか？」

「私も行くはずだったのだけど、急な用事で裁判所に行かなくちゃならなくなったので、通常業務を優先したわ。菖蒲にメールしたんだけど、気が早いあいつはもうすでに後小松総合病院の近くにいたって訳。それで偶然にも黒い救急車を目撃しちゃったのよね」

「警察はその事を伏せているようです」

「みたいね。でもネットで噂されてるし、公式に報道されていないだけで、まさに公然の秘密になってるわ」

「医師会が公開を渋ったとか聞きましたか？」

麗奈はその言葉にニコツとして、

「何故かしらね？ 後小松のジイさんは、どうしてそんな事をしたのかしら？ どう考えたって隠し切れるものではないのに」

「そうですね」

美咲もその点は疑問に思っていた。

「後小松総合病院と黒い救急車は繋がりとお思いですか？」

麗奈はまた駄々っ子のような顔をして、

「そんな他人行儀な言葉遣いはやめてよ、美咲ちゃん。もっとフレンドリーに話しましょう？」

「は、はい……」

「美咲ちゃん」という呼び方は、篠原にしかされた事がない。美咲は本当に麗奈という人物がわからなくなりそうだった。

「海藤は医師免許を金で買ったという噂もある男なの。そんな医者が外科医で、しかも手術を執刀しているなんてとんでもない事よね」
いつの間にか、麗奈は美咲の隣に座って身体を密着させて来ていた。美咲はスツと麗奈から離れ、

「後小松総合病院に一緒に行って頂けますか？」

と尋ねた。麗奈は満面の笑みで、

「もちろん。貴方の願いだったら、何でも聞くわよ」

「ありがとうございます」

美咲は身の危険を感じた。麗奈はそんな事は全然気にしていない様子で、

「でも今日はもう遅いから、やめにして、どこかで美味しいものでも食べましょうか」

と腕時計を見て言った。美咲はこれ以上ここにいるのはまずいと考え、

「わ、私はまだ行く所がありますので、これで失礼します。明日また連絡しますので」

「あらあら、そんな寂しい事言わないでよ、美咲ちゃん。私と貴女の仲じゃないのオ」

麗奈の言動はとても法律家とは思えなかった。

「後小松のジイさんは夜行ってお酒飲ませて喋らせるのがベストなのよ。美咲ちゃんなら秒殺しちゃうかも」

麗奈は楽しそうだが、美咲は頭痛がして来ていた。

第五章 医療界の妖怪 10月1日午後6時

「あらあら、美咲はこのまま後小松総合病院へ直行するそうよ」

葵が携帯のメールを読みながら言った。給湯室から戻って来た茜が、

「美咲さん、はったらき者オ！ 私はもう帰りますけど」

と嬉しそうに言った。すると葵は、

「残念ね、茜。貴女も働き者になってちょうだい」

「えっ？」

葵の不吉な言葉に茜はギョツとした。葵はニヤツとして、

「大原君に連絡して、例の所轄の刑事の事を聞いて来て。美咲の話だと、あまり協力的ではなかったようだから。作戦変えないといけないかも」

大原に連絡するのが仕事とわかり、茜は途端に上機嫌な顔になった。

「わっかりましたア！ 私如月茜は神無月大佐を見倣い、働き者になります！」

と敬礼した。葵はプツと吹き出して、

「何よ、それ。大原君と会うの、嫌じゃなかったの？」

「そ、そんな事ないですよ。嫌だなんて言った事ないじゃないですかア」

茜は妙にソワソワしながら身支度を始めた。葵はキョトンとして、

「茜、ロリコン男は嫌いなんでしょ？」

茜はその言葉にビクツとして、

「き、嫌いですよ。でもオ、大原さんはロリコンじゃないですってば」

「そうなの？」

葵は納得しかねるという顔で応じた。茜は苦笑いして、

「そうですよ。所長は大原さんを誤解してますよ。大原さんは普通の人です」

「ま、奇人だとは思ってないけどさ。でも、今日だって……」

「ファミレスの件ですか？」

茜は携帯でメールを早打ちしながら葵を見た。

「そうそう。大人の女性は苦手だって言ってたじゃないの。あれはロリコンの証明でしょ？」

葵の仮説に茜は反論した。

「大原さんは、美咲さんみたいなお淑やかな女性しとが苦手なんですよ。もつとその、元気がいい、キャピキャピしてる女子が好きなんですよ、きつと」

「そうかなア」

葵は腕組みしてソファにもたれ掛かった。茜は自分の机から離れると、

「大原さん、すぐに会えるそうです。行つて来ます」

と足早にドアに向かった。葵は、

「あつ、私ももう出るから、報告はメールか明日事務所で直接でいいわよ」

「はい」

茜は振り返らずに出て行つた。葵は溜息を吐いて、

「あいつ、最近よくわからないな」と呟いた。

夕闇の中、美咲は麗奈の運転するセダンで後小松総合病院に向かっていた。

「院長はスケベジイさんだから、気をつけてね」

そう言っている麗奈は挑発的な服装に着替えていた。ブラウスのボタンを2つ外し、少しでも屈めば胸が丸見えになりそうだ。スカートも美咲が恥ずかしくなる位短い。スーツの色も淡い紫で、院長の好みなのだろうか？

「それでは襲って下さいと言っているようなものですよって言いたそうね」

麗奈は呆れ顔の美咲をチラッと見て言った。美咲は苦笑いして、「そうは言いませんが。麗奈さんの戦略なのだろうと思っただけです」

「そう」

麗奈は嬉しそうに呟いた。そして、

「後小松院長は色々と怖い方々と繋がりがあるらしいの。多分菖蒲はそれを知って貴女を私に紹介してくれたのね」

「えっ？」

美咲はギクツとした。麗奈はフツと笑って、

「心配しないで。私は貴女達と同じ月一族よ。但し、忍びじゃないけどね」

「そうなんですか」

美咲は意外に思っただけ麗奈を見つめた。麗奈は前を向いたままで、「私も護君と同じで養子なのよ。養子になった理由は今説明してられないけど、貴女なら一族の考えはよく理解しているから、察してくれるわね」

「ええ。月一族の姓のみで血を繋ぐのには限界がありますから、養子・養女を出しているのだとか」

「第一義的にはね。理由はそれぞれの事例ごとに別にもあるわ」

麗奈はまたも嬉しそうに言った。

「私は貴女達のような身体能力がないから、菖蒲が貴女を引き合わせてくれた、と思うのよ、怪力の美咲ちゃん」

「えっ？」

美咲は自分の力を知っている事を告げられ、真っ赤になってしまった。

「ごめんなさい、それは貴女にとってあまり知られたくない情報なのね。もう言わないわ」

「いえ、別に……」

美咲は火照る顔を右手で扇ぎながら応じた。

「院長の後ろには暴力団以上に危険な連中がいるわ。彼は外国のギャング達とも親交があるらしいの」

「ギャング？」

美咲はギョツとして麗奈を見つめた。すると麗奈はニコツとして、「あんまり見つめないでよ、美咲ちゃん。運転操作を誤っちゃうわよ」

「あ、はい」

美咲は前を見た。すると視界に「後小松総合病院」の看板が見えて来た。ライトアップされていて、病院とは思えないような赤地に白の看板だ。

「趣味悪いでしょ。今時品のない飲み屋だってあんな色の看板付けてないわ」

「そうですね」

美咲はクスツと笑った。

（この人、こんな言動しているけど、やっぱり法律家なのよね。改めて一族の懐の深さを感じたわ）

その頃、皆村は美咲が張った付箋紙の箇所を賢明に調べていた。彼は他の刑事に美咲の付箋紙を見られないように全て剥がし、どこに張られていたのかメモしておいた。もう署内には当番の者しかない。捜査本部の人間は全員聞き込みに出かけた。

「これは……？」

皆村は一つの付箋紙に目を留めた。

「目撃者の証言が黙殺されている？」

臯月菖蒲のことだ。しかしその名前は記されていない。

「確か、現場でも大声で捜査本部の連中に食ってかかった女がいたな」

あんな女、美咲さんに比べれば……。

（俺は何を考えているんだ？）

皆村は自分が何かというと美咲の事を引き合いに出して考えている事に気づき、赤面した。

「何かと黒い噂が絶えない後小松総合病院。医師会の圧力。何かあるな？ 捜査本部も真剣に調べている様子がない」

付箋紙を丁寧机の引き出しの仕切りの中に片づけると、皆村は立ち上がった。

「神無月さんは今どこにいるのだろう？ まさか、奴のところには？」
彼は自分に対して言い訳しながら、後小松総合病院に行く事にした。

「もしそうなら、彼女が危ない。後小松は只の医者じゃないんだ」
彼は所轄署を飛び出し、自分の車で後小松総合病院に向かった。

他方、茜は大原とファミレスで会っていた。

「あのオ」

ニコニコしながらもモジモジして、茜は尋ねた。

「どうして待ち合わせ場所、ここなんですか？」

彼女は夜景の見える展望レストランで会いたかったのだ。しかしそんな要求をできるほど茜は図々しくない。

「えっ？ 茜ちゃんはファミレスが好きなんじゃないの？」

「はっ？」

大原の途方もない発言に、茜は完全な間抜け面で応じてしまった。
「え、え、どういうことですか？」

「水無月さんに教えてもらったんだよ。茜ちゃんは高級レストランより、ファミレスの方が落ち着くんだって」

「……」

茜は項垂れてしまった。

（所長め、この怨みいつか必ず……）

しかしそれは絶対に無理だとも思う茜だった。そして、
「ところで、美咲さんが会った刑事さんの事なんですけど」

「皆村さんがどうかしたの？」

大原は真顔になって尋ねた。茜も真剣な顔で、

「美咲さんの印象だと、あまり好意的ではなかったらしいんです。大丈夫なんですか？」

「ああ、それね。大丈夫だよ。別に協力したくないとかじゃないから」

茜はキョトンとして、

「そうなんですか？ 神無月大佐の攻撃に耐えられるなんて、凄い人だなと思ったんですけど」

「ハハハ。全く逆。皆村さんは多分瞬殺されたんだよ、神無月さんに」

大原が陽気に言ったので、茜はホッとした。

「じゃ、作戦は成功したんですね？」

「取り敢えずはね。ただ、皆村さんと神無月さんを直接会わせるのは控えた方がいいな」

「どうしてですか？」

茜はウエイトレスが持つて来たサラダに手を付けながら尋ねた。

「皆村さん、硬派じゃなくて、只の純情派だったんだ。神無月さんはタイプど真ん中だって言ってたよ」

「そうなんですか」

茜はサラダを頬張りながら応じた。大原は微笑んで、

「あの人、もつと頑固な人なのかと思っていただけ、そうじゃなかった。鉄のように見えても、実は脆かったりする場合もあるんだよね」

「そうですね。大原さんはどっちですか？」

茜はフォークを置いて大原を見た。大原は茜がジッと見つめたので赤面した。

「僕はノミの心臓さ。好きな人に見つめられると、何も言えなくなるんだ」

「……」

茜はその言葉を曲解した。

「そうなんですか。そうなんだ……」

彼女はシュンとしてしまった。大原は茜が思ってもいない反応を示したので、ビックリしていた。

「どうしたの、茜ちゃん？ どこか具合が悪いの？」

「はい。胸の辺りがキリキリと締め付けられるようで……」

「ええっ？」

大原は立ち上がって、

「それならすぐに病院に行こう。こんなところで食事している場合じゃないよ」

「美咲さんのところに行きたいんですか、大原さん？」

茜は涙ぐんで尋ねた。大原はキョトンとして、

「えっ？ 何で神無月さんのところに行くのさ？ 病院に行くんだよ」

「だって、美咲さんは後小松総合病院に行ったから……」

大原はそこでようやく茜が何を言っているのか理解した。彼は照れ笑いして、

「僕は大人の女性は苦手なんだよ、茜ちゃん」

と言い、茜をソツとエスコートした。茜は大原に手を握られて耳まで真っ赤になってしまった。

「さ、病院に行きましょうか、お姫様」

「は、はい」

茜は幸せで死んでしまいそうなくらいだった。

「こんな時間にいらっしやるとは、こういう風の吹き回しですか、先生？」

院長室で対面した後小松院長は、美咲の想像どおりの男だった。脂ぎった顔。自分で靴の紐も結べないと思われる程の膨らんだ腹。全部親指に見えそうな太い指。髪が歳の割に黒々としてフサフサなのは、恐らくそういう事なのだろうと推測した。

「あーら、いつもこのくらいの時間に来て欲しいって言ってたの、

院長先生ですわよ」

麗奈は中身が丸見えになりそうなのも気にせず、低めのソファに腰を下ろした。美咲のスカートの丈でもちよつと躊躇するくらいの高さだ。恐らく、院長の「趣味」でこの高さにデザインしたのだろう。

「ほらほら、美咲ちゃん、自己紹介！」

麗奈は隣を叩いて座る事を促しながらそう言った。美咲は仕方なくソファに近づき、

「水無月探偵事務所の神無月美咲と申します」

と院長に名刺を差し出し、腰を下ろした。院長はでっぷりとした腹を摩りながら名刺を受け取り、

「ほオ。探偵さんですか。どういうご関係ですか、松木先生とは？」

「恋人なんです」

麗奈はニツコリして言った。院長もその答えには仰天したようだ。美咲は呆れてしまつて何も言えない。

「何だね、君も女が好きなのか？」

院長は残念そうに美咲を見て言った。美咲も、この場限りはそれでもいいかなと思うくらい、後小松院長の目はエロ親父全開だった。「い、いえ、違います。松木先生とはそういう関係ではありません」根が正直な彼女は、ついそう答えてしまった。そして、院長の視線の先が自分のスカートの裾に集中しているのに気づき、慌ててハンカチで隠した。

「あーら、残念。美咲ちゃんは私より院長先生の方が好みなのね」

麗奈はとんでもない事を言い放った。美咲は慌てて否定しようとしたが、

「ほオ。例え嘘でも嬉しいねエ、探偵さん」

と猫なで声の院長の声を聞き、ギョツとして目を向けた。彼はすでに舌なめずりをしている肉食獣のような目で美咲を見ている。

「それで美人の探偵さん、私にどんな御用ですか？」

院長は片時も美咲のスカートから目を離さずに尋ねて来た。美咲はハンカチでしっかりガードしながら作り笑いをして、

「実は先日こちらの病院でありました、ある事件についてお尋ねしたいのですが」

美咲のその言葉に、院長室の空気が一変した。

「事件？ 何の事ですか？」

院長はようやく視線を美咲の顔に移した。美咲はその眼光の鋭さに一瞬気圧されそうになったが、

「黒い救急車の事件です。こちらの病院の外科医だった金村さんが殺された事件です」

あれほど嫌らしい顔をしていた院長が真顔になり、やがて険しい顔になった。

「その件は警察に全てお話ししました。貴女に話す事は何もありません」

「……」

美咲は麗奈を見た。麗奈はニッコリして、

「あらア、院長つたら、急に怖い顔してエ。麗奈、泣いちゃうからア」

とクネクネしてみせた。まるでキャバ嬢である。しかし院長は麗奈の御機嫌取りに無反応で、

「お引き取り下さい。そのような事で貴女達と話すつもりはありません」

と立ち上がり、ドアを開いた。麗奈は肩を竦めて、

「わかりました。出直します。さっ、美咲ちゃん」

「は、はい」

麗奈はあっさり引き下がり、美咲を促して院長室を出た。

「さようなら」

院長は冷たくそう言うと、ボタンとドアを閉じた。

「すみません、私の段取りが悪かったみたいです」

美咲は小声で麗奈に詫びた。麗奈は歩き出しながら、

「いいのよ。私も最初は院長室に入るまで苦労したから。それに、今回は顔合わせだと思っていたしね」

「はア」

麗奈は始めからすぐに帰るつもりだったようだ。

「美咲さん……」

皆村は、イライラしながらハンドルを握っていた。事故渋滞に巻き込まれ、後小松総合病院まで後もう少しのところで、全く動けなくなってしまったのだ。

「ここまで来て……」

美咲の強さを知らない皆村は、彼女が大変な目に遭っているような気がして、居ても立ってもいられない程だった。

「そうだ。水無月探偵事務所。そこを潰してくれ。報酬は弾む。それから、あの出しゃばり女も何とかしろ。そう。医者も弁護士もだ。目障りだからな」

後小松は携帯に怒鳴っていた。

「私を誰だと思っているのだ。只の医者と思っている奴らには、とことん思い知ってもらうぞ」

彼の目はギラつき、人の命を何とも思わないような兇悪な様相を呈していた。

美咲は麗奈の車で自分のマンションに送ってもらっていた。

「病院で分かれても良かったのですが」

「もう、つれないわね、美咲ちゃん。私にお家^{うち}を知られるのがそんなに嫌なの？」

「いえ、そういう訳では……」

実はそうなのだが、「そうです」とは言えない。

「ふーん」

麗奈はニヤニヤしていた。

「どうしたんですか？」

美咲は麗奈のニヤニヤが気になって尋ねた。

「彼氏でも来るのかなア、なんて思ったのよ」

「いえ、今は誰も……」

「あら、美咲ちゃん、フリーなの？」

つくづく正直過ぎるのはいけないと痛感する美咲だった。

「だったら尚の事、これから食事に行きましょうよ、美咲ちゃん」

「いえ、その、所長に会わないといけないので……」

「じゃあ葵には私から電話しとくわよ」

「……」

もう降参するしかないのか？ 美咲は仕方なく麗奈と食事に行く事を決意した。その時だった。

「えっ？」

携帯が鳴り出した。

「あっ！」

まさしく地獄に仏だった。

「誰？」

麗奈が覗き込んだ。美咲は彼女に携帯を見せて、

「刑事さんからです」

「刑事？」

麗奈はキョトンとした。

「はい、神無月です」

美咲は弾んだ声で応じた。

皆村は、あまりにハイテンションな美咲の声に仰天した。

「あ、急に電話してすみません。今、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。どちらにおいでなんですか？」

ああ、勘違いしそうだ。皆村は自分を必死に抑えた。

「今、後小松総合病院に向かう途中なんです。貴女がそこで大変な目に遭っているのではないかと思います」

「そうなんですか」

確かに違う意味で大変な目に遭ってしまったのだが。

「私、もう病院を出て、自分のマンションに向かっているところなんです」

「そ、そうなんですか」

皆村はホッと一安心したが、その後の言葉を思いつけない。すると、

「あの、皆村さんはもうお食事すませましたか？」

「は？」

思ってもいない問いかけに、皆村はパニックになりそうだった。

「よろしかったら、一緒に食事しませんか？ 今日のお礼もしたいので」

「え、ええっ？」

つい大声を出してしまった。美咲は驚いたようだ。

「あの、ご迷惑ですか？」

「と、とんでもないです。是非、お願いします」

皆村は見えていない美咲に対して深々とお辞儀をした。

「ひどーい、美咲ちゃんたら。私を放置して、男と食事イ？」

麗奈が口を尖らせて言った。美咲は苦笑いして、

「違いますよ。麗奈さんも一緒に。刑事さん、黒い救急車事件の担当の方なんです」

「あらま、そうなの。それは貴重な存在ね」

麗奈はニコツとした。すると美咲は、

「でも麗奈さんの今の服装、あの刑事さんには刺激が強過ぎるよう
な……」

「平気よ。私は気にしないから」

「いえ、そういう事ではなくてですね……」

美咲はこの「暴走列車」をうまく制御できるのか不安になった。

第六章 女達の戦い 10月1日午後8時

「さてと。誰も帰って来ないんだから、もういいかな」

葵は机の上を片づけ、席を立った。

「？」

その時、妙な気配を感じた。

（まさか、星一族？）

彼女は周囲を探った。

「違うか。連中なら、こんな簡単に気配を感じさせないわね。どこかのおバカさんが、命知らずにもここに来ようとしているのか」

葵はニツとした。

「あれ以来、鍛錬は怠っていないし、すっかり回復したから、肩ならしめますか」

彼女は実に楽しそうに事務所を出た。

皆村は剥れていた。しかし、それは心の中だけだ。美咲を前にして、不機嫌な顔など間違っても出来はしない。

「申し訳ありません、先輩。まさか、先輩達がいらっしゃるとは……」

……

大原は気まずそうに言った。

「しょうがないよ、偶然なんだからさ」

皆村は精一杯の作り笑いで応じた。

美咲と食事。死ぬ程緊張すると思った。

ところが美咲と一緒に変な女が現れた。その女までは許せる。二人きりだと何も喋れなくなると思ったからだ。

しかし、向かったレストランに何故か居合わせた大原と子供みたいな女。偶然として片づけるには、あまりにも不自然だ。皆村がどれほど勘ぐっても事実は事実。どうする事も出来ない。

「……」

同じテーブルに着いた男2人、女3人。妙な緊張感と、えも言われぬ嫉妬心が渦巻いている。

茜は美咲を警戒している。麗奈は大原と皆村を警戒している。皆村は大原を警戒している。複雑な人間模様だ。

「あの、こちらの方は？」

麗奈は警戒しながらも美咲に尋ねた。美咲は苦笑いをして、

「そちらの女の子が私の職場の同僚の如月茜さんです。そして、そのお隣が警察庁の大原統さんです」

「なるほど」

麗奈は嬉しそうに微笑んだ。そして、彼女は皆村に目を転じた。

「こちらのその筋の方みたいな怖い目つきの男性は？」

随分と棘のある言い方である。皆村自身、自分の顔が強面なのは十分理解しているが、それを面と向かって、しかも美咲の前で言われたのは心外だった。美咲は苦笑いをして、

「刑事さんです。さっきお話した、殺人事件を担当されている……」

「ああ、そうなの」

麗奈はニコツと作り笑いをして、

「よろしく、刑事さん」

皆村はムカついていたが、美咲の知り合いのようなので、

「こちらこそ」

と応えた。

「皆村さん、この方は松木麗奈さん。後小松総合病院に対して、医療訴訟を起こす予定の弁護士さんです」

「後小松に訴訟？ 弁護士？」

あまりに意外な人物だったので、皆村はアホ面をして麗奈を見た。「あらかじめ申し上げておきますが、美咲さんは私の物ですから」

麗奈の仰天発言に、皆村は息を呑んだ。茜はもう少しで携帯を落とすところだったし、大原は呆気にと取られて麗奈を見ていた。

「麗奈さん、そういう冗談はやめて下さい」

美咲は真顔で言った。麗奈は美咲を見て、

「あら、冗談じゃなくて本気よ」

「……」

美咲は何も言い返さなかった。

「バカ話はそれくらいにして、オーダーをとりませんか」

皆村も負けずに皮肉タツプリの言葉で応じた。

「そうですね、組長さん」

麗奈は更に皆村を刺激した。しかし、皆村はそれには応じず、

「それにしても、最近の弁護士先生は、まるでキャバ嬢みたいな格好でお仕事されるんですね、松木先生？」

「そうですね。私、見ての通り絶世の美女ですから、それを武器にしない手はないのですわ、組長さん、あ、ごめんなさい、刑事さん」

麗奈は一步も退かなかった。茜と美咲は顔を見合わせた。大原は堪りかねて、

「皆村さん、もうその辺でやめてください。松木先生は良き協力者ですよ」

「……」

皆村はムスツとして腕組みをした。麗奈はニツコリして、

「ありがとうございます、大原さん。もう少しで私、泣いてしまいそうでしたわ」

と目を意図的にウルウルさせて言った。大原は苦笑いして、

「ど、どうも」

とだけ言った。

一方葵は、外廊下を歩き、エレベーターの前まで来ていた。

（殺気はまだ感じる。何人？　どんな手合い？）

「おい、その女。お前の所のバカが、俺の知り合いの病院に押し掛けて何やら不愉快な事を尋ねたそうだ。すぐにやめさせる。でないと、痛い目に遭うぞ」

エレベーターの脇から、大男が現れた。どうやら日本人ではないらしい。白人のようだ。「ようだ」というのは、黒い覆面を着けて

いるからである。身長は2メートルを軽く超えている。体重も百キロ以上あるだろう。葵は溜息を吐いた。

「あんた達こそ、私らの事務所がどんなところと付き合いがあるのか調べてから近づいた方がいいわよ」

「何イ？」

男は葵がハツタリを言ったと思い、彼女に掴みかかろうとした。葵はそれを軽くかわした。

「いきなりボディタッチはいけないわよ、おじさん」

「ふざけるな！」

男は激怒し、葵に再び掴みかかった。

「しつこい男は嫌われるわよ、おじさん」

「殺す相手に好かれても仕方なかるう！」

「誰が誰を殺すの？」

葵はせせら笑って尋ねた。男は逆上して、

「俺がお前をだよ！」

と叫び、サバイバルナイフを取り出した。

「あらあら、そんなの持つてると、お巡りさんに職質された時、絶対捕まるわよ」

「うるさい、このバカ女！」

男はナイフを振り上げて、葵に突進した。

「危ないわね」

葵はそれをヒョイツとかわし、よろけて倒れ込む男の背中に蹴りを入れた。

「うおっ！」

巨体の割には脆い男だ。簡単に倒れてしまった。

「このオツ！ バカにしゃがって……。それにしても、その身のこなし、一体何者だ？」

男は立ち上がりながら葵を見た。葵は肩を竦めて、

「探偵事務所の所長よ」

「巫山戯るな！ 探偵事務所の所長が、この俺の攻撃をそう易々と

かわせるものかよ！」

男は激怒したようだ。

「鬱陶しいわね、おじさん。あまりしつこいと、痛い目に遭わせるわよ」

葵は目を細め、仁王立ちで言い放った。

「ほざくな！」

男はまたナイフを振りかざして葵に突進する。

「芸がなさ過ぎよ、おじさん！」

葵はフワツと飛び上がったそれをかわし、

「はっ！」

と首の後ろに手刀を叩き込んだ。

「ぐへっ！」

大男はそのまま前のめりに倒れ、動かなくなった。

「こんなところで倒したくなかったんだけど。後は警察に任せちゃおう」

葵は携帯を取り出し、

「ああ、総監に繋いで。えっ？ 水無月葵よ。五分以内に私の事務所に暴漢を引き取りに来なさいって伝えて」

天下の警視総監が、まるでお使い小僧である。

「バカなの、後小松ってジイさんは？ こんな事して、とっても後悔する事になるわよ」

葵は嬉しそうに倒れている男の上に腰を下ろした。

「さてと」

手袋を着け、服を探る。ポケットに携帯電話が入っていた。しかし、着信も発信も履歴なし。もちろん、電話の登録もなし。

「なるほどね。それなりのプロだけど、私達に挑むにはまだまだレベルが低過ぎたわねえ」

葵は携帯をバッグから取り出したビニール袋に入れた。

「そーれからっ」と

男が握り締めたままのサバイバルナイフをもぎ取る。

「これもつと」

携帯と一緒に袋に入れる。

「ついでに顔も見ておこうかな」

葵は覆面を剥ぎ取った。そして結果を見て後悔した。

「うへ、見なきゃ良かった……。弱い上に不細工じゃ、この世界で生きていけないわよ」

その時携帯が鳴った。

「はい、総監。忙しいのに悪いわね。え？　そう、わかったわ。

それから、後小松総合病院の事件なんでしょう？」

総監は何か言っている。

「そうなんだ。凄いのね、そのジイさん。フーン。天下の警視庁が、手も足も出ないって訳ね」

総監は何やら必死に言い訳しているようだ。

「はいはい。いいわよ、そんなに一生懸命部下達を庇わなくても。

私は別にそんな事を突くつもりはないわ。只、後小松のジイさんには、きつちりお礼に伺うけどね」

今度は慌てているようだ。総監が可哀相である。

「心配しなくて大丈夫よ。警視庁には迷惑かけないから。安心して。じゃ、また」

葵は携帯を切り、次に美咲の携帯にかけた。

「はい」

美咲は天の救いとはかりに葵からの連絡を受けた。彼女は麗奈達に会釈して、席を立った。

「どうしたの、美咲？　人の声がたくさんしてたけど？」

「今、茜ちゃん達と合流して、食事中なんです」

美咲は小声で答える。すると葵は、

「何よ、私だけ仲間はずれなの？　美咲までそういう事するの？」

「違いますよ。後小松総合病院から出て、麗奈さんに自宅まで送るって言われて困っていたところにですね……」

美咲は慌てて弁解した。

「言い訳はいいわよ。場所はどこ？」

葵の声は、有無を言わせないトーンだ。

「はい……」

麗奈と皆村だけで一触即発状態なのに、この上葵まで乱入したら、どうなるかわからない。美咲は逃げ出したかった。

「誰から？」

美咲が席に戻ると、麗奈が小声で尋ねて来た。

「水無月からです」

「へえ。ここに来るの？」

麗奈と美咲の会話を聞きつけた茜が、

「えええ！？ 所長が来るんですかあ？」

と大声で言う。皆村も大原も、茜を見た。茜は注目の的になっている事に気づき、

「あ、いえ、その……」

と口ごもった。

「所長って？」

今度は皆村が大原に小声で尋ねる。大原は苦笑いして、

「水無月葵さんです。綺麗な方ですよ」

「そ、それはどうでもいい」

皆村はギクツとした。

（こいつ、すっかり俺の事を面白がってるな）

彼はムツとして大原を睨んだ。

「何ですかあ、刑事さん？ 大原さんに何か？」

その視線に気づいた茜が、さっきから気に食わなかった皆村に言い放った。

「いや、別に」

皆村にとって、茜は子供にしか見えないので、全然怖気づく要素がない。逆に威嚇するように彼女を見据える。でも茜も強面には経理の専門学校に行っていた頃から慣れているので、全くビビツたり

しない。

（全く、このガキ、いけ好かねえ）

皆村は茜を睨むのをやめて、食事を続けた。

「皆村さんは、茜ちゃんの事が嫌いなんですか？」

大原が小声で尋ねる。茜は麗奈と話しているので、聞こえていないようだ。

「嫌いも何も、彼女の事は何も知らないよ」

「茜ちゃんは、神無月さんの妹分なんですから、あまり苛めないで下さいね」

「え？」

その言葉には反応してしまう皆村。だが何とか気を取り直し、

「そう言えば、お前と彼女、付き合ってるのか？」

と反撃した。大原はニッコリして、

「僕はそのつもりなんですけどね」

「フーン」

皆村は愉快そうに大原と茜を見た。その視線に気づいた茜が、

「何ですかあ、刑事さん？」

とまた突っかかって来た。

「あらあ、何だか貴方達二人って、性格合わないみたいねえ」

酔いが回ってきたのか、麗奈がケラケラ笑いながら口を挟む。

「余計なお世話だ、キャバクラ弁護士め」

皆村が負けずに毒づく。

「そうですね、松木さん。この人とは私は関わりがないんですから、性格が合わないとかは関係ないです」

茜もムツとして反論する。麗奈は陽気に笑い、

「それなら良かったあ！ 人類皆兄弟だから、仲良くやりましょう

！ ね、美咲ちゃん」

「は、はい……」

肩を抱かれて、身の危険を感じる美咲。それを見て気を揉む皆村。

そして葵。ようやく制服警察官が二人到着した。

「後はお願いね。私はこれから食事に行くから」

「はー！」

二人は直属の上司から、くれぐれも失礼のないようにと何度も言われているので、とても緊張していた。葵がエレベーターに乗って降りて行くのを確認すると、長い溜息を吐いた。

「はい、皆村」

本署からの緊急連絡を受け、皆村は席を立っていた。

「何ですって!？」

それは衝撃的な話だった。

「何があっただんですか？」

皆村の様子に気づいた美咲と大原が近づいて来た。大原と美咲が近づいたのを見て、茜もやって来た。そして素早く美咲と大原の間に立つ。

「黒い救急車が現れたそうさ。現場が混乱していて、状況がよくわからないらしい。俺はこれから署に戻るよ。後を頼む」

皆村は一万円札を一枚、大原に渡して立ち去った。

「僕も連絡をとってみよう」

大原は携帯を取り出し、警察庁にかけた。

「茜ちゃん、大原さんをお願いね。私は麗奈さんを送ってから、所長と合流するわ」

「はい！」

美咲と大原が離れるのがわかって、茜はホッとしたようだ。

一方、葵の携帯にも警視總監から連絡が入っていた。

「そう。また現れたの？　ありがとう、總監。ええ、続けるわよ、私達も。邪魔しないから、安心して」

葵にそう言われても返答のしようがない總監である。

「さてと。美咲とは麗奈さんの事務所辺りで合流するとして……」

葵はワクワクする気持ちを抑え、グランドビルワンを出た。

大原は茜と共にレストランを出た。

「これからどうするんですか？」

茜はニコニコして尋ねた。大原は真剣な顔で、

「本庁に戻る。事件の全体像がまだ把握できないんだ」

「そうなんですか」

「茜ちゃんは？」

大原がハンドルを切りながら言った。茜は大原を見たままで、

「もちろん、大原さんと一緒にします」

「ありがとうございます」

大原は照れたように笑い、チラッと茜を見た。

美咲は精算をすませ、レストランを出た。

「？」

妙な殺気が付近に漂っている。

（何？ 誰？）

葵が襲撃されたのは、彼女から聞いた。その仲間がこちらにも現れたようだ。

（後小松院長の差し金？）

美咲は麗奈を車の助手席にさせ、周囲を警戒する。

「この臭いは……？」

硝煙の臭いがした。美咲はすぐさま運転席に乗り込み、車をスタートさせる。

「くっ！」

銃声が響き、麗奈の車のボンネットに跳弾の火花が飛んだ。騒ぎを聞きつけ、レストランから人が出て来る。そのせいか、殺気が消えてしまった。

「逃げた？」

それでも美咲は警戒を解かず、車を走らせた。

「何事？」

普通の揺れ方ではない動きを体験して、麗奈も酔いが覚めたようだ。

「麗奈さん、姿勢を低くして下さい。まだ安心できません」

美咲は前方を見据えたままで言った。

「カッコいい、美咲ちゃん！ 惚れ直したわん」

それでも麗奈はお気楽発言だ。美咲は脱力しそうなのを堪え、

「麗奈さんの事務所に戻ります。ご自宅は危険でしょうから」

「そのようね」

麗奈はようやく法律家の顔になった。

「あのジイさん、とんだ狸ね」

「ええ。今のは本気で殺すつもりで射撃でした。警告ではありません」

美咲も探偵モード、いや、忍びモード全開になっている。

「茜ちゃんも危ないかも知れませんか」

美咲は携帯を取り出し、インカムをセットした。

茜と大原も、何者かが尾行しているのに気づいていた。

「やっぱり来ましたね。所長が襲撃されたから、来るとは思ってたけど」

茜も忍びモードになっており、口調もいつもと違う。大原はルームミラーを見て、

「尾行がわかり易いという事は、僕らに見られても構わないという事かな？」

「でしょうね。殺すつもりなんでしょ、私達を」

茜はそんな事を言いながら、嬉しそうだ。彼女は大原と一緒に戦えるのが楽しくて仕方がないのである。

「命知らずだね、茜ちゃん達に戦いを仕掛けるなんてさ」

大原はニヤリとして言った。茜はニコツとして、
「ホントですよ。バカとしか思えないです」

その時携帯が鳴る。美咲からだ。

「はい。そうですか。こっちにもおかしなのが現れましたよ。わかりました」

茜は携帯をしようと、

「大原さん、仕掛けますね」

「え、茜ちゃん？」

大原は仰天した。茜がいきなり忍び装束に変わると、走っている車から飛び出し、尾行している車に駆け出したのだ。

「あんたら、邪魔！」

相手も驚愕した。まさか走行している車から、人が飛び出して来るとは夢にも思わなかっただろう。

「うわあ！」

茜は装束の懷から煙玉けむりだまを出し、開いている窓から放り込んだ。たちまち車内は煙が充満し、何も見えなくなった。

「あわわ！」

パニックになった運転者はハンドル操作を誤り、付近のガードレールに激突した。

「はい、任務完了！」

茜はしばらく先で停止している大原の車に戻った。

「茜ちゃん、危ないよ」

茜は助手席に乗り込みながら、

「平気ですよ」

「いや、あのやり方は他の人を巻き込むかも知れないから、別の方法が良かったと思うよ」

「あ」

大原が自分の心配をしてくれたのだと勘違いした茜は、作戦にダメ出しされたのに気づき、ションボリしてしまった。

「ごめんなさい」

茜が落ち込んでしまったのを見て、

「あ、いや、何事もなく良かった。そんなに落ち込まないで、茜

ちゃん」

「はい……」

それでも暗い茜だった。

第七章 黒い救急車再び現る 10月1日午後9時

葵は美咲たちより先に麗奈の事務所があるビルの前に到着していた。

（それにしても、私達が関わったその日のうちに事件が動くとはね。黒幕は後小松のジイさんで決まりだろうけど、理由がわからない）
何故後小松院長は黒い救急車の事件を考えたのか？ その点が不明だ。殺人は誰かに実行させているのだろうから、自分に疑いがからない対策は採っているはず。それなのに何故、こんな大掛かりな方法で事件を起こすのか？ しかも連続して？

「もつと何かあるって事か」

葵がそう呟いた時、麗奈の車が目の前に停まった。

「所長、早かったですね」

美咲が運転席から降りるなりそう言った。

「お久あ、葵。元気そうね？」

すっかり酔いが覚めた麗奈が助手席の窓から顔を出す。

「どうも、麗奈さん。危なかったらしいですね」

葵は愛想笑いをして応じた。すると麗奈は、

「私は美咲ちゃんに抱かれて死ぬるのなら、そこが下水道の中でも

OKよ」

「……」

葵は呆れて美咲と顔を見合わせた。

そして事件の黒幕と思われる後小松院長は、何者かと携帯で話していた。

「しくじっただと？ 何をしているのだ！？ 警察は全て抑えている。心配するな。何としても連中を消せ。事業の邪魔だ」

院長は、美咲達に見せた顔を更に凶悪にしていた。彼は携帯を切り、別の相手に向け直した。

「私だ。仕事を急げ。相手は一筋縄ではいかん。もちろん、支援は続ける。しかし、今回の失態は必ず埋め合わせしろよ」

院長は携帯を切り、椅子に座った。

「あの弁護士だけでも鬱陶しいのに、探偵までしゃしゃり出て来るとは……」

彼はこっそり隠し撮りした美咲の写真を見た。

「この女、何者だ？」

院長の眉間に深い皺ができる。

皆村刑事は、署に戻っていた。

捜査関係者達は電話の対応に追われていて、オペレーター達はコンピュータと首っ引きで格闘している。まるで野戦病院である。

「今度はどこですか？」

彼は捜査本部がある会議室に飛び込むなり、刑事課長に尋ねた。

「まだ情報が交錯している。何者かがデマを流しているらしくて、現場が特定できていない」

「ええ？」

皆村は意外な返答に驚いた。

「発信元が特定できない密告電話がかかって来ているばかりでなく、署のメールアドレスにも迷惑メールフォルダが満杯になるほどの量のメールが送られて来ているんだ」

「……」

皆村は、美咲達の事が気になった。

（そんな事ができる連中と関わったりしたら、美咲さんが……）

未だに美咲達が自分達より凄腕だと知らない皆村は、本気で美咲の身を案じていた。

そして警察庁に戻った大原と茜は、大原の部屋に行った。途中、女連れの大原を見て驚く職員達に出くわしたが、大原も茜も一切取り合わず、廊下を進んだ。

「さてと。取り敢えずデータを収集しないとね」

「はい」

大原と茜は、それぞれデスクトップパソコンを起動させた。

「茜ちゃん、パスワードわかる？」

「はい、年中アクセスしてますから」

笑顔でサラリととんでもない事を言つてのける茜に、大原は苦笑いした。

「一応言っておくけど、それ、犯罪だからね」

「はい」

茜は陽気に応じた。大原は溜息を吐き、

「じゃ、頼むね」

「はい」

茜は超高速でキーボードを打ち始める。大原は茜の指のスピードに驚いていたが、

「おっと」

と自分もモニターを見て手を動かす。

「何ですか、このメール？ 警察庁のガードを軽々とかわして、鬼のように攻め込んでますけど」

茜が叫ぶ。大原は頷いて、

「前回の事件の時にも、同じ事が起こってるんだ。どうやら大きな組織が動いているようだよ」

「後小松のジツちゃんが、そんな凄い事できますか？」

茜は当然の疑問を口にした。

「そうだね。いくら医療界を牛耳っている男でも、そこまではできないと思うよ。彼はこの事件の関係者の一人に過ぎないかも知れないね」

大原はキーボードを叩きながら言った。

「どうやら、破壊目的ではなく、混乱目的のようだね。排除を始めた途端、潮が引けるように撤収した」

「引き際が鮮やかです。プロですよ」

茜は大原を見た。

「そうだね。思った以上に厄介な連中だ」
大原も茜を見て言った。

葵達は、麗奈の事務所にいた。すでに事務員達は帰宅し、彼女達の他には誰もいない。

「相変わらず、メルヘンしてるんですね、麗奈さん」

葵は壁紙を見渡して言った。麗奈はコーヒーマーカーの電源を入れて、

「そうよ。私は永遠の少女なの」

とニツコリ笑って言う。そして、

「私達が襲撃されたって事は、菖蒲あやめも危ないんじゃないの？」

「大丈夫ですよ。菖蒲さんには、無料ただで動くボディガードがいますから」

葵はニヤツとして答える。美咲は何故かそれを聞いて溜息を吐いた。

「そっか、護君がいるもんね。頼もしい弟だわ」

どういう訳か、麗奈はクスクス笑っている。

「あいつもお姉さんのガードなんて嫌でしょうけどね」

葵がそう言うと、

「菖蒲のボディガードなんて、誰だって嫌よ。うるさいし、我が儘だし」

麗奈までそんな事を言い出す。美咲は菖蒲に密かに同情した。

「そうですね」

葵はケラケラ笑った。そして、

「ここもそろそろ危ないですから、私の事務所に行きますか、麗奈さん」

「そう？ コーヒーくらい飲んで行けるでしょ？」

麗奈は全然緊張していない。忍びではないが、やはり月一族だからなのだろうか？

「それくらいは大丈夫だと思います」

葵はチラッと美咲を見て答えた。美咲は頷いてドアに走る。

「え？ どうしたの？」

麗奈がそれに気づいて尋ねる。葵は、

「ああ、ご心配なく。まだ敵はこのビルに入った辺りですから」

「そんな遠くなのに感じるの？」

麗奈は葵達の力に驚嘆した。

「ええ。それが仕事ですから」

葵は笑顔で答えた。

そして噂の菖蒲は、不愉快な顔をして病院の廊下を歩いていた。

「だから姉さん、危ないから俺のところに行こう」
隣を篠原護が歩いている。

「私は、誰かのせいで自分の仕事を邪魔されるのが一番嫌いなものよ。
ここから出たりしないわよ」

「姉さん！」

篠原は菖蒲の前に立ちふさがった。

「どきなさいよ、護君！」

菖蒲が怒鳴る。菖蒲は篠原を睨みつけて、

「私はこれからオペなの。邪魔しないで」

「ダメだって。姉さんがここにいてる事で、他の人達にも迷惑がかかるんだからさ」

篠原はそれでも説得を続けた。

「そんな事、貴方が何とかしなさいよ、護君。そのためのボディガードでしょー！」

「……」

さすがに篠原も姉の言動に言葉を失ってしまった。どこまでも我が儘な姉だ。

「オペしなれば助からない命があるのに、自分の命惜しさに逃げ出すなんて、私にはできないわ」

菖蒲の事をよく知らない人が聞けば、

「医師の鑑だ」

と感激するだろうが、彼女はそれを方便として使っているだけで、本当にそんな事を思っているのではない事を篠原はよく理解している。でも、いくら何を言っても、絶対に自分の言う事を聞くとは思えないウルトラ頑固な姉との不毛な言い合いを諦め、篠原は決断した。

「わかった。そこまで言うなら、俺は外で姉さんを守るよ」

「やっとわかってくれたのね、護君。さすが、私の弟だわ」

菖蒲はニツコリして手術室に入って行った。篠原は、

「全く、付き合い切れないな」

と呟き、溜息を吐いた。

皆村は、交錯する情報がようやくまとまり、黒い救急車が現れた場所が特定された事を知った。

「どこなんですか？」

彼はまた刑事課長に迫った。

「大日本医科大学付属病院だ。からすまめきり烏丸暁という外科医が連れ去られたらしい」

「大日本医科大ですか。となると、合同捜査本部が立ち上げられま
すね」

皆村は嫌な予感がしてそう言った。刑事課長は、

「そうだな。そこはウチの管轄ではない。本庁に捜査本部が移転し、
合同捜査本部になるだろうな」

面倒臭くなるな。皆村はウンザリした顔になった。

（このままだと、美咲さんに情報を伝えにくくなるな）

すっかり美咲の虜になっっている事を自覚していない皆村である。

「ホシの足取りは掴めたんですか？」

「まだだ。何しろやつの思いで現場を解明したところなんだ。何もわかっていないよ」

刑事課長は苛ついたように怒鳴った。

「取り敢えず、現場に急行し、あちらの所轄と顔合わせしておけ」
「わかりました」

皆村は渋々頷き、署を出た。そして携帯を取り出し、美咲に連絡する。

「あ、神無月さんですか？」

美咲は慌てているようだ。

「ごめんなさい、かけ直します」

「は、はい」

皆村は見えてもいない美咲に向かってお辞儀をし、携帯を切った。
「取り込み中？」

何があつたのだらうと思つたが、女性の事をあれこれ詮索するのは失礼だと考え、美咲からの連絡を待ちつつ、事件現場に向かつた。

美咲が皆村から連絡を受けたのは、ちょうど麗奈の事務所を襲撃しようとしていた連中をなぎ倒した直後だった。

「ここは三人で襲撃か。私のところは一人だったのに」

葵は賊を特殊なロープで縛り上げながら呟いた。

「所長が暴漢をあつさり倒したので、人数を増やして来たのかも知れませんか」

美咲が推理する。

「かもね。でも、増員が少な過ぎたわね」

葵は気絶している賊を見て言つた。

「ホント、美咲ちゃんて強いのねえ。私の専属のボディガードにならな……」

「お断わりさせて頂きます」

麗奈がニコニコして言いかけたのを遮るように葵が拒絶した。

「ひどーい、葵ったら。そんなに即答しなくてもさあ」

麗奈は膨れっ面をした。葵はそれでも、

「麗奈さんのガードは、私がします。美咲には警察とのパイプ役に

なつてもらいますので」

「あーん、残念」

麗奈は美咲を見てウィンクした。美咲は只苦笑いをするのが精一杯であった。

「さっきの、例の刑事からだったんでしょ？　すぐにその所轄に行つて、美咲。ここは私が引き受けるから」

「はい」

美咲は嬉しそうに答えると、サツと駆け去ってしまった。

「葵ったら、美咲ちゃんを私から守ろうとしてるでしょ？」

麗奈は葵を目を細めて睨んだ。葵はニツとして、

「はい。可愛い部下を麗奈さんの毒牙に晒す訳にはいきませんので」

「まア、言つわね。でもさ、私、葵でもいいのよ」

麗奈の言葉に、葵は全身総毛立った。

「冗談はやめて下さい、麗奈さん」

麗奈はケラケラ笑つて、

「冗談よ。そんな事したら、私、菖蒲と護君に怨まれちゃうから」

「護はともかく、菖蒲さんは何とも思わないのでは？　私、嫌われれますから」

葵は苦笑いして言った。すると麗奈は楽しそうに笑い、

「とんでもない。あいつ、酔っ払うと貴女の事をベタ褒めするのよ。一度見せてあげたいわ」

「ええ？　信じられないです」

葵は目を丸くして驚いた。

美咲は走りながら皆村の携帯にかけた。

「ごめんなさい、皆村さん。ちょっと手が放せなくて。どうされましたか？」

「現場がわかりました。大日本医科大学付属病院です」

「そつなんですか」

美咲はすぐにその病院の場所を頭の中で思い出す。

「今向かっているところなんです。神無月さんはどこにいらつしやるんですか？ 迎えに行きますよ」

「大丈夫です。その病院なら、それほど離れていないので、直接向かいますから」

「そうですか」

皆村の寂しそうな声を聞き、美咲は悪い事をしたかな、と思ったが、

「では現場で」

と言い、携帯を切った。

（大日本医科大学付属病院か。ここから、十キロ程度ね。七分で着けるかしら？）

彼女は忍び装束に着替え、夜の闇の中を走り出した。

篠原は、大学病院の周辺をうろついていた怪しい連中を全員ボコボコにし、大原を通じて警察に引き渡した。

「結局、姉さんは狙われていなかったのか？」

篠原は苦笑いをした。

「暴漢にまで嫌われたのかな？」

何とも酷い事を思う弟である。

しかし、そうではなかったのだ。本当は、葵を襲撃した男と、麗奈を襲撃した連中が、菖蒲を襲撃する予定だったのだ。つまり、襲撃者がいなくなってしまうたのだ。これも菖蒲の悪運の強さなのかも知れない。

「どこのどいつか知らないが、とんでもない女達を相手にしている事を知ってるのかね。可哀想で仕方がない」

篠原は手を合わせて念仏を唱えた。

後小松院長は、襲撃者達がことごとく捕えられてしまったのを知り、激怒していた。

「何という事だ。話が違うではないか」

彼はイライラしながら、どこかに携帯で連絡をした。

「私だ。お前のところの連中は、全然役に立たんな。言い訳はいい。我々のビジネスの根幹に関わるのだぞ。何とかしろ。いいな」

後小松は携帯を切り、ソファの上にドスンと腰を下ろした。

「忌ま忌ましい女共だ」

彼は苦虫を噛み潰したような顔で呟いた。

皆村は大日本医科大学付属病院に到着した。

「皆村さん」

思ってもいない声が彼を呼んだので、皆村は仰天した。

「え？」

声の主を見ると、そこには間違いなく美咲が立っていた。眩しい笑顔で。もちろん、美咲はスーツに着替え直している。

「神無月さん！ 本当に近くにいらしたんですね」

「ええ、まア」

美咲は苦笑いして言った。

（本当は、皆村さんより遠かったんだけどね）

でもそれは言えない。

「取り敢えず、神無月さんは私の部下という事で通しますので、そのおつもりで」

「わかりました」

また苦笑いする美咲。すでに葵が警視總監を通じてこちらの所轄にも手を回しているはずなのだ。でも、皆村に悪いので、彼の作戦に従う事にした。

第八章 深まる謎 10月1日午後10時

皆村は、病院の玄関を入り、捜査員でこつた返しているロビーを進む。彼は美咲がついて来ているか心配で振り返ったが、彼女は行き交う人々を巧みにかわして着実に皆村について来ていた。

（美咲さんて、スポーツ選手だったのかな？）

その機敏な動きは、バスケットボールの選手を思わせた。

「あの、何か？」

美咲が皆村の視線に気づき、尋ねる。

「あ、いえ、別に。人が多くて危ないですから、気をつけて下さい」

「はい、ありがとうございます」

美咲はニツコリ微笑んで応じた。皆村は赤面し、また歩き出す。

皆村は担当所轄の刑事に挨拶し、美咲を部下だと紹介した。

「今現在わかつている事は、この病院の外科医である烏丸曉氏（かじすまめきう）が連れ去られたという事だけです。それ以上の事は何も……」

皆村もあまり期待していない。自分が後小松総合病院の事件に関わった時も、

「何かの悪戯か？」

と思っただくらいなのだ。まだここの所轄は運がいい。ウチという前例があるから、動きがとりやすいはずだ。上層部を説得する事も必要ない。

「目撃証言は得られていますか？」

皆村が尋ねる。

「はい。看護師の幾人かが、烏丸氏が黒い隊員服姿の連中に拉致されるのを見ています」

「顔は覆面で隠していたのですね？」

「ええ、そのようです。年齢、性別、国籍、全て不明です」

皆村はデジャブを見ている気分だった。

（後小松事件と全く一緒だ）

「院長にお話を伺えますか？」

美咲が口を挟んだ。皆村はハツとしたが、

「院長は海外出張中で不在です。外科部長になら話を訊けますよ」と答えが返って来たので、困惑した。

（あれ？）

何となくではあるが、ここの担当者と美咲が、顔見知りのような気がした。

（まさかね）

美咲は謎が多い女性だが、警察にコネクションがあるとは思えない。

（大原が動いたのか？）

それなら自分のところにも大原から連絡があるはずだ。

「こちらです」

皆村と美咲は、外科部長がいる部屋へと案内された。

葵は麗奈の車で葵のマンションへと向かっていた。

「別に葵と一緒になら、事務所でも大丈夫なのに」

助手席で甘えた声を出す麗奈に苦笑いしながら、

「私のマンションの方が安全です。それに、美咲も茜も、そのうち集合しますので」

と葵は答えた。

「あらん、美咲ちゃんが来るの？ それを先に言つてよ、葵」

こんな姿を見たら、麗奈のクライアントは彼女の事をどう思うだろうと葵は考えてしまった。

「あれ？」

地下駐車場に乗り入れると、見慣れた白のワンボックスカーが目に入った。

「どしたの？」

葵が憂鬱そうな顔になったので、麗奈が尋ねた。

「護が来てます」

「そうなんだあ。私、お邪魔?」

麗奈のその言葉に葵は、

「いえ、護だけならいいんですけど」

「ああ」

麗奈は葵の憂鬱な顔を了解した。菖蒲おまけが同乗して来ているのだ。

「まあ、追いつ返す訳にもいかないわね」

麗奈は苦笑いする。葵は肩を竦めて、

「そうですね」

二人は車を降りると、エレベーターホールに向かう。

「先に行ってるのかしら?」

「多分、ドアの前で仁王立ちして、『遅いわ、葵!』とか言われそうです」

葵がそう言っていると、麗奈はゲラゲラ笑った。

「目に浮かぶ」

嬉しそうだ。

(麗奈さんて、菖蒲あやめさん以上のドSだな)

葵は含み笑いをし、エレベーターのボタンを押した。

その頃、大原と茜は警察庁を出ていた。

「そろそろ水無月さんのマンションに行った方がいいんじゃないかな?」

大原が車を通りに進ませながら言うと、茜は、

「まだ早いですよ。今行ったりしたら、菖蒲さんだけいるような気がするんです」

茜が菖蒲という女性を怖がっているのはわかったが、どうして怖いのかは大原にはわからない。

「篠原さんのお姉さんて、そんなに怖いのか?」

「ええ、それはもう」

茜は身震いして見せた。

「一度会ってみたいな」

「あの人、男の人には天使のような笑顔で接するんです。気をつけて下さいね」

茜が妙に力を入れて言ったので、大原は、
「どうして？」

と尋ねてみた。茜は顔を赤くして、

「大原さんが菖蒲さんに誘惑されちゃうと嫌だから……」

最後の方は、聞き取れないくらい声が小さくなった。大原は大笑いして、

「大丈夫。僕は茜ちゃん一筋だから」
「……」

大原のその言葉に、茜は顔が爆発しそうだった。

「葵、遅いわよ。私、ここで餓死するかと思ったわ」

マンションのドアの前で、葵が予想した通りの反応をした菖蒲を見て、葵と麗奈は笑いを堪えるのが大変だった。

「何がおかしいのよ、葵？ 貴女まで何よ、麗奈！」

剥れる菖蒲を見て、とうとう弟の篠原まで笑い出してしまう。

「あなた達、後で覚えてなさいよ」

菖蒲はカンカンになって言い放った。

「どうぞ、お入り下さい、菖蒲さん」

葵は笑いを堪えながら、ドアのロックをカードキーで解除した。

「全く！ 護君！」

まるで古代エジプトのクレオパトラのように、菖蒲は篠原にドアを開けるように命じた。

「はいはい」

篠原も逆らわずにドアを開く。

「失礼」

葵は菖蒲を追い抜いて、部屋の明かりを点け、奥へと走った。

「また黒い救急車が現れたらしいな」

玄関で靴を脱ぎながら、篠原が言った。

「みたいね。今、美咲が現場の病院に行っているわ」

「さすがに早いな」

篠原はニヤリとして葵に近づく。

「イチャつくのは、私達が帰ってからにしてね、護君」

菖蒲の強烈な嫌味が放たれる。

「姉さん！」

篠原はムツとして菖蒲を見た。しかし菖蒲はそれを無視して、

「葵、何か食べるものある？ 手術が長引いて、お腹ペコペコなのよ」

「ありますよ」

葵はにこやかな顔で応じた。

「貴女達がモタモタしていたから、また次の犠牲者が出てしまったわ。反省しなさい、葵」

菖蒲の話は暴論である。葵達が事件に関与してから、まだ二十四時間も経っていないのだから。

「無理言うなよ、姉さん。まだ警察だって何も掴んでいないんだぞ」

篠原の正論も、菖蒲の前では何の役にも立たない。

「そんな事は関係ないわ。葵達は、警察より能力が高いのだから、警察に遅れをとってはいけないのよ、護君」

相変わらずの「護君」の連発で、篠原はウンザリ顔だ。

「申し訳ありません、菖蒲さん。金村さんを殺害した犯人は、必ず捕まえますので、もう少し待って下さい」

「……」

金村の名前が出た途端、菖蒲の口が動かなくなった。麗奈がクスツと笑う。

「ねえ、美咲ちゃんはいつ来るの、葵？」

その声に菖蒲が反応した。

「まだそんな事をしているの、麗奈？ 一度心療内科を受診しなさい」

「ありがとぅ、菖蒲。でも私は至って健康だから、心配しないで」

麗奈のお恍けに菖蒲はムツとし、

「女なのに、女が好きっていう事自体が、病気なのよ。もっと真剣に自分と向き合いなさいよ」

「はいはい」

麗奈は肩を竦めた。菖蒲にかかれば、どんな人間も「病気」にされる。それでも葵は、麗奈は本当に一度診てもらった方がいいと思っていた。決して同性愛者を否定するつもりはないが。

美咲と皆村は、外科部長室に案内されていた。

「私が外科部長の八幡原栄伍やしたばら えいごです」

机の向こうに立っている細面の男が言った。五十代くらいだろうか？

「少々お尋ねしたい事があるのですが」

皆村が言い出す前に、美咲が口を開いた。

（いつの間にか、俺が美咲さんの部下みたいだな）

それはそれで悪い気はしないので、皆村は何も言わずにいた。

「わかりました。どうぞ、おかけ下さい」

二人は机の前にあるソファに並んで腰を下ろす。ごく自然の行為なのだが、皆村は隣に美咲がいるのを改めて実感し、ドキドキしていた。

「連れ去られた烏丸さんの事なのですが、どんな方ですか？」

美咲はメモ帳を取り出して八幡原部長に尋ねた。八幡原は美咲達の向かいに腰を下ろしながら、

「真面目で、仕事熱心な男ですよ。まだ三十代ですが、患者の評判も、看護師達の評判も上々で、将来有望ですな」

八幡原は、烏丸医師を褒めちぎっているが、その顔は真実を語っているようには見えない。美咲は不信に思い、

「烏丸さんは、医療ミスとか起こした事はありませんか？」

美咲のその質問に、八幡原は一瞬露骨に嫌な顔をしたが、すぐに穏やかな笑みを浮かべ、

「いえ。彼は優秀です。医療ミスなど起こした事はありません」と言い切った。美咲は確信した。

（烏丸医師は、何か弱みでも握られているのかしら？　どうもこの部長、胡散臭い）

「そんな事を訊くなんて、まさか刑事さん達、あの都市伝説を信じているのではないでしょうね？」

八幡原がバカにしたような顔で美咲をも見る。皆村がムツとして身乗り出すと、

「まさか。あんなバカげた話、信じる訳ないです。話としても、三流ですから」

美咲が皆村を制するように強い調子で否定した。

「それは良かった。やはり、刑事さんは、我々医者と同じで、理性的で、現実的でないといけない」

八幡原はニヤリとして応じた。美咲も作り笑いをした。

「それにしても、八幡原さんがあの都市伝説をご存知とは思いませんでした。どこでお知りになったのですか？」

美咲のその言葉に、八幡原はギクツとしたようだ。

（こいつ、何か知っているな？）

少なくとも、黒い救急車の都市伝説は一般紙には掲載されていない。警察も記者会見でその事に触れていない。そんな知識があるとするれば、インターネットで調べたか、事件の関係者かしかないのだ。もちろん、病院の横の繋がりで知っている可能性もあるが、先程の八幡原のリアクションは、

「私は関係者です」

と言っているのと同じだった。

「ハハハ、息子がインターネットで調べて、教えてくれたのですよ。後小松先生の病院の事件も、聞き知っていますしね」

八幡原は、そんな言い訳にしか聞こえないような事を言いながら、汗まみれになっていた。

「ほお、なるほどね」

皆村は凄みを利かせた顔で八幡原を睨み、頷いてみせた。八幡原はスツと身を引いた。

美咲と皆村は、何かあったら連絡するよう言いおき、外科部長室を出た。

「何か知ってますね、あのオヤジ」

皆村が前を向いたまま言った。美咲は頷いて、

「ええ。でも、多分断片的な事しか知らないと思います。それに、あまり問い詰めると、消されてしまいかも知れません」

「えっ？」

皆村はビクツとした。

「どういう事ですか、神無月さん？」

思わず美咲の方を見た。すると、彼女の顔は皆村の顔からほんのわずかの距離にあった。

「あっ！」

皆村は慌てて離れる。

「実はですね」

美咲はどうしようかと迷っていたのだが、皆村に暴漢の話をした。

「そ、そんな！」

皆村は驚きのあまり、そのまま気を失いそうだった。

「大丈夫なんですか、神無月さん？ 銃で狙撃されたって、どうして自分に言ってくれなかったんです？」

「申し訳ありません」

美咲が深々と頭を下げたので、また慌てる。

「あ、いや、別に自分は貴女を責めている訳ではなくてですね……」

「大原さんがいたので、大原さんに言いました」

美咲はバツが悪そうに言い添える。大原の名を出されては、それ以上何も言えない。

「し、しかし、もう危険ではないですか？ これ以上関わらない方がいいですよ、神無月さん」

皆村が真剣に美咲の事を心配してくれているのはよくわかってい

た。しかし、この事件は根が深い。仮にここで手を引いたところで、連中は見逃してくれないだろう。いや、それよりも、菖蒲が何を言い出すかわからない。どちらかというところ、暴漢達より菖蒲の方が気がかりな美咲である。

（どうしよう？ 全部話してしまった方がいいのかしら？）

美咲は悩んだ。こんな時ばかりは、あまりくよくよ考えずにズバツと行動してしまう葵や茜の性格が羨ましくなる。

「神無月さん？」

皆村は、美咲が黙り込んでしまったので、機嫌を損ねてしまったのかと思い、アタフタしていた。

「あ、ごめんなさい、考え事をしていました」

美咲は決まりが悪そうに微笑んで皆村を見た。皆村は美咲が怒っているのではないのを知ってホッとした。

「あの、お話があるのですが、お時間大丈夫ですか？」

「え？」

皆村はドキッとした。

（な、何だ？ 今度は何だ？）

美咲が只の探偵ではない事を薄々は感じている皆村であるが、彼女の正体を知りたい反面、知りたくないとも思ってしまう複雑な感情が彼の中で渦巻いていた。

美咲は病院の端まで皆村を誘導し、周囲に誰もいない事を確かめてから、

「実はですね」

と話し始めた。

美咲の話は、皆村には衝撃が強過ぎた。か弱い女性を守ろうと必死になって動いていた皆村は、自分がとんだ道化だったと感じたのだ。

「今まで黙っていてごめんなさい。許して下さい」

美咲はまた深々と頭を下げた。

「いや、そんな事しないで下さい。自分は全然気にしていませんか

ら」

それはウソだ。しかし、皆村は美咲に対して怒りを感じたりはしていない。確かに自分は道化だったかも知れないが、それは美咲がそう仕向けた訳ではなく、皆村自身の勝手な思い込みから始まっている事なのだ。

「では、今まで通り、協力して頂けるのですか？」

美咲はまた「悪魔のウルウル」を無意識のうちに発動していた。

「も、もちろんです。当たり前じゃないですか」

皆村は辛うじてその「ウルウル」を見なかったので、命拾いした。

「ありがとうございます、皆村さん」

美咲がギョツと手を握って来た。皆村は卒倒寸前だった。

第九章 第二の殺人 10月2日午前6時

皆村秀一は、眠れぬ夜を過ごした。

神無月美咲。すでに皆村の中では半ば神格化した存在の女性。その彼女が、実は忍びの一族で、あの傲慢極まりない女医の依頼で、黒い救急車事件を調査していると知り、彼はショックを受けていた。それはいい。美咲と一緒にいられる口実ができる。そして彼女は自分を頼りにしてくれている。

だが、皆村は不安だった。

（もしかして、俺の方が美咲さんの足手まといではないだろうか？）
彼も警視庁の所轄の人間である。伏せられてはいるが、アフリカの小国イスバハン王国の王族が絡んだ事件、そして内閣官房長官まで関わっていた改進黨代表誘拐事件。その二つの事件に大きく関わり、解決したと噂の探偵事務所がある話は耳にした事がある。美咲はその事には言及しなかったが、警視庁そのものを動かし、警察庁の大原とも繋がりがある以上、彼女達がその探偵だというのはまず間違いないだろう。

（そんな美咲さん達と俺なんかが一緒に行動していいんだろうか？）

僻みではなく、そう思う。

「えっ？」

その時、携帯が震えた。

「はい、皆村」

それは合同捜査本部からだった。黒い救急車に連れ去られた烏丸^{あきひ}暁の遺体が、大日本医科大学付属病院から程近い公園の滑り台の上で発見されたと。

「すぐに行きます」

皆村は無精髭もそのまま、警察寮を飛び出した。そして携帯で

美咲に連絡した。彼女から、例え何時でも構わないので、何かあったら連絡を下さいと言われているのだ。

「はい、神無月です」

美咲はワンコールで出た。起きていたのか？

「朝早くにすみません。烏丸医師の遺体が発見されました。現場は

……」

皆村は走りながら美咲に伝える。

「ありがとうございます」

携帯が切れた。もう少し話していたかったと愚かな事を考えながら、彼は署の中に飛び込んだ。

「早いな、皆村。お前が一番だ」

夜通し連絡係をしていた先輩刑事が眠そうな顔で出迎えた。

「では、現場に向かいます」

皆村は車のキーを掴むと、駆け出した。

「元気ねえ、美咲は」

葵はリビングルームで一晩中菖蒲の小言を聞かされ、へ口へ口だった。美咲は苦笑いして、

「私は直接の被害者ではありませんから。何かわかりましたら、すぐに連絡します」

「ええ。頼むわ」

葵はそう言うのと、またソファに倒れ込んだ。

「では、行って来ます」

美咲はバッグを持ち、部屋を出た。

「あんたもいい加減出かせなさいよ」

葵は向かいのソファで同じようにへ口へ口になっている篠原に言った。

「いや、今日は休暇とった。葵の介抱をするよ」

「パカ！」

菖蒲は言いたい事だけ言うと、麗奈を無理矢理連れ出し、帰って

行ってしまったので、同じように連れ立って帰ってしまった茜達もいないため、今は二人きりなのだ。

「あんだ、こんな状況を利用して、私を襲うつもりじゃないでしょうね？」

「あれ、襲って欲しい訳？」

篠原がニヤリとする。葵は顔を赤くして、

「殺すわよ、つまらない冗談言うと！」

「お前に殺されるなら本望だよ」

篠原は菖蒲がいないいつもの「スケベ」に戻ってしまう。

「菖蒲さんがいた方が、あんだが大人しくていいわね」

「じゃ、呼び戻そうか、姉貴を？」

篠原が携帯を取り出すと、

「やめてよ、嘘に決まってるでしょ！」

葵は慌てて篠原の携帯を取り上げた。

「ところでさ」

「何！？」

葵は携帯を投げつけるように篠原に返す。篠原はそれを難なく受け取り、

「茜ちゃん達、どうしたのかな？」

「そんな事気にしてどうするのよ？」

葵は立ち上がった。篠原は葵を見上げて、

「羨ましいなと思ってさ」

「何が？」

葵はバスルームに歩き出す。それに気づいて篠原も立ち上がる。

「今頃どこかのいいところでさ……」

「大原君は、あんだと違って一年中発情してないわよ！」

葵は振り向き様に怒鳴った。篠原は肩を竦めて、

「人間は一年中発情してるんだぜ、知らないのか？」

「それはごく一部でしょ！ 大抵の人は、理性で抑えているのよ！」
葵が勢い良くドアを閉じる。そして聞こえる、カチャッという口

ツクの音。

「おい、一緒にシャワーしないのかよ？」

篠原が遙か遠くにいる人に話しかけるような声を出す。

「誰と、誰が？」

葵の怒りに震える声が尋ね返す。

「俺と、お前が」

「あり得ない！」

篠原はフツと笑い、リビングルームに戻った。

そして如月茜。彼女は、葵のマンションを大原と出た後、大原にアパートまで送ってもらった。彼女はドキドキしていた。しかし……。

「じゃ、お休み、茜ちゃん」

大原は爽やかな笑顔で帰ってしまった。

「……」

呆然と見送った茜だったが、

「大原さんて、鈍感なのかな？」

と前向きに考えた。

美咲からのメールで事件の進展を知った茜は、大急ぎで事務所に向かった。そして、大原の携帯に連絡を取る。

「大原さん？ 黒い救急車の事、聞いてます？」

大原ももちろん、警視庁を通じて情報を得ていた。

「じゃ、また」

茜は頭を仕事モードに変換した。

皆村は現場に到着していた。さすがに今日は美咲はまだ来ていないようだ。

彼は遺体発見現場に案内された。

「遺体は、公園のベンチの上に仰向けの状態で遺棄されていました。死亡推定時刻は明け方の五時から六時頃。死因は鋭利な刃物による

失血死です」

昨夜顔を合わせた担当刑事が説明してくれる。

「拉致してから時間が経過していますね。すぐに殺していないのは、我々の担当している事件と同様ですね」

皆村は忙しく動き回る鑑識課員達を眺めながら言った。

「現在大日本医科大学付属病院にも捜査員を派遣して、関係者の事情聴取をしています」

担当刑事は更に説明した。皆村は担当刑事を見て、

「犯人の遺留品は？」

「発見されていません」

「そうですか」

自分の担当している事件でも、何も遺留品は発見されていない。

「それにしても」

その担当刑事は呟くように言う。

「犯人の目的は何なのでしょうね」

「ええ」

皆村にもそれは最大の謎であった。皆村は現場を見回している時、美咲がいるのに気づいた。

（あれ、美咲さん、来ていたのか？）

美咲は皆村より先に来ていた。それも、大原と共に。

（美咲さんて、大原と？）

いや、確か大原は子供みたいな女と連れ立っていたはずだが？

皆村は頭が混乱した。

「ああ、皆村さん」

美咲と大原も皆村に気づき、近づいて来る。皆村は担当刑事に会釈して美咲達に近づいた。

「おはようございます」

大原は鯁張る皆村を見て笑いを堪えていた。

「お、おはようございます」

「おはようございます」

美咲は別に皆村の様子の異変に気づく事なく、笑顔で挨拶した。
「何も出ないようですね」

大原が残念そうに言った。皆村はもう一度現場を見渡して、
「ああ。何を考えているのかわからない犯人だからな」

と呟くように言った。すると美咲が、

「犯人が考えているのは事件の真相を知られないようにする事だと思えます」

「えっ？」

美咲は二人を見ながら、

「これだけ大掛かりな事をして事件を起こすという事は、どう考えても何かを知られたくないからです。私達は何か大事な事を見落としているのかも知れません」

皆村は思わず大原と顔を見合わせる。

（彼女は何かに気づいたのか？）

皆村は、美咲の考えを聞いてみたくなった。

皆村と大原が同時に美咲を見た。

「もう一度後小松総合病院を調べてみます」

美咲はそう言つと皆村と大原に会釈し、立ち去った。

「何だよ、お前、美咲さん狙いなのか？」

皆村は美咲を見送りながら大原に囁く。大原は苦笑いして、

「とんでもない。僕は大人の女性は苦手なんです」

「え？」

皆村は驚いて大原を見た。

「お前、そういう趣味なのか？」

「そついうって、どういう事ですか？」

大原は不思議そうな顔で皆村を見ている。

「あ、いや、何でもない」

そつ言いながらも、確認しておきたかったので、

「お前はあの子供みたいな子と付き合ってるんじゃないのか？」

「そのつもりなんですけど。僕は遊ばれているのですかね？」

大原は大真面目な口調で言う。皆村は呆れ顔で、

「子供に遊ばれちゃあ、お前もおしまいだな」

「ハハハ」

大原は陽気に笑った後で、

「皆村さん、あまり彼女の事を悪く言わないで下さいね。普段温厚な僕も、怒ってしまいますよ」

と急に真顔で言う。皆村はビクツとした。大原の腕前は知っているからだ。

「わ、悪かったよ。お前が羨ましくて、ついいじめたくなっただよ」

皆村は頭を掻いて言い訳した。大原はフツと笑って、

「心配しないで下さい。美咲さんを狙ったりしませんから」

「あ、あのなあ……」

皆村が何か言い返そうとした時、大原の携帯が鳴った。茜からだ。

「失礼」

大原は携帯で茜と話しながら歩いて行く。

「けっ」

皆村は鑑識の仕事が終了したのを確認し、近づいた。

「皆村さん」

大原が後ろから声をかける。

「何だ？」

鬱陶しそうに振り返る皆村。大原は嬉しそうな顔で、

「神無月さんを狙っているのは、僕の知っているだけでも、外務省と国会にもいますよ」

「え？」

意外なライバルの多さに、皆村はギョツとした。

「それじゃ」

大原は敬礼して立ち去った。

美咲は事務所に戻っていた。

「おはよう、茜ちゃん」

「おはようございます、美咲さん」

「コーヒーの香りがフロアに立ち込めている。」

「どこかに行つてたんですか？」

「ええ、現場にね」

「え？」

茜はまたおかしい妄想を始めそうになり、それを頭の中から追い出した。

「そう言えば、大原さんに途中で会つたわ」

美咲は茜が自分と大原の事を疑っているのを察知していたので、そう付け加えた。後で知られて、

「隠していた」

とか言われても困るからだ。

「そ、そうですか」

茜はドキドキしていた。

（やっぱりそうなのかな？）

「皆村さんもその後に来たわね」

「皆村つて、あの感じが悪い刑事ですね」

茜はどうにもあの刑事とは馬が合わないと思っている。

「ちよつと顔が怖いけど、別に嫌な人ではないわよ」

美咲は苦笑いしてフオーした。だが、皆村が聞いたなら、シヨック死してしまうだろう。

「そうですかあ？」

茜は同意しかねるという顔だ。

「あいつ、私の事バカにしましたよ」

茜は剥れた。美咲は微笑んで、

「そんな事ないわよ。茜ちゃん、考え過ぎよ」

「そうですかあ？」

茜はそうだと思わない時に「そうですかあ？」を連発するのはよくわかつていたので、美咲は話題を変えた。

「所長から連絡あった？」

「いえ、まだですよ」

茜はポンと手を叩いて、

「美咲さんが所長のマンションを出る時、篠原さんて、まだいました？」

「いたけど。それが何か？」

美咲には茜の質問の意図がわからない。

「なーるほどお、そういう事ですかあ」

妙に嬉しそうな茜を見て、美咲はようやく彼女の「邪推」がわかった。

「また変な事想像してるでしょ、茜ちゃん？」

顔を赤らめながら言う美咲を、茜は面白がり、

「美咲さんこそ、何を想像したんですか？ 私は別に何も言っていないですよ」

「し、知らない！」

美咲はブイツと顔を背けて、自分の席に座った。

「美咲さんのそういうところが、アホな男共にはいいらしいんですよえ」

「どういうところ？」

美咲はプリプリしたままだ。茜は悪戯っぽく笑い、

「美咲さんの可愛いところですよ」

その言葉にまた赤くなる美咲。

「もう、茜ちゃんたら、私をからかうのが好きなんだから！」

「ああ、ごめんなさい、美咲さん。そんなつもりじゃないですよ」

美咲がムツとしたままパソコンを起動させたので、茜は慌てて詫びた。

後小松謙蔵は、また何者かと携帯で話していた。

「警察は抑えているはずなのに、何故動いている連中がいるのだ？」
相手が何か言っている。

「言い訳はいい。私の力を見くびらなくてももらいたいな。国会議員の一人や二人、辞任させる事など、雑作もないのだぞ」

後小松は怒りのあまり、額に血管を浮き上がらせていた。

「仕事を急げ。何ならマスコミに意図的に誤情報をリークさせる。私が潰れる時は、あんたも潰れる時なのだぞ、よく覚えておけ」

後小松は相手が話を終えないうちに携帯を切ってしまった。

「使えない連中だ」

後小松は携帯を叩きつけるようにソファに投げた。

葵は篠原の「アプローチ」を振り切り、事務所に着いた。

「お疲れ、二人共」

葵がそう言ってフロアに入ると、

「所長こそ、お疲れだったんじゃないですか？」

茜がニヤニヤして言う。葵はバッグを自分の机の上に置きながら、

「ああ、菖蒲さん？ ホント、疲れるわ、あの人」

「違いますって。その後ですよ」

茜が尚も言う。美咲は顔を赤らめてモニターを見たままだ。

「その後って、何？」

葵はお惚けではなく、本気で尋ねた。

「嫌ですよお、私に言わせないで下さい」

茜の嬉しそうな顔と美咲の恥ずかしそうな顔を見て、葵はようやく合点がいった。

「ええ、そうね。大変だったわ、もう。腰が抜けるかと思ったわ」

「ええええ！？」

そんな解答を期待していなかった茜は、顔を真っ赤にした。彼女も所詮は美咲と同じで、「耳年増」なのだ。葵から見れば、「子供」である。

「茜こそ、大原君とはどうだったのよ？」

「い？」

思ってもいない反撃を食らい、茜はオロオロした。すると美咲ま

でが、

「そうかあ。茜ちゃんも熱い夜を過ごしたのね」と突いて来る。

「や、辞めて下さい、お二人共！ 大原さんはそんな人じゃありませんてばあ」

涙ぐんで反論する茜を見て、葵と美咲は顔を見合わせた。

「さてと。バカ話はこれくらいにして、事件の調査を本格的に始めるわよ。相手はこつちを敵と看做したのだから、私達も本気で行くからね」

葵が美咲と茜を見て言う。

「はい、所長」

美咲と茜は葵を見て返事をした。

第十章 やはり崩せないアリバイ 10月2日 午前9時

その男は苦り切った顔で椅子に沈み込んでいた。男の名は橋沢龍一郎。与党進歩党総裁にして、日本国の首相である。彼は以前、葵達月一族に自分の計画を潰され、敵対勢力である星一族を利用して復讐をしようとしたが、その星一族に逆に利用されてしまった。そして、今度は進歩党の支援者の一人である後小松謙蔵の頼みで各方面に圧力をかけたが、まるで機能していない。

「あのジジイ、相手がわかっていないのか……」

彼は椅子の肘掛けをガンと叩き、齒軋りした。

「相手があの女達だと知っていたら、手を貸したりしていない」

いくら傲慢で有名な橋沢首相でも、二度も酷い目に遭えば、葵達とやり合おうなどとは思わない。

「岩戸の爺さんを通じて、形だけでも詫びを入れて、戦線を離脱しないと、私の政治生命が危ない」

彼は、葵達月一族がどれほどの存在なのか、骨身に沁みて理解していた。

「欲の皮の突っ張った老いばれと心中するつもりはない」

その言葉を聞けば、後小松謙蔵は、

「お前には言われたくない」

と反論するだろう。

「最高顧問につないでくれ」

橋沢首相は、インターフォンに言った。

「後小松総合病院の時と同じですね。最有力容疑者にアリバイがあります」

美咲が皆村からの情報を葵に報告した。

「大日本医科大学付属病院の外科部長である八幡原栄伍氏やはたばら えいごは、烏丸からすま氏が連れ去られた時、現場にいました。多くの医師や看護師が彼を

目撃しています」

美咲は続けた。

「烏丸氏は、何度か医療ミスで患者を死亡させていて、それを八幡原氏の力で握り潰してもらったために、まさにアゴで使われてて、同僚には『殺したい』と言っていたそうです」

「殺^やられる前に殺^やつてしま^やう^やつて奴かな？」

葵は眉をひそめる。美咲は頷いて、

「その可能性が高いからこそ、アリバイも高く確実なものにしているでしょう」

葵は腕組みをして、

「またそれか。有力容疑者には、アリバイ。それで、死亡推定時刻にはその外科部長はどこにいたの？」

「烏丸氏が担当するはずだった手術を執刀中でした。これも完璧なアリバイです」

葵は肩を竦めた。

「わかり易過ぎて、バカらしくなって来るわ。犯人は他にいるって事よね」

「その可能性も高いですね」

美咲の意外な返答に葵は目を見開き、

「フーン。美咲には、他の犯人像も見えてるって事？」

「見えているというか、この事件、あまりに不自然なので……」

美咲は資料を捲りながら、

「これだけ大仰な仕掛けを施しながら、最有力容疑者ははつきりしていて、その上鉄壁のアリバイに守られています」

「そうねえ。三流の推理小説だって、もう少し読者にわからないように筋立てするわよね」

美咲は葵の言葉に大きく頷き、

「そこなんです。この不自然さは、意図的なものなのか、偶然の産物なのか、わからないんです」

「なるほどね」

葵は、推理力と分析力では、美咲には敵わないと認識している。
「あんまり難しい話で盛り上がらないでくださいよお、お二人共」
茜が口を尖らせたままでコーヒ―と紅茶を運んで来た。

「あら、相思相愛の茜さんには、この事件、どう見えるのかしら？」

葵が意地悪な目で茜を見上げた。茜は机にコーヒ―を置きながら、

「何ですか、その、相思相愛って？」

「あれ、意味わからなかった？」

葵が更に追い討ちをかける。美咲は呆れて二人のやり取りを見ていた。

「そうじゃありませんよお。私と誰が、相思相愛なんですかあ？」

茜は頬を紅潮させて、わざとらしく尋ね返す。葵はニマーツとして、

「大原君に決まってるじゃないの。だって、彼、大人の女性は苦手なんでしょ？」

茜はムツとして葵から離れ、美咲に紅茶を渡すと、

「大原さんはロリコンじゃありません！ それと、私も子供じゃありません！」

と葵を睨みつけてから、スタスタと給湯室に行ってしまった。

「所長、からかい過ぎですよ」

美咲が窘めると、

「貴女がいつも茜に甘いから、今日はビシッと言ってあげたのよ」

「ホントですか？」

美咲は目を細めて葵を見た。葵はニヤリとして、

「まあ、そんな事より、次に狙わそうな病院を予測してみました。これ以上事件が続くと、私が菖蒲さんあやめに殺されちゃいそうだから」

「それはないのでは？ 菖蒲さんが所長を殺害する事はできないと思いますよ」

美咲が大真面目な顔で言ったので、葵は大笑いしてから、

「菖蒲さんが私を殺すとしたら、言葉で殺すでしょうから、証拠が残らないわね」

「もう！ 真面目に考えて下さい」

美咲は頬を膨らませて言った。そして、

「それより、麗奈さんは大丈夫なんですか？」

「あら、心配？」

葵が嬉しそうに尋ねたので、美咲は、

「違いますよ！ あの人も狙われているんですよ！？」と強い調子で言い返した。

「それなら、ボディガードをつけたから大丈夫」

「え？」

美咲はそれが誰なのか気づき、ハツとした。

「でもそうすると、菖蒲さんが……」

「それも平気。私達を始末するのは、おおっぴらにするつもりはないようだから、菖蒲さんのガードも護がするわ」

「ええ？ 麗奈さんと菖蒲さんを同時にガードするなんて、無理ですよ」

「それができるんだなあ、護には」

葵が妙に嬉しそうに言ったので、美咲はキョトンとしてしまった。

「酷いわ、護君たら。私を病人扱いしてえ」

心療内科の受診を終えて、診察室から出て来た麗奈は、廊下で待っていた篠原護に言った。

「護君はやめて下さいよ、麗奈さん。その呼び方、ゾツとするんです」

篠原は真顔で言う。麗奈はクスツと笑って、

「なあるほどお。菖蒲がそう呼ぶんだっけ。じゃ、何て呼べばいい？ 護？」

「あ、いや、それも……」

「ああ、そうか。これは葵の呼び方よね。どうしよう、呼び方がないわ」

麗奈はわざとらしく困った顔で篠原を見上げる。

「護でいいですよ。苗字で呼ばれるのも、何か違和感あるし」

「ありがと、ま・も・る」

麗奈は篠原の左腕にスツと自分の右腕を絡ませた。

「え？」

ギクツとする篠原。

（おいおい、麗奈さんで、女が好きだったんじゃないのかよ？）

「あら、護。何を怯えてるのよ。私は別に貴方に襲いかかるうなんて思っていないわよ」

「はあ……」

姉以上に疲れそうだと、と思う篠原であった。彼は麗奈の腕を振り解くと、

「それから、ここへ連れて来たのは、姉の依頼なんですからね。俺が麗奈さんを病気だと思って居る訳じゃないですから」

「それと、護衛の問題もあるんでしょ？」

麗奈は真顔で言った。篠原は頷き、

「そうです。本当は、美咲ちゃんか葵がつくべきなのでしょうけど、いろいろと事情があるんですよ」

「私のせい？」

「わかつているのなら、護君に大人しく従っていなさい」

突然菖蒲がそこに現れた。ここは菖蒲が勤務する大学病院である。現れて当然なのだ。

「うるさいわねえ、菖蒲。あんたのせいで、私と美咲ちゃんとの楽しい一時が失われてしまったのよ！」

「お黙りなさい、麗奈！ 楽しいのは貴女だけで、可哀相な美咲には拷問同然なのがわからないの？」

「ご、拷問？」

麗奈の眉が釣り上がった。

「貴女ねえ……」

麗奈が反論しようとする、

「忙しいので、病気の貴女とはこれ以上付き合っていられないの。」

また後でね、護君」

と菖蒲は立ち去ってしまった。相変わらず台風のような女だ、と麗奈は思い、溜息を吐いた。

「後小松を訴える前に、あいつを訴えようかしら」

「協力しますよ、麗奈さん」

篠原が楽しそうに言った。麗奈は思わず噴き出し、

「可哀相なお姉さんねえ、菖蒲は」

「俺はそれ以上に可哀相な弟ですよ」

篠原はニヤリとして返す。麗奈は苦笑いして、

「そうかもね」

と言ってから、

「それより、また犠牲者が出たんでしょ？　どうなってるのよ、あの事件？」

「俺もいろいろ探ってはいるんですが、どうも妙な連中が動いているようで、難しそうです」

「妙な連中？」

麗奈が篠原を見上げた。篠原は麗奈を見て、

「テロリストです」

「テロリスト？」

さすがに怖い物知らずの麗奈もビクツとした。

「何が目的なのか、見当がつかないんです。後小松とテロリストって、接点がない気がして」

「そうね」

麗奈は腕組みをし、

「もう一つ気になっているのは、金村医師と今度の犠牲者の烏丸医師との関係ね。全くつながりがないみたいね」

「ええ。まさかとは思いますが、模倣犯の可能性もありますね」

「黒い救急車まで造る模倣犯？」

麗奈が呆れ気味に問い質す。篠原は肩を竦めて、

「もしかすると、救急車はレンタカーで、それぞれ関係のない犯人

が借りただけとか？」

「葵に怒られるわよ、護。真面目に考えなさいよ」

「はい」

篠原は頭を掻いた。

葵と美咲は、都内にある病院を検索していた。

「内部で揉め事が起こっていて、何かありそうなところって言うても、難しそうね」

葵がモニターから顔を放して言う。美咲はマウスを操作しながら、「そうですね。物量作戦で行きますか？」

「そうね」

美咲は常時利用している情報屋達に一斉にメールを送った。

「昨日みたいにお手上げの返事ばかりでは困るけど」

葵が呟く。美咲もそれを心配していた。情報屋は、自分の身に危険が及ぶような事は決してしない。報酬をはずんでも、動いてくれない場合もあるのだ。

「あー！」

葵は自分の席に戻りながら、大声を出して立ち止まった。

「な、何ですかあ、いきなり？ ビックリさせないで下さいよお」

カップを片付けていた茜は、危うくトレイから落としてしまいそうになった。

「黒い救急車って、医療ミスをした医師を連れ去りに来るのよね？」

葵は茜の抗議を完全に無視して美咲を見た。

「ええ。でも、それは直接は関係ないのでは？」

美咲も葵の意図がわからず、キョトンとしている。

「医療過誤のエキスパートがいるでしょ、知り合いに！」

「ああ！」

そこまで言われて、美咲は合点がいった。しかし、茜は、「何の事？」

と首をかしげたまま、トレイを抱えて給湯室に歩いて行く。

「麗奈さんに確認してみて。第二の殺人事件の犠牲者の烏丸氏が、接触して来ていなかったかを」

「はい」

美咲は携帯を取り出し、麗奈に連絡した。

「わあお」

病院の待合室の椅子に座っていた麗奈が、思わず声をあげた。周囲の患者が彼女を睨む。

「麗奈さん！」

篠原が小声で窘める。麗奈は肩を竦めて、

「ごめーん。美咲ちゃんからだったので、つい嬉しくて」

と言うと、携帯を開いた。

「はあい、美咲ちゃん、お久ー」

電話の向こうで呆れている美咲の姿が、篠原にははっきりと思い浮かんだ。

「え？ 何だ、お仕事の話？」

麗奈の顔が真剣な表情になる。篠原はそれに気づき、彼女に顔を近づけた。

「ええ、そうね。それは私も思い出さなかったわ。さっすが、美咲ちゃん」

美咲は、その事に気づいたのは葵だと正直に話したようだ。麗奈は篠原をチラッと見てから、

「そういう謙虚なところも大好きよ。じゃあね」

と携帯を切り、

「烏丸医師も、私のところに相談に来ていたわ。すっかり忘れてたんだけど」

「繋がったんですね、二つの事件が？」

篠原が興奮気味に言うと、

「まだそこまでは断定できない。ただ、全く無関係だと思われた二人が、本当はそうではないかも知れないとわかったのは収穫ね」

麗奈はすっかり法律家の顔になっていた。

「葵は、私の事務所に来た医師の中から、次の犠牲者が出るかも知れないと考えているらしいわ」

「となると、麗奈さんの事務所が危ない可能性がありますよ」

篠原が立ち上がった。すると麗奈は、

「それもご心配なく、護。すでに葵が向かったらしいわ。貴方はここにいるように、ですって」

「はあ、そうですか」

篠原はガツカリしたように椅子に戻った。

「あらん、そんな私から離れたいの、護？ 酷いわ」

「違いますよ。離れたいのは、もう一人のマルタイ（犯罪の目撃者や重要な証言をする人で犯人等に命を狙われている者）ですよ」

篠原の言葉に、麗奈はクスツと笑い、

「ホントに可哀相なお姉さんね、菖蒲は」

「そうですかね」

篠原は、やっぱり俺の方がずっと可哀相だと思った。

葵はその頃、麗奈の事務所に到着していた。

「いらつしやいませ」

妙に愛想のいい事務員が出迎えた。心なしか、彼女の顔が紅潮しているように見えた。

（もしかして、この子もあっち側の人？）

葵は背中を見せないようにしようと思った。

「水無月探偵事務所の水無月葵です。麗奈さんから連絡があったと思います」

「はい。どうぞ、こちらです」

事務員はスタスタと奥へ歩き出す。葵は後ろ手にドアをロックして、事務員に続いた。

「この棚に保管されています」

事務員はたくさん並んでいる書棚の一つを指し示し、錠をはずし

た。

「ありがとう」

葵が微笑んで礼を言つと、事務員は、

「い、いえ」

と赤くなつて俯く。

（本物だわ）

葵は溜息を吐いた。

「コーヒーをお淹れします」

事務員はそそくさと給湯室に歩き出した。

（麗奈さんほど攻撃的ではなさそうね）

少しだけホッとした葵だった。

葵は麗奈の事務所で妙な感覚に囚われていた。

（男共の熱い視線は、随分と経験して来たけど、女子の熱い視線は、えーと……）

彼女は相当困惑している。麗奈の部下である女の子は、まだ茜と年齢が変わらないくらい若そうだ。

（この子って、麗奈さんが自分の好みで採用したのかな？ それとも、この子がここに来て目覚めてしまったの？）

どんな屈強な男にも怯まない葵も、まだあどけなささえ残る女の子にジツと見つめられるのは怖い。

「あの」

葵は堪らなくなつて振り返つた。

「は、はい！」

事務員の女の子は、直立不動になり、葵を見た。

「何かあつたら呼びますから、お仕事続けて下さい」

「あ、はい」

その事務員は泣き出しそうな顔になり、自分の机に戻って行く。

（どうしてこんなに罪悪感を覚えてしまうの？）

葵は、自分を死の淵まで追い詰めたあの星一族よりある意味手強い「敵」がいる事を知った。

「！？」

その時、葵は事務所のドアのロックを壊そうとする音を聞いた。

（もう来たの！？）

「招かれざる客が来たようです。奥に隠れて下さい」

「え？ あ、はい」

彼女はある程度の事は麗奈に聞かされているのであるが、全貌は知らないのだろう。アタフタしながら、麗奈の部屋に入った。

「ドアをロックして、私がいいと言うまで、絶対に開けないで下さ

い」

「はい」

ガチャツとロックがかかる音がした。次の瞬間、ドアがこじ開けられ、黒尽くめの男が三人、フロアになだれ込んで来た。三人ともロシア製のピストルを構えている。

「あらあら、女しかない事務所に、大男共がそんな物騒なものを持っていないと乗り込めないなんて、ロシアンマフィアも知れたものねえ」

葵のその言葉に、三人はギクツとした。それでもすぐに気を取り直し、

「死ね！」

問答無用の銃撃が始まった。葵はそれをまるで見透かすかのようにかわし、間合いを詰める。

「！」

ギャング達は、まさか銃撃を掻い潜って相手が接近するとは夢にも思っていなかったのだろう、葵の急襲になす術なく倒れた。

「弱過ぎる……」

葵は、いきなり飛び道具を使う連中は頭が悪いか弱いかのどちらかだと考えている。

「こいつらの場合、バカで弱いよね」

気絶しているギャングを特殊なロープで全員縛り上げ、携帯を取り出す。

「ああ、総監？ 何度も悪いんだけど、東京の治安でどうなってるのよ？ また暴漢に襲われたんだけど」

警視総監が電話の向こうで必死に詫びている。葵はクスツと笑い、「冗談よ。とにかく、こんな邪魔な連中はとっとと連行して欲しいから、大至急護送車を手配してね」

葵は麗奈の事務所の住所を告げると、サツサと携帯を切り、「出て来て大丈夫ですよ」

と事務員の女の子に声をかけた。

「怖かったですウツ！」

事務員の子はそう叫ぶと、葵に抱きついて来た。

「あ、その、もう大丈夫ですから」

「は、はい」

彼女は泣いていた。その上、ガタガタと震えている。相当怖かったのだろう。

（これは別にそういう事ではないわよね？ 一般女子の、当たり前
の反応よね）

葵は、その子が特別な感情から自分に抱きついて来たのではない
と強く言い聞かせた。

（そう言えば、王女様は元気かな？）

不意に懐かしい顔を思い出してしまふ葵だった。

「えーっ！？ 銃撃されたあ！？」

麗奈は葵からの連絡で、眩暈がしそうだった。

「それで、沙希ちゃんは無事よね？」

事務員の女の子は沙希ちゃんか。横で聞いている篠原はその名を
頭に刻み込む。こんな緊急時にも、彼のスケベセンサーは活動を続
けている。

「被害は？ え？ 壁に弾痕？」

ギクツとする篠原。

（ああ、弾の痕か）

言葉とは恐ろしいものだ、と彼は思った。

「ふう」

麗奈はグッタリとして椅子にもたれかかった。

「相手がロシアンマフィアじゃ、事務所の損害の賠償請求しても無
駄よね」

「ロシアンマフィア！？」

篠原は仰天した。麗奈は携帯をしまいながら、

「ロシア製の改造拳銃を持っていたようよ。見た目も白人らしいし、

決まりでしょ」

「そうですね」

篠原は眉をひそめる。

「それにしても、後小松のジイさん、どこでそんなつながりを持つたんだ？」

「院長はよくウラジオストックとかに行ってるらしいわよ。護のとは、そういう情報は掴んでないの？」

麗奈が不思議そうに尋ねる。篠原は苦笑いをして、

「後小松のジイさん個人は、ウチの管轄じゃないですからね。貴重な情報です。本部に報告しないと」

「そうね」

麗奈はニヤツとした。篠原はその笑いに何かを感じて、
「何ですか？」

「葵も、何だかんだ言って、護の事を考えているのかな、なんて思ったの」

篠原は肩を竦めて、

「あいつはそんな優しい女じゃありませんよ」

「ああ、言いつけちゃうぞ、葵に」

「どうぞ、どうぞ。俺の株はもう底値ですから、これ以上落ちる事はないです」

篠原は苦笑いした。麗奈は彼の開き直りに呆れて、

「どうしてあんた達は、本当の気持ちを相手に見せようとしないのかな」

「ハハハ」

篠原は照れたように頭を掻いた。

後小松謙蔵は激怒していた。

「あの腰抜けの総理大臣め。たかが探偵事務所は何を恐れているのだ。役に立たん」

日本の首相をそこまでこき下ろせる人間はそうはいない。

「何だ!？」

イラついている所へ、更に追い討ちをかけるように悪い知らせが入って来る。

「何だと!？」

麗奈の事務所を襲撃したギャング三人が、警視庁に逮捕されたという連絡だった。

「何をしているんだ!？ 相手は女三人の事務所だろう!？ あの弁護士のところも、女しかないはずだ。どうしてあんたらは、そこまで使えんだ!？」

後小松は血圧が上昇し、倒れそうだった。相手は言い訳をしている。

「思ったより強かったなど、下らん言い訳だぞ。あんたらはプロだろう!？ ここまでしくじられると、交渉相手を考えねばならんぞ」
相手は仰天したようだ。

「別に取り先はいくらでもあるんだ。中国でも、インドでも、中東でも、私は全然構わないんだぞ」

相手は何か新しい提案をしたようだ。後小松がニヤリとした。

「わかった。今度はうまくやってくれ」

彼は嬉しそうに携帯を切った。

日本国の総理大臣である橋沢龍一郎は、官邸の一室のソファで、与党進歩党の最高顧問である岩戸衆議院議員と相対して話していた。小柄で羽織袴姿の岩戸は、好々爺にしか見えないが、未だに政界に隠然たる発言力を持っている実力者であり、葵達月一族の秘密を知る数少ない人物でもある。

「なるほど。その後小松とかいうジイさんが、敵対相手を知らせずにお前に協力を求めて来たので、力を貸した、という事か？」

岩戸老人は、顔は穏やかなままであるが、眼光が鋭くなっている。橋沢は額から流れ落ちる汗をハンカチで拭いながら、

「はい。ですから、私は、後小松氏にこれ以上協力できない旨を伝

えましたので、後は岩戸先生のお力で、彼女達にその……」

「詫びを入れたいという事が、橋沢？」

「はい」

橋沢は祈るような目で岩戸老人を見ている。

「相手が葵ちゃん達だと知っていたら、決して手を貸したりしなかったのだから、許して欲しいと言いたいのか？」

「はい、その通りです」

橋沢は真剣な表情で言った。岩戸老人は、大きな声で笑い出した。

橋沢はホッとして、顔を綻ばせる。すると、

「バカ者が！」

といきなり岩戸老人が怒鳴った。橋沢は子供のように怯え、身を縮めた。

「相手が彼女達とわかったから手を貸すのをやめた、だと？ 貴様は何を考えている！？ そもそもそんな連中に一国の総理大臣が、いや、国会議員が手を貸して良い訳がなかるう！ どこまで愚か者なのだ、貴様は！」

橋沢は何も言い返せない。岩戸老人は、彼の返事を待つつもりはないらしく、ソファから立ち上がった。

「あ、先生、お待ち下さい」

このまま岩戸老人に帰られては、もはや頼る術がない。橋沢は慌てて立ち上がった。

「案ずるな、橋沢。葵ちゃんには伝えておくよ」

岩戸老人は、振り返らずにドアに近づき、そのまま部屋を出て行った。

「あ、ありがとうございます！」

頭を下げながら、橋沢は思った。総理大臣を辞めたい、と。

皆村は、大日本医科大付属病院事件の担当刑事と共に、重要参考人である八幡原栄伍やはたばら えいご外科部長を訪ねていた。

「どうぞ、おかけ下さい」

八幡原部長は、二人にソファを勧め、自分も向かいに座る。

「私は疑われているようですね」

八幡原は皮肉交じりの口調で言った。

「いえ、決してそのような事はありません。これは形式的なものですから」

担当刑事は作り笑いをして返す。皆村は、ジッと八幡原の顔を見ていた。

「そちらの刑事さんは、私をお疑いのようだ。先ほどから、ずっと睨まれていますから」

八幡原は皆村にまで皮肉を言つて来た。しかし皆村は、
「すみませんねえ、先生。この顔は生まれつきでしてね。申し訳ないです」

と皮肉で返した。八幡原は一瞬ムツとしたが、

「ああ、そうなんですか。それは失礼しました」

と作り笑顔で言う。狸め、と皆村は心の中で毒づいた。

「すでにお調べになっていると思いますが、私は、烏丸君が連れ去られた時、他の者達と一緒にそれを目撃しています」

「ええ、それは存じています」

担当刑事が鬱陶しそうに応じる。しかし八幡原は、

「それから、烏丸君が殺されたと思われる時間は、彼がするはずだった手術を執刀していました。私に犯行は不可能ですよ」

と尚も言い募る。皆村もうんざりしていた。

（こいつ、自分が完璧なアリバイなのを誰かに叩き込まれたように話す。その不自然さに気づかないほどのバカなのか？ それとも他に理由があるのか？）

八幡原は皆村達が黙ったのをどう解釈したのか、得意そうに笑って、

「見当違いを理解して頂けたようですね。そろそろお帰り下さい。私も優秀な部下を失って、とても困っているのですから」
と言つたり立ち上がった。

「わかりました。また来ます」

担当刑事が捨て台詞のように言うと、八幡原はバカにしたような笑みを浮かべて、

「何度来て頂いても、同じ事だと思えますがね」

と言い放った。皆村は、そこが自分の「陣地」でなかったから我慢したが、そうであつたら、間違いなく八幡原を殴り飛ばしていただろう。

「よく堪えましたね。自分だったら、ぶん殴つているところです」

部長室を出るなり、皆村は言った。すると担当刑事は、

「貴方がいてくれたからですよ。私一人だったら、殴つていたと思います」

「そうですか」

思いは同じ。皆村は彼の事が好きになっていた。

美咲はその直後、皆村から連絡を受けた。

「そうですか」

何も得るものはないと思つてはいたが、八幡原の自信に満ちた態度は、美咲にある確信を抱かせた。

「やっぱり間違いないわね」

「えっ？ 何かわかつたんですか？」

相向かいの席にいる茜が顔を上げて尋ねる。美咲も茜を見て、

「ええ。八幡原氏は、烏丸医師を殺害してはいないという事」

「でもそれは、アリバイが完璧なんだから、元々わかつている事ですよね？」

茜はキョトンとして言った。すると美咲は、

「そうじゃないの。八幡原氏は、仮にアリバイがあいまいだとしても、烏丸医師を殺害していないの」

「はあ？ 美咲さん、意味わかんないにですけど？」

茜は、美咲が自分をからかっているのではないかと思ひ始めた。

「そして、二つの事件は紛れもなくある同一人物による計画よ」

美咲は更に謎めいた事を言う。

「繋がりがあるのはわかりますけど。どうして断言できるんですか？」

茜は興味津々の顔で尋ねる。美咲はマウスを操作しながら、

「有力容疑者にアリバイがある。それも、自分で作ったアリバイではない。誰かが用意したようなアリバイ。そして、過剰なまでの自信。一つ目の事件の容疑者の海藤氏は直接話が聞けていないけど、皆村さんに見せてもらった捜査資料からわかる事なんだけど、やっぱり証言が全く揺らいでいないの」

「それは、完璧なアリバイがあるからでしょ？」

茜はまだ美咲が何を言いたいのかわからないようだ。美咲は手を止めて、

「容疑者が、犯人は自分ではないと言い切れるのは、どうしてもだと思っ、茜ちゃん？」

「それは、自分で殺害していないとわかってるからです。それ以上何があるんですか？」

茜はまた、美咲が自分をからかっていると思い始めた。

「それ以上の理由があるのよ」

「それ以上？ そんな事、あり得ないですよ」

茜はムツとしている。美咲はその様子がおかしくてクスツと笑ってしまった。

「ああ、やっぱり美咲さん、私をからかっているだけなんですね？」

「違うわよ。わからないかな、それ以上の理由が」

美咲は笑いを堪えながら言った。茜は腕組みをして、

「それ以上の理由なんてないですよ！ あったら、美咲さんに今月のお給料、全部あげてもいいです」

「本当に？」

美咲がニツとして尋ねたので、茜はギクツとしたが、

「ええ、本当ですよ」

「いいの、本当に？」

「いいですよ！」

茜はムキになって来ている。美咲はニコツとして、

「じゃあ、今月分のお給料は私のものね、茜ちゃん」

「えっ？」

美咲の微笑みが、「悪魔の微笑み」に見えた茜は、急に弱気になった。

「う、嘘です、ごめんなさい、美咲さん、さっきの取り消しです」

茜は大慌てで言った。美咲はさも残念そうに、

「ああ、惜しかったなあ」

茜はじれったくなつて来て、

「早くそれ以上の理由を教えて下さいよ！」

と叫んだ。美咲はクスクス笑っていたが、

「じゃ、教えるわね」

「はい」

茜は居ずまいを正して美咲を見た。

「二人は、誰が犯人なのか知っているからよ」

「あっ！」

茜は賭けを下りて正解だったとつくづく思った。

「これ以上自信になる事はないでしょ？ 自分が殺害していないのを証明するのは難しいけど、自分以外の誰かが殺害するのを知っていれば、警察にどれほど責められても、全く怯む事はないでしょ？」

「そ、そうですね」

そんな犯行を計画したのだとしたら、その連中も凄いけど、これだけ少ない情報から、そこまで辿り着いてしまう美咲さんはもっと凄いと茜は思った。

「所長が、麗奈さんの事務所で次の標的となる人を特定できれば、犯行グループの先手を打てるし、犯人を捕まえる事もできるはずよ」

美咲の言葉に、茜はすっかり感心していた。

第十二章 急襲

10月2日午後1時

水無月葵は、暴漢達を警視庁の機動隊に引き渡すと、書類の棚の中を搜索していた。

（またか……）

松木麗奈法律事務所は、怖い。葵は溜息を吐いた。

「あの」

事務員の子が声をかける。

「はい？」

葵は愛想笑いをして彼女を見る。

（確か、伊東沙希さんだっけ）

「先程は、抱きついたりして申し訳ありませんでした」

「あ、いえ。怖かったんでしょ？ 仕方ないですよ」

言ってしまうてから、葵は、

（まずい）

と気がついた。沙希の顔が急に晴れやかになったのだ。

（OKサインを出したようなものね。困ったな）

「コーヒーを淹れますね」

沙希は嬉しそうに給湯室に歩いて行く。

（ま、いっか。あの王女様みたいに、いきなりキスしたりはないだろうだから）

しかし、相手はあの麗奈の事務員だ。どうなるかわからない。

「はあ」

また溜息を吐く葵だった。その時、滅多に鳴らない着メロが鳴った。

「まあ、珍しい」

葵はニツとして携帯に出た。

「おはようございます。こちらに連絡とは、珍しいですね、岩戸先生」

相手は岩戸老人だ。

「橋沢の阿呆が、また絡んでおったので、先程怒鳴りつけてやった」
「え？」

葵は意外な事実には驚いた。

「つくづく、執念深いオジさんですね、あの人」

葵は苦笑いする。岩戸老人も笑ったようだ。

「今度は詫びを入れたいと言って来たよ。さすがのあの阿呆も、君達の事は怖いらしい」

「まあ」

それは嬉しいような、ム力つくような話だ。

「後小松の事、儂の方でも調べた。星一族とは違った意味で危ないぞ」

「ええ、わかっています。さっきも、手荒い挨拶をされたばかりです」

「そうか。気をつけてくれ、葵ちゃん」

岩戸老人の声があまりに真剣な調子だったので、葵は、

「心配しないで下さい、先生。ギャング如きにやられる私達ではありませんから」

「そうだな。じゃあ、また」

「はい」

葵は携帯をしまい、また書類を開いた。

（麗奈さんて、医療過誤専門なのかな？ 全部その関係だ）

これでは、次のターゲットを絞るのが難しい。

「後小松総合病院と、大日本医科大学付属病院の方を、もう一度見直してみるか」

葵は書類を閉じ、棚に戻した。

麗奈は篠原と共に菖蒲あやめに付き添い、病院の最上階にある食堂で昼食をとっていた。

「まだ事件は解決しないの、護君？」

菖蒲がステーキを切りながら尋ねる。篠原は、ガリガリに痩せた姉の旺盛な食欲に驚きながら、

「そんな簡単に解決できたら、警察も消防もいらないよ」

「言い訳ね」

菖蒲はガツガツと肉を食べる。麗奈が、

「あんた、よく昼間にそんなたくさん食べられるわね。胸焼けしない？」

「午後から手術なのよ。胃癌のね」

思わず目を見合わせる篠原と麗奈。

「手術前は、たくさん食べないと、体力が保たないのよ」
「なるほどね」

麗奈は気持ちが悪くなったのか、箸を置いた。

「ご馳走様」

どうやら、菖蒲の手術風景を想像してしまったらしい。菖蒲はナイフとフォークを置いて、麗奈と篠原を見た。そして、何故か、ニンマリする。

「な、何？」

麗奈は嫌な予感がして尋ねた。篠原もハツとして姉を見る。

「そうやって並んでいると、あなた達、お似合いね」

「はあ？」

篠原が呆れる。麗奈は苦笑いする。

「護君、葵じゃなくて、麗奈と付き合いなさい。その方が里の両親も安心するわ」

「あのなあ」

姉の途方もない提案に、篠原はうんざりした顔で抗議しようとした。

「あら、いいの、付き合っちゃって？」

麗奈の反応に、篠原はギョツとした。菖蒲はフツと笑って、

「冗談よ。女が好きな貴女が、女が大好きな護君と付き合える訳ないでしょ」

とまたステーキを食べ始める。

「姉さん！」

「女が大好き」と言われた篠原は、それを否定できない自分を悲しく思いながらも、抗議した。

「あら、菖蒲、認識不足よ。私はどっちも好きなのよ」

「え？」

菖蒲と護の姉弟は、その時ばかりは声がピッタリ揃った。

「冗談はさて置き、そろそろ準備をしないとイケないわ。この払いは、護君のガード料と相殺で、私がするわね」

菖蒲はいつの間に食べ終えたのかというくらいの速さでステーキを平らげ、トレイを持つと席を立った。

「姉貴が奢るなんて、何か恐ろしい事の前触れかな？」

篠原が呟く。麗奈がそれを受けて、

「かもね」

と言った。

美咲と茜は、珍しく二人共手弁当だったので、事務所で昼食タイムとなった。

「麗奈さんの事務所も襲撃されるなんて、後小松っていうジイさん、何者なんですかね？」

茜がミートボールをパクつきながら呟く。美咲は箸を置いて、

「相手がロシアンマフィアで間違いないとすると、ちょっと気になる情報があるのよ」

「何ですか？」

茜が興味津々の顔で尋ねる。美咲は茜を見て、

「ロシアの暗黒街のボスの一人が、癌らしいの」

「癌、ですか？」

「ええ。それで手術を受けたいのだけど、仕事柄公式には病院に入院できないから、困っているらしいの」

茜はニマツとして、

「後小松のジイさんと繋がりましたね。ジイさん、ウラジオストクによく行ってるんでしょ？」

「麗奈さん情報ではね。でもそれだけの事で、ロシアンマフィアともあるうモノが、後小松院長の言いなりになるのかしら？」

美咲の疑問に茜は腕組みした。

「確かに。依頼を受けて仕事をするって感じじゃないですね。こき使われているような……」

「そうなのよ。この事件、もう一つ何かあるような気がするの」

美咲はタコさんウインナーを食べて言った。

「皐月先生、急患です！ 救急車がもうすぐ到着します！」

看護師が走って来て告げた。菖蒲はビックリして、

「私はこれから手術なのよ？ 無理だわ」

「そちらは明日に延期して、こちらを優先して欲しいと政治家から電話があつたそうです」

「政治家？」

菖蒲は露骨に嫌な顔をした。

「何様のつもりよ、そいつは！？」

「院長からも、優先して欲しいと電話がありました」

「本当に全く！」

これだから、大学の付属病院は嫌だ！ 菖蒲は心の中で毒づいた。

「逆らうと、圧力かけられるのね」

院長の立場を哀れむ。

「そういう事なら仕方ないわ」

菖蒲は看護師の後につき、救急救命センターへと走った。

「救急車、到着しました！」

菖蒲はその声に応じて、センターの処置室のドアをバンと開いた。菖蒲を先導していた看護師は、救急車から降ろされる怪我人をストレッチャーに移動させるため、配置についた。救急車が救命センターの入口に横づけされた。後部のドアが開き、人が出て来る。

「え？」

看護師はギョツとした。それは救急隊員ではなく、黒尽くめのギヤングだったのだ。彼らはサングラスをかけ、大きなマスクをしていたので人相はわからなかったが、白人らしいのは肌の色でわかった。

「あ、あ……」

看護師が啞然としていると、ギヤング達は凄まじい速さでその場から去り、救命センターの処置室へとなだれ込んだ。仰天して動きが止まる看護師や医師達。

「何事！？」

騒がしい来訪者に菖蒲が怒鳴る。ギヤング達は菖蒲に銃を向けた。他の者達は、震え上がった。

「どういふつもりよ、あなた達は！？」

それでも怯まない菖蒲はやはり月一族だ。だが、ギヤング達は菖蒲の質問を無視し、彼女に当て身を食らわせると、そのうちの一人が彼女を担ぎ上げ、あっという間に出て行ってしまった。

「うわあ……」

救命センターのドアの外で立ち尽くしていた看護師が我に返った時は、救急車は姿を消していた。

「何ですって！？」

菖蒲拉致の話を篠原からされて、葵は仰天した。

「あんたがついていながら、何してたのよ！？」

愚問とわかっていたが、口に出してしまう。葵自身も、完全に意表を突かれたのだ。

「すまん。油断した。まさか、真昼間に堂々と押し込んで来るとは思わなかったんだ」

篠原の声に元気がない。

「ごめん」

「何が？」

葵に謝罪された事は、今までであつただろうか？ 篠原はふとそんな事を考えた。

「あんたのお姉さんが連れ去られたのに、酷い事言つた。ごめん」
「いいよ。お前に謝られると、何か怖い」

「……」

葵は何も言い返せない。

「実行グループは目撃者の証言から、ロシアンマフィアのようなやつち関係を調べるために俺は一度本部に戻る。麗奈さんの護衛は、大原に直接頼んだから、安心してくれ」

「わかつた。落ち着いてね、護」

葵は篠原を気遣つて言つた。すると篠原は、

「姉貴は大丈夫だよ。連れて行つたのは、普通の救急車だ。黒くなかつた」

「という事は、菖蒲さんは餌つて事？」

葵の問いかけに篠原は、
「姉貴が知つたら激怒しそうだけど、多分そういう事だろう。用があるのはお前の方さ」

「なるほどね」

葵は篠原に礼を言い、携帯を切つた。

「連中も焦っているのね」

美咲と茜も、菖蒲が連れ去られたと聞き、驚いていた。

「菖蒲さんをどうするつもりなんでしょう？」

「所長をおびき出したいんだと思うわ」

美咲の答えに、茜は首を傾げて、

「用があるなら、直接所長を襲えばいいのに」

「それに失敗したから、菖蒲さんを人質にするんでしょう？」

美咲が呆れて言う。茜はニヤツとして、

「菖蒲さんが人質でも、所長は全然躊躇しないと思いますけど」

「茜ちゃん……」

妙に嬉しそうな茜を見て、美咲は溜息を吐いた。

（確かにそうかも知れないけど、それを言葉にしないでよ、茜ちゃん）

後小松謙蔵は、院長室で皋月菖蒲拉致を成功したと報告を受けた。

「初めからこうすれば良かったな」

後小松は電話の相手に皮肉っぽく言った。

「その女は使える。殺すなよ。人質としての価値の他にも、使い道があるのはあんたらもよくわかってるはずだ」

後小松の言葉は、謎めいていた。

「それから、探偵事務所と接触している刑事も目障りだ。早く始末しろ」

彼は携帯を切り、その醜く太った身体を椅子に沈める。

「最後に役に立ったな、橋沢。お前の支援は、次の総選挙では見送るがな」

後小松はニヤリとした。

皆村秀一は、自分の署に戻るため、車を走らせていた。

（全く、何なんだよ、この事件は？）

イライラする彼の心を静めるかのように、携帯が鳴った。

「おお」

皆村は目の前に迫った署の駐車場に素早く車を乗り入れ、携帯に出た。

「すみません、お待たせして」

相手は美咲だ。

「実は、皋月菖蒲さんが、何者かに拉致されたんです」

「さつき、あやめ？」

皆村には、その名前がすぐに誰なのかわからない。

「黒い救急車の目撃者です」

「ああ」

ようやく彼女の傲慢な物言いがリフレインする。

「それが何か？」

皆村にとって、菖蒲の事などどうでもいい事だ。

「皆村さんも気をつけて下さい。狙われているかも知れません」

「まさか」

皆村は一笑に付した。しかし美咲は、

「可能性はあります。ですから……」

美咲が自分を心配してくれている。皆村は感動していた。

（生きてて良かった）

そうまで思ってしまった。

「ありがとうございます。気をつけます」

「そうして下さい」

皆村は名残惜しそうに携帯を切り、車を降りた。

「しかし、そこまでするって、一体何を考えているんだ、その連中は？」

彼は首を傾げて署の玄関に向かう。

「ぐっ……」

背中に衝撃が走る。ふと腹を見ると、ワイシャツに血が滲んで来ていた。

「……」

彼はその場に倒れ伏した。玄関前に立っていた制服警官が驚いて彼に駆け寄る。そして銃撃を受けたのに気づき、周囲を見回した。

菖蒲の勤務する大学病院に到着した大原は皆村が狙撃されたと聞き、驚愕していた。隣の麗奈もビックリしている。

「わかりました」

大原は携帯を閉じ、麗奈を見た。

「貴女も警戒した方がいいですよ、先生」

「みたいね」

菖蒲は連れ去られただけなのに、皆村は狙撃？ この差は何？

麗奈は怖くなった。

「僕では守り切れないので、茜ちゃんを呼びますね」

「あら、どうして？」

麗奈の質問に、大原は苦笑いして、

「トイレまではついて行けませんから」

「ああ、なら、私、男子トイレでもOKよ。気にならないから」
「ハハハ」

貴女が気にならなくても、男の方が気にしますよ、と大原は思った。

葵も、皆村が狙撃された事に衝撃を受けていた。

「そのつもりになれば、いつでも殺せるって意味？」

菖蒲は拉致され、皆村は狙撃。その差に疑問を感じた葵は、

「まさかね」

とある推測を思いつき、すぐに考え直した。

美咲は、いつも冷静な彼女がどうしたのだろうというくらい、驚いていた。

「時間的に、私が連絡した直後だわ」

彼女は茜と共に麗奈の元に向かっていた。葵が心配して、美咲も麗奈につくように言っただけだ。

「美咲さんのせいじゃないですよ」

茜も美咲の狼狽振りを気にして慰めの言葉をかけた。

「皆村さんは、私達とつながりがあったから、狙撃されたのよ。私が皆村さんと会ったりしなければ……」

「考え過ぎですよ、美咲さん。そんな事を言い出せば、大原さんがあの刑事さんを紹介したんですから、大原さんも悪くなりますよ」

「そ、そうね」

ネガティブな思考は何も生み出さない。それが、美咲の座右の銘だ。すぐに悪い考えを振り払う。

「刑事さんのお見舞い、行きます？」

茜が水を向けると、美咲は、

「私が行っても、皆村さんの容態が良くなる訳ではないわ。それより、元を叩かないと」

「そうですね」

いつもの美咲に戻ったのを確認した茜は、前を見て言った。

第十三章 美咲、切れる 10月2日午後4時

皆村秀一は警察病院に運ばれて手術を受け、何とか一命を取り留めた。

「良かった……」

美咲は携帯を閉じながら呟いた。

「美咲さん、もしかして、あの仏頂面の刑事を好きなんですか？」

茜が嬉しそうに尋ねる。美咲はギクツとして、

「ち、違いわよ。私のせいで狙撃された気がするから、無事で良かったと思っただけよ」

「そうですかあ」

茜は疑いの眼差しを向けたまま、ショルダーバッグを肩に掛けた。

「とにかく、今一番危ないのは麗奈さんよ。急ぎましょ、茜ちゃん」

「はい」

二人は事務所を出た。

葵は麗奈の事務所のソファで思索に耽っていた。

（ロシアンマフィアを後小松が動かせるのは何故？ そして、黒い救急車を使ったバカげた寸劇は何のためなの？）

謎だらけである。

「どうぞ」

沙希がコーヒーを出してくれた。

「ねえ、沙希ちゃん」

「は、はい」

顔を赤らめて返事をする沙希を葵は苦笑いして見上げる。

「金村さんと烏丸さんは、ここに来たのよね？」

「はい」

葵は少し考えてから、

「二人に共通する事はない？ 何でもいいから、教えてくれないかな」

「えーと……」

沙希はトレイを抱えたままで考え込む。

「お二人とも、イケメンでした」

沙希はニツコリして言った。

「……」

まさかとは思っていたが、やっぱりそこか、と葵はガツカリした。それを察した沙希が、

「す、すみません。そんな事、どうでもいい事ですよね」

「ああ、そんな事ないわよ。何でもいいからって言ったんだから、構わない。もつという思い出してみて」

男に興味がないから、あまり観察していなかったのかな、と葵は考えた。

「そう言えば」

沙希は葵の前に座った。

「何？」

葵は身を乗り出す。沙希はそれにまた赤面し、

「お二人共、パスポートの話をしていました」

「パスポート？」

何だ？ 只の偶然か？ それにしては、麗奈の事務所でパスポートの話は不自然だ。会話の流れで出て来たのだろぅが、どうにも意味が分からない。

（麗奈さんに訊かないといけないな。しかも、いろいろ書類が揃っているから、ここに戻ってもらわないと）

葵は携帯を取り出し、美咲に連絡した。

「それにしても」

病院の待合室で、美咲達の到着を待っている麗奈は言った。

「はい？」

大原はその口調に何かを感じたのか、麗奈を見た。

「どうして葵のところには、こんなに面倒ばかり起こす人間が集まるのかな、と思ったの」

「そうですか？」

大原は自分が警察官なので、あまりそんな風には感じないようだ。麗奈は溜息を吐き、

「その中でも飛び抜けて面倒な奴が誘拐されてさ。誘拐した連中、今頃後悔してるかもよ」

大原は苦笑いするしかない。菖蒲あやめとは直接会話した事がないが、雰囲気でもやり辛い人だとは思っている。茜も苦手のようだし、何しろ葵ですら避けているという事だから、相当な人物なのだろう、とも分析していた。

「あ、葵からだ」

麗奈は携帯に出た。

「どうしたの？」

しばらく葵が話す。麗奈は相槌を打ちながら、会話を続けた。

「わかった。じゃあ、大原君と一緒に事務所に戻るわ」

麗奈が携帯を切ると、

「どうしましたか？」

と大原は尋ねた。麗奈は大原を見て、

「葵が何かに気づいたみたいなの。私に訊きたい事があるから、事務所に戻ってくれって」

「そうですか」

大原が立ち上がると、

「ああ、美咲ちゃん達と同行するように言われたから、彼女達を待ちましょう」

「あ、はい」

大原は椅子に戻った。

後小松は皆村の狙撃が失敗した事を知らされ、また憤激していた。

「確実に仕留めると言ったはずだぞ。警察関係者は、警察病院の警備が厳重な病室に入ってしまうから、もう殺すのは無理だ。後は死んでくれるのを祈るだけだな」

電話の相手が何かを言った。

「バカを言うな。私は日本でテロを起こすつもりはない。あんたらに協力しているだけだ。そしてあんたらは、その見返りに私に協力しているだけだろう。警察病院を爆破するのは構わんが、それは私の関知する事ではないぞ」

ギャングと言う連中は限度というものを知らん、と後小松は内心呆れていた。

「とにかく、契約では後一人だ。もちろん、確保している。そして、警察もあの探偵共も、まだ我々の狙いはわかってはいないはずだ」
後小松は狡猾な笑みを浮かべた。

「それから、探偵共への罠の準備は整っているか？」
相手が答える。

「あの皐月菖蒲は、探偵とは顔見知りだ。絶対に取引に応じて来る。うまくやってくれよ。私達の命運がかかっているのだからな」

後小松は携帯を切り、机の上に置いた。
「終わり良ければ、全て良しだな」
彼はその醜い腹を擦りながら呟いた。

その頃、美咲達は渋滞に巻き込まれていた。

「もう、ついていないですねえ。ナビでは、こっちが空いているはずだったのに、直前に事故が起こっているなんて」

助手席で茜が剥れた。美咲は肩を竦めて、

「こればかりは仕方ないわよ。まさか事故が起こるなんて、誰にも予測できない事だし……」

と言いかけ、ハツとした。

「どうしたんですか、美咲さん？」

茜も美咲の異変に気づいた。

「まさかとは思うけど、この事故、故意に起こしたのかも」

「ええ？ そんな、まさか……」

その時、フロントガラスに何かが当たった。銃弾のようだ。周囲のドライバー達が仰天して逃げ出した。

「この茜号を狙撃するなんて、どこのバカ？」

茜はキツとして、辺りを見渡した。

「とうとう、茜号で決まりなのね、この車は」

美咲が小声で言うと、

「そうですよ。何か不満ですか、美咲さん？」

「別に」

美咲はダッシュボードの液晶パネルを操作し、ミニバンの前後に小型カメラを出した。

「こんなので見つけられないとは思うけど、一応威嚇の意味も込めてね」

「ミサイルでも射たれない限り、大丈夫ですけどね」

すっかり人気がなくなつた道路を見て、茜が言う。

「まだ狙ってますか？」

「こんなに高い建物があるんだから、まだ狙っているでしょうね。外に出ないでね、茜ちゃん」

茜はニヤツとして、

「それって、『押すなよ、押すなよ、絶対押すなよ』と同じですか、美咲さん？」

「何それ？」

お笑い番組を全く知らない美咲には、茜の渾身のボケは不発だった。

「何でもありません」

茜は撃沈した。

「えっ？」

フロントガラスにヒビが入った。

「特殊な弾丸ね。このままじゃ、茜号が棺桶になりそうよ」

美咲は忍び装束に着替えた。茜も素早く忍び装束になる。

「これ以上この茜号を傷つけさせないわよ、バカギャング共め！」

茜はサツとドアを開いて外に飛び出した。

「茜ちゃん、危ないわよ」

美咲も外に出る。

（銃弾の入射角から考えて、あのビルの屋上？）

美咲は走った。

「ああ、美咲さん、待って下さいよ」

茜が慌てて追いかける。

「あそこね」

美咲は自分達の動きを追い切れていないスナイパーの姿をはつきりと確認した。

「逃走経路を遮断して、茜ちゃん」

「了解！」

茜がビルの裏手に回り込む。スナイパーは標的^{ターゲット}を見失って、動転している。

「逃がさない！」

屋上から顔を引っ込めたスナイパーを見て、美咲はビルの壁をよじ上った。まるでヤモリのようなが、彼女の名誉のためにもそれは使つてはいけない表現だろう。

「待ちなさい」

金網の外から現れた美咲を見て、スナイパーは仰天していた。

「ど、どこから？」

「逃がさないわよ。観念しなさい」

相手はロシア人のようだ。

「くそ！」

スナイパーはライフルを投げ捨て、自動小銃を取り出した。

「危ないものを！」

スナイパーは自動小銃を乱射した。美咲はまるでプリマドンナのように華麗な動きをし、銃撃をかわす。

「ば、化け物か？」

「失礼ね、おっさん！」

いつの間にか後ろに回り込んでいた茜が、スナイパーの首筋に手を叩き込んだ。

「ぐっ……」

スナイパーは呆気なく倒れた。

「何、こいつ。弱過ぎる」

茜は呆れ顔で呟く。美咲が近づいて、

「銃を振り回す人間で、私達に勝てる相手はいないわよ」

「それもそうですね」

茜はニツコリして言った。

「大原さんに連絡して、処理を頼みます」

「お願いね」

美咲は葵に連絡を入れた。

葵は美咲達が再び銃撃された事を知り、怒りを露にした。沙希が思わず後退あしすさりする。

「あのジジイ、まだ懲りていないようね。でも知らないわよ、ジイ様。美咲大明神を怒らせると、私より始末が悪いんだから」

葵が嬉しそうに恐ろしい事を言ったので、沙希はとうとう葵から離れて、給湯室に逃げ込んでしまった。

「ハハハ……」

それに気づき、葵は苦笑いをした。

「あ」

ミニバンに戻ると、周囲はすっかり元通りになり、車が行き交っている。

「美咲さん、何かが貼られていますよ」

茜がフロントガラスに付けられている紙を指差した。

「地図ね。住所が書かれているわ。どこかしら？」

車内に戻り、ナビで検索する。河原のようだ。廃車の処理場らしい。

「そこに菫蒲さんがいるみたい。取引をしようって事ね」

美咲は紙に書かれた内容を読んだ。

「一人で来いですって。危なそうね」

「所長に行ってもらいましょう」

茜が嬉しそうに言い出す。美咲は茜を見て、

「いいえ。これは私が行くわ。菫蒲さんの救出もそうだけど、皆村さんの件もきっちりお礼をしたいから」

「やっぱり、美咲さんて、あの強面さんこわもてが好きなんですね？」

茜がまた言い始める。すると美咲は、

「そうなのかもね。今までにいない、とても純真な人だから」

「え？」

思わぬ発言に、茜はビックリしてしまい、何も突っ込めなかった。

葵は、美咲から更に連絡を受けていた。

「なるほどね。やっぱり菫蒲さん、そう使われたか。ええ、いいわよ。貴女に任せる。あまりやり過ぎないでね」

「所長には言われたくありません」

美咲が憤然として言う。葵は笑って、

「はいはい。気をつけてよ。相手はギャングだから、何を仕掛けて来るかわからないわよ」

「ええ。慎重に行動します」

葵は携帯を切った。

美咲は茜と別れ、一人で廃車処理場に赴き、茜は「茜号」を運転し、大原と麗奈の待つ大学病院へと向かう事になった。

「美咲さん、気をつけて下さいね」

「ええ」

美咲は忍び装束のまま走り出し、ビルの屋上へと飛び移ると、た

ちまち姿を消した。

「廃車処理場か。何か、凄い事になりそうだから、見に行きたいな」
茜は嬉しそうに笑ってから、「茜号」を発進させた。

その廃車処理場は、今は使われていない。会社が倒産し、只の産業廃棄物と化してしまったその残骸は太陽の光を浴びて、不気味に輝きを放っている。菖蒲はギャング達に後ろ手に縛られたままで、廃車の前に立たされている。ギャングは全員で十五人程いた。今までの情報から、葵達が相当強い事を知らされているのだ。

「こんなところに連れて来て、どうするつもりなの、あんた達は？」
拉致されてから数時間が経過するにも関わらず、菖蒲はまだ元気だった。

「うるせえよ。黙ってる」

ギャングの中のリーダー格の男が言い放つ。菖蒲はムツとしたが、何も言い返さなかった。

「来たようです！」

双眼鏡で辺りを監視していた下っ端のギャングが叫んだ。

「どうして葵が助けに来ないのよ!？」

美咲を見るなり、菖蒲が怒鳴った。それを聞いた美咲は苦笑いした。

「すみません、菖蒲さん。私が志願したんです」

「ホントにいい子ね、貴女は。護君と付き合いなさいよ」

「ハハハ」

そればかりは応じられません、菖蒲さん。声に出して言えないのが残念な美咲である。

「本当に一人で来るとは、とことんバカだな、お前らは。只、お前らのボスが来なかったのが惜しいけどな」

リーダーがニヤけながら言う。美咲はリーダーを睨み据えて、

「貴方達では格が違い過ぎるから、私が来たのよ」

「何だと!？」 あのプロサイクな面した刑事みたいに、てめえのその

腹に鉛玉食らわせてやろうか、ネエちゃん!？」

リーダーのその言葉が、美咲を刺激した。

ブチッ。彼女の中で、何かが切れる音がした。

「知らないわよ、あんた達。あの子を怒らせたわね！ ホントに知らないわよ！」

菖蒲が怒鳴り散らす。リーダーが菖蒲を睨みつけ、

「邪魔だよ、オバさん。向こうへ行つてろ」

「何ですって？ 誰がオバさんだ、この穀潰し共が！」

菖蒲は二人のギャングに引き摺られるようにして隅に連れて行かれた。

「殺^やつちまえ！」

「おおっ！」

ギャング達は一斉に銃を取り出し、乱射した。

「そんなもの！」

美咲は近くにあった廃車のドアを片手でズインと引きずり出すと、まるで座布団でも放るように投げた。

「ギエッ！」

ギャング達は驚愕した。あり得ないものが飛んで来たからだ。

「うわあっ！」

先頭で銃を撃っていた二人が、腰をぬかす。彼等の目の前の地面に、ドアがドスンと音を立てて突き刺さったのだ。

「ひいいいっ！」

逃げ出したギャング達の行く手を遮るようにして、ドスンドスンとドアやボンネットが地面に落下する。

「な、何なんだ、あの女は……？」

一番後ろでそれを見ていたリーダーが呟く。

「忍者よ。よく覚えておきなさい」

菖蒲が言った。リーダーはハッとして彼女を見た。そこには、ロ―プを解かれた菖蒲と、ギャング二人を倒した美咲がいた。

「い、いつの間に……」

リーダーがそう言った時、彼はすでに美咲の手刀で倒されていた。

「お疲れ様でした、菖蒲さん」

息一つ乱さずに美咲が言った。菖蒲は微笑んで、

「貴女こそ、お疲れ様、美咲」

と応じた。

第十四章 医療過誤の裏側 10月2日午後5時

皆村秀一は、一面が花畑の丘の上で目を覚ました。

「ああ」

彼は思った。

（ここはあの世か？ 俺は死んでしまったんだな）

ふと、美咲の笑顔を思い浮かべる。

（例えば他に人がいたとしても、あの人と食事をできたのは嬉しかった。でも、一度くらいデートしたかったな）

美咲と二人きりでは、彼女の顔も見られないのに、そんな事を考えてしまう自分に呆れる。

「美咲さん」

皆村は愛しい人の名前を呟いてみた。

「はい」

え？ 今、返事が聞こえた。どういう事だ？ 皆村は混乱した。

「意識が戻ったんですね、皆村さん」

また美咲の声がする。皆村は仰天して目を開いた。そこは警察病院の病室だった。

「良かった、皆村さんが無事で」

ふと横を見ると、美咲が目を潤ませて自分を見ていた。その隣には、刑事課長がいる。

（何であんたがいるんだ？）

思わずそう言いそうになった。折角美咲さんが来てくれたのに、邪魔するなよ。そうも言いたかった。

「あ、ありがとうございます」

皆村は顔が火照るのを感じた。先日現場であつた時も、こんなに顔が近くにあつた事はない。手を伸ばせば届くところに美咲がいる。「安静にしていして下さい。皆村さんを狙撃した犯人は必ず捕まえますから」

「は、はい！」

危ないからやめて下さいという発想が浮かばない。とにかく嬉しかった。

「また来ますね」

うおおお！ 皆村は心の中で雄叫びをあげた。また来ますね。何ていい響きなんだ。美咲は小さく手を振りながら病室を出て行った。

「何だ、皆村、お前にも彼女がいたんだな」

課長がニヤニヤしてからかう。皆村はギョツとして、

「ち、違いますよ！ あの人は探偵です。大原の紹介の……」

「ああ、そうか。でも、いい雰囲気だったぞ。彼女、お前に気があるんじゃないか？」

「え？」

課長の軽口にも過敏に反応してしまう。

「あり得ないですよ。あれほどの美人には、絶対恋人がいますって」

皆村は苦笑いして言った。

「そりゃそうだな」

課長のあっさりとした応答が妙にムカつく皆村だった。

一方茜は、大学病院に行つて大原と麗奈を「茜号」に寄せ、麗奈の事務所に向かった。

「あらあ、美咲ちゃんはある？」

残念そうに麗奈が言う。

「美咲さんは、菖蒲さんを助けに行きましたよ。後で合流です」

「菖蒲なんて助けに行かなくてもいいのにイ。美咲ちゃんが助けに来てくれるのなら、私も捕まろうかしら？」

麗奈は相変わらずムチャクチャな事を言い出す。茜は苦笑いしたが、

「冗談でもそんな事は言わないで下さい、松木さん」

と大原は大真面目な顔で窘めた。

「はい」

麗奈はションボリしてしまった。

その頃篠原は、防衛省で驚くべき事を知った。

「ロシアンマフィアだけでなく、ロシアそのものが動いているんですか？」

篠原は本部のロシア担当の先輩に話を聞いていた。

「ああ。国そのものという事ではないが、現体制を快く思わない反対派が暗躍している。それがマフィアと結託して、日本に潜入しているらしいんだ」

「それで、後小松のジイさんはどう繋がるんですか？」

「そこがわからないんだよ。あのジジイがウラジオストクによく行っているのは把握しているんだが、何をしているのかはまだ掴めていない。CIAも動いているので、相当ヤバい事かも知れん」

「……」

ヤバい事には慣れっこのつもりだったが、CIAと聞くと、さすがの篠原もギクツとする。

「お前、あまり関わらない方がいいぞ。相手はギャングだけじゃないかも知れないんだからな」

「はあ」

篠原はその先輩に礼を言い、防衛省を後にした。

しかし葵は、篠原からロシアの話を聞き、ニヤツとした。

「楽しくなりそうね、護」

「お前なあ……」

篠原は葵の神経の太さに呆れる。

「ロシアの内部で何が起きているのかなんて私にはどうでもいいわ。でもこれで、どうして黒い救急車を使ってまで大袈裟な事をしたのか、読めて来た気がする」

「どういう事だ？」

篠原が興味をそられて尋ねる。だが葵は、

「内緒。あんたは口が軽いから教えてあげない」

「おい……」

葵は相変わらずだ、と篠原は苦笑した。

「貴重な情報ありがとう」

「たまにはお礼が欲しいな」

篠原が言つと、

「はい、投げキッス」

葵はブチュツと音だけを聞かせた。

「直接して欲しいんだけど」

篠原のその懇願には何も返事をせず、葵は携帯を切った。ふと気づくと、沙希がポオツとしている。

（あ、しまった、沙希ちゃんがいるのを忘れてた）

位置関係からして、葵の投げキッスが沙希を「直撃」してしまつたようだ。

「ごめんね、沙希ちゃん」

「いえ、ありがとうございます！」

何故か礼を言われ、葵は苦笑いした。

「すみません、篠原さん、私まで乗せてもらつて」

美咲は助手席で恐縮している。彼女と菖蒲は篠原の運転するワンボックスカーに乗っていた。

「いいのよ、美咲、お礼なんて言わなくても。護君は私のボディガードなんだから」

菖蒲は後部座席でふんぞり返つて言った。

「そうそう。姉さん抜きでも、美咲ちゃんならどこでもお迎えに行つちゃうよ」

篠原がおどけて言う。美咲はキツとして、

「所長に言いつけますよ！」

「どうぞどうぞ。あいつはそんな事では怒りませんので」

「……」

呆れる美咲。すると菖蒲が嬉しそうに、

「護君、この際だから美咲と付き合いなさいよ」

美咲はギクツとした。篠原は笑って、

「それはダメ。美咲ちゃんに手を出したりしたら、葵に殺される」

「おかしい事言わないでよ、護君」

菖蒲ははぐらかされたのに気づき、ムツとした。

「それに、美咲ちゃんには神戸ごうどっていう彼氏がいるしね」

神戸とは外務省の官僚だ。最近はずっかり会う機会がない。

「まあ、外務官僚とまだ続いているの？」

菖蒲も地獄耳だ。大概の事を知っている。美咲は苦笑して、

「続いてなんかいません。神戸さんとは仕事上の付き合いだけです
から」

「神戸が聞いたなら、自殺するぞ、美咲ちゃん」

篠原がからかう。美咲はギクツとして、

「そんな事ありませんよ！」

と反論した。

後小松謙蔵は、ギャング達が皆逮捕されたのを知り、激怒した。

「たかが女探偵に何を手こずっているのだ！？ マフィアの名は伊
達か！」

後小松はそのまま倒れそうな勢いで怒鳴り散らした。

「次を急がねばならん。すぐに取りかかってくれ。手筈はすんでい
る」

彼は乱暴に携帯を切り、ソファに投げつけた。

「使えん連中だ。この取引を最後にするか」

後小松はニヤリとした。

「私の力を必要としている連中は、世界中にいるのだからな」

後小松は何を企んでいるのだろうか？

茜達三人は、美咲達より一足先に麗奈の事務所に到着した。

「お帰りなさい、先生」

沙希はビクツとしてソファから立ち上がり、麗奈を出迎えた。

「沙希、そんな風に驚かれると、私が貴女を虐待しているみたいだから、もう少し普通にしてくれない？」

麗奈は茜達の視線を気にしながら言った。

「申し訳ありません、先生」

沙希はますます慌てふためいて頭を下げる。葵がニヤリとして、

「相当怖がられてますね、先生？」

「もう、葵まで！ 貴女には言われたくないわよ。ね、茜ちゃん？」

麗奈の無茶ぶりに、茜がギクツとした。

「茜、あんた麗奈さんに私の悪口言ったでしょ？」

葵が茜を睨む。茜はビククリして、

「い、言つてませんでア。所長、勘繰り過ぎですよ、もう……」

と麗奈を見た。麗奈は悪びれもせず、肩を竦めてみせた。そして、

「で、私に訊きたい事って何？」

麗奈は葵の向かいに座る。沙希が大急ぎで給湯室に駆け込む。同

じ匂いを感じたのか、

「あ、手伝いますよ」

と茜が沙希を追いかけた。大原はそれを見届けてから、

「次のターゲットを予測するつもりですか、水無月さん？」

葵は大原の指摘にニツコリして、

「さっすが、警察庁さんは鋭いわね。そうよ。前の事件の二人の共通点がこの事務所だから、次に狙われるのは誰なのか、推理したいの」

「なるほどね」

麗奈は顎に手を当てて頷く。葵は再び麗奈を見て、

「という事で、よろしく願います」

「はいはい」

麗奈は立ち上がると自分の机に行き、ブックエンドに挟んである書類を取り出した。

「例えば、どんな事がわかればいいのかしら？」

「外科医で腕が良くて若い人。そして、独身でできればハンサム」

葵の言葉に麗奈は呆れた。

「貴女の好みを訊いているんじゃないわよ」

「もちろんです。ハンサムは余計ですが、後は本当に必須条件ですよ。それと、パスポートを持っている事」

「は？」

これには大原もキョトンとした。麗奈は何となく葵の考えている事がわかったようだ。

「まさか貴女、もしかして……」

「多分、麗奈さんの想像している事と私の考えている事は一致していると思います。後は、意地悪姉さんの意見が聞ければ完璧ですね」「そうね」

麗奈は葵の推理の大胆さに驚愕していた。大原は呆気に取られたままだ。

「意地悪姉さんて、誰の事よ、葵？」

地獄耳が来た。葵はしまったあ、という顔をした。

「ああ、あんたまだ私の事務所の鍵のスペアを持ったままなのね！」「麗奈が立ち上がった。菖蒲はまるで篠原と美咲を付き人のように従えて入って来て、

「あら、あれは私にくれたのではないの、麗奈？」
と惚けてみせた。

「で、葵、答えなさい。意地悪姉さんというのは、誰の事？」

菖蒲は麗奈を無視して、葵に詰め寄った。

「訊くまでもないだろ。姉さんの事だよ。なあ、葵？」

篠原が嬉しそうに言った。葵は、このバカ、と彼を睨んだ。

「菖蒲さん、聞き違いですよ。私はそんな事を言ってませんから」「葵は笑顔で応じた。菖蒲はあまりその事で葵を攻めるつもりはないらしく、

「それならいいのよ」

とあっさり引き下がった。彼女も先が知りたいのだ。そして、麗奈を押しつけるようにソファに座った。

「では菖蒲さん、教えて欲しい事があります」

葵は愛想笑いをして言った。菖蒲はツンとしたままで、

「何かしら？」

「医療ミスで亡くなった患者は、通常司法解剖されますか？」

大原がギョツとした。

「そ、そこか……」

彼も葵の推理の外郭に気づいたようだ。菖蒲はフンと鼻で笑い、

「遺族からの依頼がない限り、しないわね。医療ミスで亡くなった患者の遺族はもうこれ以上患者自身を切り刻むのに同意したくないから、尚更よ」

葵はその答えに大きく頷き、

「という事は、患者の正確な死因は、闇から闇となる訳ですね？」

「端的に言ってしまうえば、そうね。執刀医が隠そうと思えば、本当の死因はわからなくなるわ」

菖蒲も葵が何を言いたいのかわかったようだ。

「葵、貴女まさか、臓器売買を疑っているの？」

そこにコーヒーを持って戻って来た茜と沙希が現れた。二人は、「臓器売買」という単語を耳にして、ギョツとした。

「ええ。後小松のジイ様がロシアンマフィアと取引するとしたら、それが一番可能性が高いと思います。遺体は解剖されない訳ですから、健康な臓器が使い放題という事になります」

菖蒲もビックリしている。そして麗奈も啞然とした。

「そして、これは可能性の問題なんだけど、大原君」

「はい」
大原は自分が指名されたので、緊張して葵を見た。茜も唾を飲んだ。

「金村医師と烏丸医師の遺体は、どうやって確認したの？」

「関係者の方に遺体を見てもらいました。それと、身体の特徴を…

…」

「つて事は、DNAとかは調べていないのね？」

葵の指摘に、美咲がビクツとする。

「所長、まさか？」

葵は美咲を見て、

「そのまさかよ。私は遺体がすり替えられていると思っているの」
篠原も菖蒲も、もちろん麗奈や茜や沙希も驚愕する葵の推理だった。

「臓器売買だけで、後小松のジイ様がロシアンマフィアを使えるとは思えない。だとすると、後は何か？ 人材の提供くらいしか考えられないでしょ？」

「しかし、無理ですよ。遺体をすり替えるなんて……」

大原が異を唱える。茜がそれに同意し、頷く。

「^{あらかじめ}予めよく似た人物を探し出して、更に整形手術とかで似させる事はできるわ。何しろ、お医者様が計画しているんですもの」

葵の説明に麗奈が口を開いた。

「考えられなくもないわね。後小松のジイ様は、腕は一流よ。それくらい造作もなくやってのけられるわ」

「という事は……？」

菖蒲が震え出した。

「金村君は、生きているかも知れないという事？」

「その可能性はあります。但し、そのために誰かが犠牲になっているのですから、あまり喜べる事ではないですけど」

葵は辛そうに言った。菖蒲もそれを理解しているのか、黙り込んだ。本当は嬉しいのだろうが。

「一流の外科医を人材派遣して、マフィアのボスを助けさせるつもりか？」

篠原が言った。葵は肩を竦めて、

「そこまでのジイ様が約束をしているかはわからない。もしかすると、単なる人材派遣かも知れないし」

麗奈が立ち上がる。

「葵の考えはわかったわ。じゃあ後は、私がターゲットを絞るだけね」

「はい、お願いします」

葵は微笑んで応じた。

第十五章 一発逆転！ 10月2日午後6時

麗奈は棚からファイルをいくつか抜き出した。

「今までの葵の推理と、私のところにあるクライアントの資料を総合的に分析してみると、この辺が怪しいわね」

彼女は葵に資料を手渡した。葵はそれを凄まじい速さで読む。どう見ても只捲っているだけにしか見えないが、彼女は全て読破しているのである。

「医療ミスを連発している若い医師。結構いるんですね」

葵はうんざりした顔で麗奈を見上げる。

「そうよ。お医者様って、イケメンも多いでしょ？ 私は興味ないけどね」

麗奈は何故かニヤリとして菖蒲^{あやめ}を見る。菖蒲はその視線に気づき、

「何？ 何なの、今のは？」

「別にイ」

菖蒲の憤激を軽くないなす麗奈。さすが手馴れている、と篠原は感心した。

「件数は絞れたわ。このくらいなら、手分けをして待ち伏せもできるわね」

葵の言葉に、茜がギョツとする。

「ええ！？ 全部見張るつもりですかア？」

「そうよ」

あつさりと肯定する葵に、茜は愕然とし、美咲を見た。美咲は葵を見て、

「あちらさんは、焦っている、という事ですね？」

「そう。早いとこ片づけて、取引を終了したいはず。早ければ今夜、遅くとも明日の夜には動くはずよ」

大原が、

「応援を要請します」

「お願いね、大原君」

葵がウインクをすると、それを茜が睨む。葵にはそんな気はさらさらないのだが、茜はこのところ被害妄想なのだ。

「さてと。もう菖蒲さんや麗奈さんは襲撃されたりしないだろうけど、ガードは続けた方がいいから、まとめて面倒見てね、護」

「えーっ？ 姉さんと麗奈さんのガードは、ハードなんだよなあ」
篠原の愚痴に菖蒲がムツと知る。

「何よ、麗奈はともかく、私のガードをするのが嫌なの、護君？」

「菖蒲、日本語がおかしいわよ。護は、貴方のガードが嫌なの。わかった？」

麗奈のチャチャが入る。篠原は苦笑いして誤魔化そうとしたが、菖蒲が応じない。

「麗奈、私の弟を呼び捨てにしないで。護君を呼び捨てにしているのは、葵だけよ」

今度は葵が苦笑いする。篠原は呆れ顔で、

「大丈夫だよ、ガードはするから。言ってみただけさ」
と火消しに動いた。

「揉め事起こさないでよ、護」

葵が小声で窘める。
たしな

「わかったよ」

篠原は肩を竦めた。

「それならいいのよ」

菖蒲はツンとして麗奈から目を逸らした。麗奈はクスツと笑い、
「取り敢えず、そんなところかしら、皆さん？」

と一同を見渡す。そして、

「では、食事に行きましょう。今日は菖蒲が奢ってくれるそうです」
「ちよつと、何言い出すのよ、麗奈！」

菖蒲は仰天して立ち上がった。篠原が、
「ゴチになります、姉さん」

と調子に乗る。菖蒲はムツとしたが、

「わかったわよ。私をご馳走するわ」

と何故か諦めた。葵はニヤツとして、

（やっぱり、金村さんが生きているかも知れないという事が嬉しいのね、菖蒲さんは）

「私、後から合流します」

美咲が言った。葵は意外そうな顔をして、

「あら、どうして？」

「警察病院に行きますので」

美咲がそう答えると、茜が口を挟む。

「ああ、やっぱり美咲さんてば！」

「ち、違うわよ！」

茜が何も言っていないのに、美咲は酷く慌てていた。

「何なのよ、美咲ったら？」

葵はキョトンとしてしまった。

皆村はベッドの中でボンヤリしていた。術後の経過は、医師も驚くほど順調で、数時間前まで生死の境を彷徨っていた人間とは思えないと言った。

（昔から、丈夫なのが取り柄だったからな）

苦笑いする。

「暇だなあ……」

美咲が帰った後、課長もすぐに帰ってしまい、その後刑事課の連中が何人か見舞いに訪れ、女性警官達もきてくれたが、皆すぐに帰ってしまう。

「美咲さん」

またつい名前を呟いてしまった。

「はい」

え？ また？ そんな、まさか。幻聴だろ？ 皆村は担当医を呼ぼうとした。

「寝てらしたのですか？」

確かに美咲がそこにいた。花束を抱えて。

「あ、いえ、起きてました」

皆村は、また独り言を聞かれてしまったと焦っていた。

「この花瓶でいいですか？」

美咲はベッドの傍らにある何も入っていない花瓶を手を取った。

課の誰かが、ナースルームかどこから借りて来たのだが、連中は揃いも揃って気が利かない奴らで、花を持って来る者がいなかったのだ。酷い奴は、鉢植えをもって来た。俺に退院するなって事かよ！？ 皆村は呆れてそいつを追い返した。

「は、はい、ありがとうございます」

「さつきは手ぶらで来てしまって、申し訳ありませんでした」

美咲はニコツとして病室を出て行った。

（美咲さんなら、来てくれるだけで嬉しい）

皆村はニヤついてしまった。

「あ、そうだ、茜」

出かける間際に葵が言い出す。

「え？ 何ですか、所長？」

思わずビクツとする茜。

「このパソコン借りて、メールをチェックして。情報屋の皆さんから、何か来ているかも知れないわ」

「はい」

茜はホッとして沙希を見る。

「こちらでどうぞ」

沙希は自分の席のパソコンを示した。

「ありがとうございます」

茜は礼を言っただけで席に着く。

（沙希ちゃんて、茜には興味ないのね。子供だから？）

そんな風に想像したので、葵は思わず笑ってしまった。

「何ニヤついてるんだよ、葵？」

篠原が小声で尋ねる。葵は、

「沙希ちゃん、女性が好きみたいだから、諦めてね」

「は？」

篠原は素っ頓狂な声を出してしまった。

「来てますよ、所長」

バカ話をしているうちに、茜が仕事をすませた。

「何かためになる事はある？」

葵は茜の後ろに立ち、モニターを覗き込む。その時沙希が葵と茜に挟まれる形になり、彼女は顔を赤らめた。

「ええ、ありますよ。所長の読み通り、ロシアンマフィアに気をつけろって書いて来てます」

「他には？」

葵はメールに夢中になり、沙希の肩を抱いているのに気づかない。沙希は卒倒しそうだ。

「後小松のジイ様の事も書かれています。医療ミスも捏ち上げの可能性があるので。但し、何れの情報屋さんも、気をつけると一言添えていますね」

茜が振り返ると、葵は沙希をギュツと抱き寄せて、

「気をつけなければならぬのは、あちらさんの方だということからさせてあげないとね」

とうとう沙希は気を失ってしまった。

「ああ、沙希ちゃん、どうしたの？」

葵が驚いて沙希を支えた。

「何よ、その子も麗奈と同類なの？」

菖蒲が呆れた調子で言い放つ。麗奈は沙希に近づいて、
「彼女は美咲ちゃんじゃなくて、葵の方が好きみたいね」

と篠原を見た。篠原は肩を竦めて、

「あーあ、俺は二重に苦しまなくちゃならないんですか？」

「そういう事ね」

麗奈は楽しそうだ。

「しつかりして、沙希ちゃん！」

葵はそんな冗談に付き合うつもりはないらしく、真剣に沙希に呼びかけていた。

美咲が花瓶に花を挿して病室に戻ると、皆村はビクツとして彼女を見た。

「どうされたんですか？」

「あ、いや、その……」

まさか、美咲が戻って来るのを心待ちにしていたとはいえない皆村は、動揺を隠せない。

「本当にごめんなさい」

美咲が花瓶を置くなり頭を下げたので、皆村はビククリした。

「な、何ですか？　自分は神無月さんに謝られる理由はありませんよ」

それでも美咲は目を潤ませて、

「皆村さんが狙撃されたのは、私達のせいです。ごめんなさい」

「そんな事、ないですよ。警察官なんて、怨まれてなんぼですから、気にしないで下さい」

例え美咲のせいで撃たれたのだとしても、それはそれで嬉しい皆村なのだ。もはや変態である。

「ありがとうございます」

美咲が潤んだ目で皆村を見つめる。油断していた彼は、それを真正面で見てしまった。

「……」

頭の中が真っ白になった。思考回路が飛んでしまったようだ。

「皆村さん？」

皆村の様子が変なので、心配になった美咲が声をかける。

「あ、ああ、すみません」

皆村は美咲の顔をまともに見ないようにして答えた。

「ありがとうございます、皆村さん。そう言ってもらえて、気持ち

が楽になりました」

「は、はい」

美咲からいい香りが漂って来る。皆村の鼓動が高鳴った。

「貴方を狙撃した犯人を捕まえました。今、警視庁で取り調べされているはずですよ」

「そ、そうですか……」

本当に狙撃犯を捕まえたのか？ 皆村は何となく落ち込んでしまった。

（やっぱり、俺は美咲さん達の足手まといなのだろうか？）

そして午後10時。やや空き始めた大通りを、不気味な車両が走る。

黒い救急車だ。サイレンは同じだが、赤色灯ではなく、灰色だ。全体的に薄気味悪い。周囲のドライバーは、その異様な車体にギョッとする。

黒い救急車は速度を増し、サイレンの音を大きくさせると、交差点を左折し、ある病院を目指した。

「来たみたいね」

病院の車寄せの陰に潜んでいる美咲が囁く。

「当たりでしたね、私達」

茜が嬉しそうに応じる。

「じゃあ、鬼退治に行きますか、美咲さん」

茜の言葉に美咲はクスツと笑い、

「はい、桃太郎さん」

「えーっ、せめてかぐや姫にして下さいよオ」

茜の意味の分からないボヤキに、美咲は呆れて、

「何よそれ？」

と思わず突っ込む。そんな二人の会話を遮るように、黒い救急車が車寄せに滑り込んで来た。

「まだよ、茜ちゃん」

「わかってますよ」

黒い救急車は、照明を落とした玄関の前で停止する。中から黒い隊員服に身を包んだ連中が三人出て来て、病院の中になだれ込む。

「今よ、茜ちゃん！」

「はい！」

忍び装束姿の二人は、その偽隊員達を追いかけて、打ち倒す。相手は素人のようで、たちまち気を失った。

「所長、黒い救急車を抑えました」

美咲が携帯で葵に連絡した。

「そっちだったのね。了解。後は大ねずみのところに行つて、一網打尽よ」

「はい」

美咲は携帯を切ると、倒した偽隊員の変装を解いた。

「あつ！」

その正体を知つて、茜は驚いた。一人は後小松総合病院事件の有力容疑者である海藤充。そしてもう一人は大日本医科大学付属病院事件の有力容疑者である八幡原栄伍やはたはら えいごだったのだ。

「なるほどね。自分が疑われない病院に、隊員に変装して乗り込む手筈だったのね」

美咲は後小松の仕掛けたトリックを見抜いた。

「そうかア、そうすれば完璧なアリバイが作れますよね」

茜がポンと手を叩く。

「そして、事件に関与させる事で裏切りや密告も封じる事ができるわ。あの院長、相当な悪わるね」

美咲は後小松の狡猾さに虫酸が走った。

二人が潜んでいたのは、純心堂医大付属病院である。そここの外科医である松尾和馬は、医療ミスを犯し、外科部長である板倉光雄に顎で使われていると評判だった。しかし、松尾医師自身は、その事実を否定し、麗奈に訴訟を依頼していたのだ。いくつかある黒い救急車出現候補の中で、最有力だった病院である。

「取り敢えず第一段階終了ね」

美咲は三人目を縛り上げて言った。茜は三人目の白人を見て、
「こいつだけ知らないんですけど」

「多分、ロシアンマフィアよ。抵抗された時のために、一人だけ加わっていたんでしょ」

それでも、美咲達にしてみれば、ものの数ではなかった。

「茜ちゃん、二人の服を脱がせて」

「えっ？ 美咲さんたら、大胆ですね。こんなところで……」

茜が巫山戯て言った。美咲は真っ赤になって、

「違うわよ！ 隊員に成り済まして、大ねずみさんのところに行くの！」

「わかってますって。美咲さんてば、本当に下ネタの冗談にはマジになりますよね」

茜が面白がる。美咲はムツとして、

「一人で行く、茜ちゃん？」

「ああ、ごめんなさい、美咲さん！ 私が悪かったですウ」

茜は慌てて詫びた。

そして、葵は別の候補の病院から離れ、後小松総合病院に向かっていた。

「どうしてこういうコンビになったのかしらね」

葵は大原と行動していた。

「さあ。僕にはわかりません」

「多分だけど、茜は貴方と美咲が組むのを嫌がったんだと思うわ。私なら安心だという事ね」

葵は不満そうに助手席のシートに身を沈める。大原は苦笑いして、
「水無月さんは僕じゃあ、そんな気にはなりませんか？」

と妙な事を言い出す。

「その気になって欲しいのなら、なってあげてもいいけど？」

葵がおどけて言い出す。大原はビクツとして、

「僕も篠原さんに殺されたくありませんから、その気にはならないで下さい」

「うまく逃げたわね」

「ハハハ」

葵はフツと笑い、またシートに身を沈めた。

「とにかく、後は大ねずみをひっ捕まえて、その後ろにいる親玉まで炙り出さないとね」

葵は前を見据えて呟いた。

第十六章 後小松謙蔵の悪あがき 10月2日午後11時

黒い隊員服を着て、黒い救急車に乗り込んだ葵、美咲、茜の三人は、敵の本丸である後小松総合病院に向かっていた。

「それにしても驚きましたよ。交換殺人だったんですね？」

助手席で茜が感心したように言う。ストレッチャーに腰掛けた葵は、

「そんなの、最初の事件でわかってたじゃないの？ 有力容疑者のアリバイが完璧過ぎて、バレバレだったわ」

「え？」

葵があっさり指摘した上、運転席の美咲も頷いているので、
「もしかして、知らなかったの私だけですか？」

茜は苦笑いして言った。

「そうみたいね」

美咲が嬉しそうに言ったので、茜は剥れた。

「何ですかあ、お二人共才。私がわかっていないのを面白がってたんですかあ？」

「違うわよ。茜ちゃんもわかってるって思ってたのよ」

美咲が言くと、葵は、

「私はあるが気づいていない事はわかってたけどねえ」

「意地悪いですね、所長ってば！ だんだん、菖蒲あやめさんに似て来ますよ！」

茜が振り返って言った。すると葵はムツとして、

「あんな人と一緒にしないですよ！ 冬のボーナス、覚悟しなさいよ！」

「えーっ、そんなあ」

茜は、葵が「最終兵器」を出して来たので、シヨンボリしてしまった。

「所長、もうすぐ敵地です」

美咲がハンドルを切りながら告げた。葵はヘルメットを被りながら、

「さてと。後小松のジイさんの欲の皮がどれくらい厚いのか、確かめに行くわよ」

「はい」

美咲と茜が息を合わせて答えた。

「ねえ」

菖蒲が言う。

「何だよ、姉さん？」

「どうしてここなの？」

菖蒲はご立腹のようだ。篠原は肩を竦めて、

「仕方ないだろ。人の出入りが激しくて、周囲が良く見渡せる場所で、長時間いても怪しまれないところなんて、そうはないんだからさ」

「そうよ、菖蒲、あんまり不平不満ばかり口にしてると、小皺が増えるわよ」

麗奈が嬉しそうに言ったので、菖蒲はムツとした。

「貴女に言われたくないわ」

三人がいるのは、二十四時間営業のコーヒーショップだ。

「オーダーお願いします」

「はい」

店員は若い女の子ばかりの店だ。篠原がこの店を選んだ最大の理由はそこにあると、長年彼を見て来ている菖蒲は思った。

「俺にはエスプレッソ、もう一杯ね。お二人は？」

「私はブラック」

菖蒲はツンとして答える。麗奈はニツコリと女の子に微笑んで、

「私は、貴女がいいわ」

「麗奈さん！」

篠原が慌てて遮る。女の子は啞然としていたが、商売上そういう

客もいるのか、すぐに立ち直った。

「冗談よ。カプチーノね」

「は、はい」

女の子はさすがに身の危険を感じたのか、復唱をすると、逃げるようにその場を離れた。

「見境がないのね、麗奈」

菖蒲が呆れ顔で言う。

「でも、今の子、可愛かったよね、護？」

「え？ ええ、そうですね」

篠原は姉の視線を気にしながら答える。菖蒲は、

「護君を呼び捨てにしないでって言ってるでしょ、麗奈」

「はいはい」

篠原は何も言わなかったが、麗奈は肩を竦めてニヤニヤしながら応じた。その時だった。

「！」

篠原がバツと麗奈に飛び掛った。

「いやん、護、こんなところで！」

麗奈はふざけていたが、篠原は真剣そのものだった。次の瞬間、麗奈の座っていた椅子の背もたれに、銃弾の痕が着いた。

「え？」

それに気づき、麗奈と菖蒲は仰天した。

（ガラスを貫く音はしなかった。って事は？）

篠原は顔を動かさず、周囲を探った。殺気を感じようとしているのだ。

（敵は店内にいる。畜生、全然気づかなかった）

「そこか！」

篠原は敵の殺気を感じ、走った。

「まさか！」

それは店員だった。可愛い女の子が銃を構えていたのだ。
「くそ！」

女性には優しいのがモットーの篠原は一瞬躊躇したが、その子の銃を奪い、右腕をねじ上げた。

「キャッ！」

その一連の動きで、店内は騒然となった。

「皆さん、騒がないで！ 防衛省情報本部の者です！ テロリストを確保しました！」

その女の子は、良く見ると日本人ではない。

「まさか、キルギス人？」

キルギスとは、中央アジアの国だ。国民の顔立ちは日本人に似ているが、よく見ると細部は違う。

「そういう事か」

篠原は、何故CIAまで動いているのか、理由がわかった。

葵達の乗る黒い救急車は、後小松総合病院の裏手にある霊安室の出入り口に回らされた。

「早かったな。邪魔はされなかったか？」

後小松自らが出迎えてくれたので、葵はニヤリとした。

「ええ、幸い、全然相手にならなくてすぐに片付いたから、早かったわ、おじいちゃん」

葵達は一斉にマスクとサングラスとヘルメットを取った。

「お、お前は！」

後小松は美咲の顔を見て驚いた。

「こいつらは敵だ！ 片づけろ」

彼の背後に控えていた十人のロシアンマフィアが進み出た。

「またお宅ら？ 弱過ぎて話にならないんですけど」

葵が挑発する。彼女達は一瞬で忍び装束になった。

「お前ら、一体何者だ！？」

後退りしながら、後小松が叫ぶ。

「少なくとも、おじいちゃんの味方ではないわね」

「その呼び方、やめさせろ！」

後小松の命令で、ロシアンマフィア達が銃やナイフを構えて戦闘を開始した。

「美咲、茜！」

「はい！」

三人はその場から飛び、ギャング達に向かう。

「この隙に……」

後小松は、すでに計画が破綻した事に気づいたらしく、逃亡した。

「あ、待て、ジジイ！」

葵がギャングの一人を蹴倒して叫ぶ。

「こらあ、待て！」

一番に抜け出した茜が後小松を追う。

「茜、逃がしたら、夏のボーナスもなしよ！」

「えええ！？」

茜はテンションが下がりがけたが、

「それだけは嫌ですウツ！」

とダツシュ。美咲は二人の言動に呆れながらも、ギャング達を次々に倒した。

「くそ」

後小松は茜が追って来るのを知り、舌打ちした。そして、廊下の突き当たりの扉の前に来た。

「この扉は、私にしか開けれん」

彼は扉のボタンでパスワードを入力し、中に入った。

「待て、このお！」

茜が到着した時、扉は完全に閉じていた。

「あ！」

茜は、ボタンをジッと見た。

「どこを押したのかわかれば、開けられるはず！」

彼女は全神経を集中し、ボタンを睨んだ。

篠原は大原に連絡し、キルギス人の殺し屋の女の子を連行しても

らった。

「それにしても、あんな若くて可愛い子がテロの実行者だなんて、
とんでもないぜ」

篠原は「若くて可愛い子」がテロリストになるのを憂えているだけなのだろうか？

「旧ソ連から独立した国は、事情が複雑ですからね。篠原さんの言っていたロシアの動きって、その辺と関係あるんじゃないですか？」

大原は腕組みして分析する。篠原は頷いて、

「多分な。周辺国の不穏な動きをしている連中に、ロシアがピリピリしているのは確かだ。そこを突こうと動いたのが、後小松と繋がっている奴らだろう」

「ええ」

篠原は大原を見て、

「俺は本部に戻って、もう一度その辺の関係を探ってみる。お前は、葵達の応援に回ってくれ」

「はい。でも、菖蒲さんと麗奈さんのガードはいいんですか？」

「二人には、葵の影をつける。大丈夫だよ。葵のマンションに連れて行ってくれ」

篠原はそれだけ言うと、店を出て行った。

「さ、行きましようか、大原君」

麗奈が嬉しそうに言う。

（この人、女性が好きなんだよな）

綺麗な女性と一緒にいると、茜がまたヤキモチを妬くのではないかと心配な大原だったが、彼女のヤキモチは、それはそれで嬉しいかったりする。

「はい」

菖蒲はすでに先を歩いていた。

（さすが、篠原さんのお姉さんだなあ。全然怖気づいていない）

大原は感心を通り越して、呆れていた。

「はあ、はあ、はあ」

こんなに走ったのは、いつ以来だ？ 後小松はそんな事を思いながら、病院内の秘密経路を走っていた。

「ロシア人共は、あの女達が皆始末してくれる。もう、あんな役立たずとは縁切りだ」

後小松にとってはビジネスが最優先。恩も義理もない。

「私だ。計画は変更する。金村と烏丸は、ロシアには送らない。二人には、もっと金を出してくれるところに行ってもらう」

後小松は携帯でそう告げた。そして、茜が追って来ていないのを知ると、

「やっと諦めたか」

と呟き、悠然と歩き始めた。ところが、天井が騒がしくなった。

「何だ？」

後小松はビクツとして立ち止まり、天井を見た。

「えい！」

というかけ声と共に天井が破られ、その破片と共に茜が落下して来た。

「うわお！」

後小松は慌ててそれをかわし、また走り出す。茜は顔に着いた蜘蛛の巣を取りながら、

「もう、あのパスワード、全然わからなかったあ！」

どうやら、パスワードが解けなかった茜は、通気孔を通ってここまで来たらしい。

「こら、待て！ あんたを逃がすと、来年の夏のボーナスも逃げちゃうんだから！」

茜はビュンと加速し、後小松の前に出た。

「ぐは！」

後小松はいきなり目の前に現れた茜に驚き、止まる事ができずに彼女にそのまま接近した。

「いやああ、変態ジジイ！」

茜は後小松が襲い掛かって来たと思い、平手打ちを食らわせた。
「ゲヘッ！」

後小松はその平手打ちをカウンターで受けたので、そのまま横に飛び、壁にぶつかって倒れた。

「え？」

茜は、変態ジジイから逃れるのに必死で、後小松が倒れたのに気づくまで、時間がかかった。

「おお」

彼女は倒れている後小松にやっと気づき、爪先で確認する。

「気を失ってるみたい」

そして嬉々として携帯を取り出し、

「所長、変態ジジイを倒しました！」
と報告した。

「捕まえたみたいよ」

葵は携帯をしまいながら言った。

「そうですか。やっぱり、ボーナスがなくなるのは困るんでしょうね」

美咲は倒したギャング達を縛り上げながら答えた。

「さてと。これで一方の親玉は捕まえたけど、もう一方の親玉が厄介ね」

「ええ」

葵は篠原から、キルギス人の殺し屋の話を聞いていた。

「CIAも動いているらしいから、相当な敵ね。後小松のジイさんが顎で使っていたのなんて、下っ端もいいところでしょ」

「そのようですね」

葵はニヤツとして、

「楽しみね、美咲」

「そうですか？ 私はそれほど楽しくありませんけど」
「そう？」

所長はどういう性格なのだろう？ 長い付き合いの美咲が、そう思ってしまった。

篠原は防衛省に戻り、パソコンで検索していた。

「あつた！ これだな」

その情報は、ロシアの周辺でロシアからの圧力を潰すために動いているテロリスト達の活動範囲の地図だった。CIAも周辺諸国への影響を危惧し、動いている。中国も軍情報部が動いているようだ。

「葵、こいつは相手がでか過ぎるぞ」

篠原は腰が引けてしまいそうだった。

「でも、あいつは引かないよなあ。売られた喧嘩は、誰が何と言おうと買う奴だからなあ」

しかし、彼はそんな葵の事が好きなのだから、どうしようもない。

「は！」

後小松謙蔵が意識を取り戻したのは、院長室だった。両手は後ろで縛られており、足首も縛られている。床に転がされたままなのは、彼にしてみれば、相当屈辱的だ。

「さあ、話してもらいましょうか、拉致したお医者さんの居所を」
葵が仁王立ちで言う。後小松はその時ハッと名案を思いついた。

「だ、誰だ、あんたらは？ ここはどこだ？ 私は誰なんだ？」
そう、記憶喪失のフリをしようと考えたのだ。

「あれれ、強く殴り過ぎましたか？」

茜が後小松の顔を覗き込む。

（このガキが！）

後小松はそう思ったが、

「あんたは誰だ？ 私はどうして縛られているんだ？」

と惚けた。茜は首を横に振って肩を竦める。

「記憶がないみたいですね。どうしましょうか？」

彼女は葵に尋ねた。すると葵はニヤリとして、

「そういう時は、もつと強く殴ると思い出すそうよ。医学書に書いてあったわ」

（そんな事書いてある医学書なんてあるか！）

後小松は心の中で叫んだ。

「何で殴ってみますか？」

美咲が言った。葵は部屋の中を見渡して、

「ああ、そのブロンズ像なんかいいんじゃない？ 美咲、殴ってあげて」

「はい」

美咲がツカツカと部屋の隅に置かれているブロンズ像に近づき、それをひよいと手に取る。

（え？ そのブロンズ像は、二十キロくらいあるんだぞ。どうしてそんなに軽く持ち上げるんだ、お前は！？）

全身から嫌な汗が出る。

「ああ、そうそう、頭砕けちゃうと困るから、手加減してね、美咲」
後小松には、葵の顔が悪魔に見えた。

「行きます」

美咲がブロンズ像を後小松の頭の上で振り上げる。

「うわあああ、嘘、嘘だ、嘘。記憶はなくなっていないから、殴らないでくれえ！」

後小松は涙を流して叫んだ。

「全く。この期に及んで、往生際が悪過ぎるのよ、院長」

葵は後小松にデコピンをして言った。

第十七章 敵地へ 10月3日午前1時

黒い救急車事件の首謀者の一人である後小松謙蔵に全てを喋らせた葵達は、彼の命が狙われると判断し、後小松の身柄を葵のマンションに移送した。

「やあ、茜ちゃん。大活躍だったみたいだね」

先に到着していた大原が、マンションの部屋の前で出迎えた。

「えへへ」

茜は照れ臭そうに笑った。葵が、

「二人は？」

「中です。葵さんの影さん達がついてますよ」

大原の答えに葵は、

「フーン」

と彼と茜を見比べる。

「な、何ですか、所長？」

茜が顔を赤らめて口を尖らせる。葵はニヤツとして、

「別にイ。大原君、ありがとね」

と言い、ウィンクをした。途端にムツとする茜。苦笑いする大原。

呆れる美咲。

「とにかく、このジイ様を守るのは癪に障るけど、いろいろ知ってるから狙われると思うの」

うるさいので眠らされてしまった後小松は、台車でここまで運ばれていた。

「そうですね。相手が相手ですから、きっちり話をつけないと、いつまでも狙われるでしょうね」

大原は後小松を哀れむように見た。

「こいつ、私に襲いかかって来たんですよ、大原さん。取調べで苛めて下さい」

茜が直訴する。大原は微笑んで、

「そうなの。よし、厳しく取り調べるよ」

「お願いします！」

茜は嬉しそうだ。葵が、

「大原君が取調べをする訳ないでしょ、どこまでおバカなの、あんなは？」

と茜を窘める。たしな茜はそれでも、

「そんな事、わかってますよお。でも、私がお願いすれば、大原さんは願いを叶えてくれますよね？」

大原は微笑んだままで、

「もちろんだよ」

葵は、このバカップルが、と心の中で思って、美咲を見た。美咲は肩を竦めてみせた。

「護はもう及び腰なんだけど、私はとことん行くから、頼むわよ、二人共」

「はい」

美咲が答える。茜は、

「当ったり前です！　こんなエロジジイの仲間なんて、のさばらせてはいけません！」

完全に個人的感情で動こうとしている茜を見て、葵は溜息を吐いた。

（私も、今回の敵は許せない）

美咲は、茜ほどではないが、犯行グループに怒りを感じていた。

（皆村さんのためにも、絶対に一網打尽にする）

彼女の決意は固かった。そんな思いを皆村が知れば、悶絶死してしまうだろう。

葵に及び腰呼ばわりされた篠原は防衛省を出て、港に向かっていった。

（優秀な外科医の密輸か。とんでもない事を企むジイさんだ）

黒い救急車に拉致された金村医師と烏丸医師が、港の倉庫に監禁

されているのを後小松から聞き出した葵が、篠原に頼んだのだ。

「何で俺が……」

と言いかけ、そもそのきっかけが自分の姉の菖蒲あやめにある事を思い出した彼は、葵に反論するのを諦め、素直に現場に向かった。

「葵のお礼のチューでも当てにして、頑張るかな」

自嘲気味な篠原である。

「おっと」

ヘッドライトを消し、車を停める。見張りの姿が目に入ったのだ。
(銃を持つてるな。ま、関係ないか)

篠原は忍び装束に着替え、闇の中を走る。いきなり眩しい光が彼を照らし出した。

「何!？」

篠原は度肝を抜かれた。彼は完全に待ち伏せされていたのを悟ったのだ。

「たった一人で来るとは、どうしようもなくバカな奴が、本当の勇者のどちらかな」

どこかで聞いた事がある声。微かに記憶の琴線に触れる、微妙に訛りのある言葉だ。

「誰だ!？」

篠原は眩しさに耐えながら怒鳴った。

「私を忘れたのかね、忍者君」

一人の男が、光の中に姿を現す。しかし、その容貌は、強烈な逆光のために識別できない。

「悪いが、俺は男の事を記憶するなんていう野暮な真似はしないんだよ」

「相変わらず、減らず口を叩くな。そうか、忘れてしまったのか」
「だから誰なんだよ、てめえは!？」

焦れっただくなって叫ぶ。するとその男はゆっくりと前に進み出た。
「私の名は、エクセル・ピクノ・ルミナ。イスバハン王国の国王である」

「何イツ!？」

篠原の記憶が甦る。三ヶ月前、この手でぶちのめし、強制送還した腐れジジイだと。

「貴様、性懲りもなく抜け抜けと……」

「私は密入国したのを見つかり、本国に送り返されただけだよ。残念だったね、忍者君」

エクセルはその狡猾な笑みを篠原に見せた。篠原は周囲の敵の動きに警戒しながら、

「もうイスバハンは王国じゃないぞ。貴様は只の老いばれだよ」

「違うな。確かに私は国王ではなくなったが、もう一つの顔であるスイスのメガバンクの頭取の肩書きはそのままだよ」

エクセルの言葉に、篠原は齒軋りした。

「くそ……」

日本政府そのものが加担したその事件は、有耶無耶のまま闇から闇へと葬り去られた。それは葵がイスバハンの王女ファラを気遣い、意図的にそうさせたのだ。

（葵の思いを逆手に取りやがって、このクソジジイめ!）

篠原の全身に怒りの炎が渦巻く。

「こんな形で君達に復讐できるとは、本当に幸運だ。君の仲間も全員、後から君のところへ送って差し上げよう、忍者君」

エクセルは勝ち誇って言い放つ。篠原の怒りは頂点に達した。

「ふざけるなアッ!」

彼はまさに目にも留まらぬ速さで動き、銃弾を掻い潜ってエクセルに接近した。

「おっと」

エクセルは後ろに飛び退いた。

「君の相手は、私ではなく、この者達がするよ」

その声と同時に現れたのは、二メートルを超す巨体の二人だった。

「やめとけ。怪我するだけだぞ」

「そうかな？」

エクセルの挑発めいた言葉の次に、その巨人の攻撃が始まった。
「ぬお！」

見た目より遥かに速い身のこなしで、二人は篠原に押しかわかって来た。

「何だよ、案外やるじゃないか」

篠原はニヤリとしてその攻撃をかわす。

「でも悲しいかな、俺はお前らよりずっと強いぜ」

その言葉が理解できたのか、巨人二人は怒りの雄叫びを上げて、篠原に突進した。

「はい、おしまい」

篠原は二人をかわしながら、それぞれの首に手刀を叩き込んだ。

「グヘ……」

巨人二体は呆気なく倒れた。

「む？」

その隙にエクセルは車で逃亡していた。

「くそ！」

倉庫の中はもぬけの殻で、金村医師と烏丸医師の二人の姿もなかった。

「やられた……」

エクセルの挑発に乗ってしまった事を悔やむが、今更そんな事を考えてみても仕方がない。

「葵にどやされるなあ……」

篠原は溜息を吐いた。

葵は、篠原からの連絡で、エクセルが絡んでいる事を知り、ギョツとした。

「あのジイさん、まだ懲りてなかったのか」

「スイスの方も、潰しておくべきでしたね」

美咲も悔しそうだ。

「それにしても、護はドジツたわね。後でお仕置きしなくちゃ」

葵がそう言うと、

「どんなお仕置きするの？」

麗奈が嬉しそうに口を挟む。

「護は、葵から『お預け』っていう一番辛いお仕置きをされてるから、大丈夫でしょ？」

菖蒲の痛烈な皮肉に、葵は苦笑いした。

「行くわよ、美咲、茜」

「はい！」

三人は忍び装束のままで部屋を出て行った。

「ねえ、エクセルって誰？」

菖蒲が取り残された大原を見る。

「え？」

いつの間にか、彼は菖蒲と麗奈に詰め寄られていた。

「教えて、大原君」

麗奈が妙に色っぽい声で言う。

「ハハハ……」

早く帰りたい。大原は心の底からそう思った。

「陛下、ゴコマツの口を封じた方が良いのではないですか？」

エクセルの側近で、彼と共にイスバハンを脱出した男が言う。

「そんな事はもう手遅れだ。一刻も早く、日本を出る。それが一番なのだ」

エクセルは後部座席で眠っている金村医師と烏丸医師を見て、

「我らには、商品があるのだからな」

と呟いた。

「見通しが甘かったわ。エクセル元国王がイスバハンを出て暗躍しているなんて、全然情報がなかった」

葵は美咲の運転する車の助手席でばやいた。美咲は、

「仕方ないですよ。あの人も裏社会のプロです。しかも、テロ国家

を担って来ていたのですから、その筋のルートもあるでしょうし、まだ協力してくれる組織も多いでしょう」

「それで、ロシアンマフィアとうまい事やってる後小松に目をつけて、甘い汁を吸っていたら、私達が絡んで来たのでついでにリベンジっていうのが、一番ムカつくのよ」

葵は、自分達が「ついで」だった事に腹を立てているらしい。

「どっちにしても、みんなぶっ飛ばしちゃいましょう。それが一番です」

茜が後部座席から嬉しそうに口を挟む。葵は茜を見て、

「あら、珍しく意見が合うわね、茜」

「そりゃ、私は所長を尊敬してますから」

茜は満面に笑みを浮かべて言う。葵は呆れ顔で、
「嘘臭うそくさ」

「えええ！？ どうしてですかあ？ ホントですよ、所長」

茜は妙に慌てている。葵はニヤリとして、

「ボーナスが復活しなくなってるで思ってるでしょ？」

図星を突かれ、ギクツとする茜。葵は笑って、

「心配しなくても、冬も夏もボーナス出すわよ」

「わーい！ 所長、一生ついて行きます」

茜の露骨なお追従ついでに葵は苦笑いして、

「一生はついて来ないでね」

と応じた。

篠原は気絶させた大男の一人を締め上げ、エクセル達がどこに向かったのか聞き出した。

「新潟だと？ 船でラジオストックにでも逃げるつもりか？」

彼は大原に大男二人の件を連絡し、エクセルを追った。

「あのジジイ、里の掟がなければ、粉微塵にしてやりたいくらいだ！」

篠原は怒りに任せて怒鳴り散らしながらワンボックスカーを走ら

せた。「里の掟」とは、最強の忍びである彼ら月一族の憲法のようなもので、その中の一つに「殺すべからず」がある。どんな敵も命を取ってはいけないというものだ。

葵達も、篠原からの連絡で新潟へと進路を変更していた。

「ロシアに行かれてしまったら、話がややこしくなるから、何としても日本でケリをつけるわよ」

葵は前を見据えたままと言った。

「はい、所長」

美咲と茜が答える。

「それから、CIAや他の国の妙な連中に私達の獲物を取られるのも癪に障るから、誤情報をばらまいといて、茜」

「はい！」

茜は嬉しそうにミニパソコンを操作し始めたが、美咲は呆れて、

「所長、そこまでしなくても……」

「私だってやりたくないけど、あの人がうるさいでしょ？」

葵はムスツとして言った。美咲も「あの人」の性格を思い出し、

「そうですね」

と納得してしまった。

その当の「あの人」、皐月菖蒲さつき あやめは、疲れたのか、眠っていた。

「大人しくしてれば、美人なのにねえ」

そんな寝顔を松木麗奈が微笑んで見ている。彼女も妙な趣味を前面に押し出さなければ、知的美人であろう。

「麗奈さんも休んで下さい。我らが一族の誇りにかけてお守り致します」

葵の影達が麗奈に言った。麗奈はニコツとして、

「そうするわ」

と言ってから、影の一人の女性を見て、

「一緒に寝ない？」

「え？」

その影はギクツとした。麗奈はニヤツとして、

「冗談よ。お休みなさい」

と言うと、ソファに横になり、毛布を被った。影達は顔を見合わせ、溜息を吐いた。

大原は、茜からのメールで、エクセル達が新潟に向かっている事を知った。

「緊急配備をしますか？」

大原は何故かその質問を葵にしていた。

「私は貴方の上司じゃないわよ、大原君」

携帯の向こうで、葵の笑い声が聞こえた。

「いえ、でもその……」

勝手に配備したら、後で怒られそうだしとは言えない。

「緊急配備はいらないわ。連中、何かネットワークがあるみたいで、警察の情報が漏れてる恐れもあるし」

「ええ？ そうなんですか？」

それは葵のハツタリだ。警察組織を動かさないための作戦である。

「とにかく、気を遣ってくれてありがとう。今度奢らせてね」

「はあ」

水無月さんは茜ちゃんがいるのでわざとそんな事を言ったのかな、などと邪推してしまう。

大原の推理は、邪推ではなかった。葵の話を聞いていた茜が剥れる。

「奢らせてって、どういう事ですか、所長？」

「うるさいなあ、あんたは。奢るのはあんたの役目でしょ、茜」

葵のその返しに、茜はドキツとした。

「え、それって、私が大原さんに抱かれろっていう意味ですか？」

美咲は危うくガードレールに車をぶつけてしまいそうになり、葵

は呆れ返って何も言わない。

「茜ちゃん、あまりビックリする事言わないでよ」

美咲はルームミラー越しに茜を睨んだ。

「自分の願望をいちいち口にしないの、茜」

葵は前を向いたままで言った。茜はその言葉に赤くなり、

「が、願望じゃないですよ!」

と慌てて否定する。

「うるさいから、寝てなさい!」

「はい」

葵が本当に怒り出したので、茜は大人しくした。

第十八章 リベンジ合戦 10月3日午前6時

葵達の乗る通称「茜号」は、関越自動車道を一路新潟へと走っていた。

「所長、連中はNシステム（顔認識システム）を警戒して、脇道を走っているはずです。高速で行くのって、間違ってますか？」

茜が意見した。すると葵の代わりに美咲が、

「そうじゃないのよ、茜ちゃん。あの人達の行く先がわかっているから、先回りするの」

「え？ 行く先がわかっているんですか？」

茜はキョトンとした。葵は欠伸をしながら、

「護が突き止めてくれたのよ。木偶の坊が二人、泣きながら教えてくれたようよ」

「は？ デクノボウですか？」

茜はますますチンプンカンプンだ。

「連中、まさか私達が先に着いているなんて夢にも思わないでしょうから、楽しみよ」

葵は嬉しそうだ。茜はウンザリ顔で、

「そうですか」

とだけ言い、シートにもたれた。

一方、逃げるエクセル達は、一般道、それも国道の旧道を乗り継ぎながら、新潟を目指していた。

「追尾して来る車はいないな？」

エクセルは部下に尋ねた。

「はい。どの車も、ついて来ていません」

「念のためだ、その道を右折しろ」

「はい」

車は右折したが、後続車は直進して行った。

「よし」

エクセルはニヤリとした。

「この私に泥水を舐めさせた事、たつぷりと後悔させてやるぞ、忍者共め」

彼のところには、篠原に締め上げられた大男から連絡が入り、行き先を告げた事を知っていた。

「罨とも知らずに、さぞ、急いでおるだろうな、愚か者達が」

エクセルは高笑いをした。

美咲が速度を気にしながら、葵に尋ねる。

「所長、罨の臭いがするのですか？」

「ああ。それはわかってる。でもね、罨とは知らずに近づくのと、知ってて近づくのでは、全然違うわよ」

葵は後部座席を見て、

「で、茜、首尾はどう？」

茜はミニパソコンから顔を上げて、

「バッチリです、所長。情報屋さんから、どこのおバカさん達が連中に手を貸しているのか、全部教えてもらいました」

「名前を教えて。お歳暮を贈るって連絡するから」

葵がニヤツと言うと、美咲と茜はビクツとした。

「所長、あまりやり過ぎない方が……」

美咲は前を向いたまま話す。葵は助手席にふんぞり返って、

「心配しなくても、程々にしとくわよ。地元の警察にちよつと密告のメールを送るだけだから」

「……」

葵の陰險な作戦に、美咲と茜はルームミラー越しに顔を見合わせてしまった。

「それにしても、あの元国王、何を血迷ってリベンジ仕掛けてきたんだか。死ぬほど後悔してもらおうわ」

葵は嬉しそうだ。茜は思った。間違ってもこの人だけでは敵対し

てはいけないと。

「はい」

「ご機嫌な葵は、篠原からの電話にも愛想良く出た。

「どうした、具合でも悪いのか？」

「何でよ！？」

葵は途端に機嫌が悪くなる。篠原さん、もうちょっと所長の扱い方、勉強して欲しい。美咲は溜息を吐いてそう思った。

「いや、お前のご機嫌な声を聞いたのは、あの夜以来だからさ」

「あの夜って、どの夜よ！」

ますます機嫌が悪くなる。篠原は笑って、

「まあ、冗談はともかく、エクセルの奴、Nシステムに全く引つかかっていないらしい。どこに向かっているのか、探り直した方が良さそうだぞ」

「そんな事はあるに言われなくても承知してるわよ。あいつらがどこに向かっていると、私達は絶対に逃がさないわ」

「ほオ。珍しく、気合入ってるな？」

また余計な事を……。茜も篠原の「所長操縦法」は零点だと思った。しかし篠原も、茜にはあれこれ言われたくないだろう。

「珍しくって何よ！？ 私達が誰のせいで不眠不休で働いてると思ってるの！？」

遂に葵は怒り出した。篠原は、姉である菖蒲あやめの事を持ち出されると、一言もない。

「悪かったよ。その事に関しては、本当に申し訳ないと思ってる」

「わかればよろしい」

葵はニコツとした。

「今回の報酬は、護が払ってくれるんだしね」

「え？」

篠原が黙り込む。

「電話で寝たふりしても伝わらないわよ、護」

葵は軽蔑の眼差しで言った。篠原はまた笑って、

「わかったよ。分割でいいか？ でないと、さすがの俺も身体が保たないからさ」

「何で払うつもり！？ 切るわよ！」

葵は憎しみを込めて携帯を切った。

「全く、あのエロ男爵が！」

葵は携帯を忍び装束の袂にしまうと、シートにもたれかかった。

そして、その篠原は、葵とは違う経路で新潟を目指していた。彼は関越道から上信越道に入り、直江津を目指していた。

（葵達は新潟市に向かっている。あの木偶の坊達の情報がフェイクだとしたら、本命はこっちかもな）

篠原は、葵達を出し抜くつもりはないが、エクセルには腹の底から怒りがこみ上げているのだ。

（あのジジイは、葵の思いも、そしてあの可憐な姫さんの思いも踏み躪りやがった。男として、絶対に許せない）

可憐な姫さんとは、アフリカの小国イスバハンの王女ファラの事だ。葵より、ファラの事でエクセルに対して怒りを感じているところ、エロ男爵の面目躍如である。

「でもあの子、女が好きなんだっけ」

テンションがいきなり下がる。

「麗奈さんとこの沙希ちゃんと言い、姫さんと言い、どうして可愛い子とは縁がないんだろう？」

篠原は溜息を吐く。

「コーヒーショップの店員は、テロリストだったしなあ」

葵に知られれば、半殺しにされそうである。恋人ではないと言いなから、篠原が他の女の子に色目を使うのを許さないのは、本当は彼の事を好きな証拠だろう。

「もうすぐ夜明けか」

篠原は時計を見て呟いた。

エクセル達は、自分達が罾を仕掛けたつもりだったが、新潟にいる部下達の報告で、行き場を失いかけていた。

「新潟港付近には、CIAが来ているようです。柏崎には、ロシアの軍情報部が。そして、寺泊には日本の警察が到着したそうです」「ぬうう」

エクセルは齒軋りした。これは、茜が仕掛けた偽情報の結果だ。それぞれに違う情報を送り、新潟のあらゆる港を封じる作戦である。「ならば、ナオエツだ。作戦変更を同志に連絡しろ」

「は！」

エクセルはムスツとしてシートに身を沈めた。

「忍者共め、ふざけた事を……」

直江津は篠原が向かっているところだ。

葵の携帯には、お詫びメールがたくさん入っていた。

「葵様のところとは知らず、大変申し訳ありません。多額の報酬に釣られたのが口惜しいです」

葵は愉快そうにメールを読み上げる。

「所長つてば、サディストですよね、やっぱり」

茜が呆れ顔で呟く。葵はニヤリとして、

「そうよ。私はサディスト。だから、如月茜さんの冬のボーナスは、神無月美咲さんに贈呈します」

「えええ！？」

茜がパニックになりかける。

「じよ、冗談ですよ、所長？」

もう泣きそうな顔である。彼女は美咲を見て、

「美咲さんも何か言って下さいよオ」

「ありがとうございます、所長」

「えええ！？」

美咲まで悪乗りである。茜は本当に泣きそうだった。

「見て、海が綺麗よ」

いきなり葵が話を逸らせる。朝日で輝く日本海が、関越道から見えた。

「そんな心境じゃありません……」

茜はシヨンボリして言った。

その頃、大原達は、もう一人の実行犯である純心堂医大付属病院の外科部長である板倉光雄を成田空港のロビーで確保していた。

「何ですか、一体？」

全く事情を理解していない板倉は、抵抗した。

「貴方が、後小松総合病院と大日本医科大付属病院の事件の実行犯の一人だという事は、共犯者の証言でわかっています。抵抗はやめなさい」

大原が逮捕状を突きつけて言った。すると、板倉はガックリと膝を着き、頂垂れてしまった。

「人の命を救う立場の医師が、殺人の片棒を担ぐなんて、許される事ではないぞ」

いつになく大原は強い調子で言い放った。板倉は泣き出してしまった。自分のした事によやく気がついたのだろう。

「刑務所で、よく考えるんだな。自分がしてしまった事について」

大原は機動隊に連行される板倉に言った。

「皆村さんのところに行くか」

彼はフツと笑い、ロビーを後にした。

皆村は、妙に気が高ぶって、すでに目を覚ましていた。

（美咲さん、大丈夫だろうか？）

美咲の強さを自分の目で直接見ていない皆村は、彼女の事が本当に心配だった。

（こんなところで寝てる場合じゃないんだけどな）

夕べ、病室を抜け出そうとして見つかり、今はベッドの両脇を警官二人に固められている。

（美咲さん）

皆村は、彼女の無事を祈った。

「全く！ どこまでおバカなのよ、あんたは！」

葵はカンカンだ。茜は消え入りそうな声で、

「申し訳ありません」

葵が怒っているのは、エクセル達を誘導する罠を、茜が張り間違えた事だ。

「よりによつて、一番遠い直江津に向かわせちゃうなんて！」

「ごめんなさい！」

茜は後部座席で土下座していた。

「まあ、いいわ。直江津には護が向かつてるらしいから。報酬を値引きする代わりに、あいつに頑張ってもらいましょ」

「ありがとうございます、所長！」

茜は涙を拭って言った。そして、

「美咲さん、運転代わります」

「ありがとうございます」

「茜号」はサービスエリアに入った。

「一息つきたいけど、連中が迫っているみたいだから、トイレ休憩のみよ」

葵の引率の先生のような言葉を受け、茜と美咲はトイレに走った。

「あれ？ 所長は大丈夫なんですか？」

茜が振り返る。

「美人はトイレには行かないの」

葵の答えに茜は脱力してから、走り出した。

「おお、撮影？」

二人の忍び装束に気づいた周囲の利用者達が集まり始めた。

「ハハハ、再来週の火曜日に放映予定でーす」

茜は苦笑いしながら走り去った。

「どこのテレビですか？」

若い男が興味津々で尋ねる。

「CNNでーす」

茜は前を向いたままで手を振って言った。

「はあ？」

若い男はキョトンとして連れの女性と顔を見合わせた。

篠原は、海上保安庁に連絡し、直江津近辺を警戒するように要請した。

（連中、恐らく自分達の用意した船で近くまで来ているはずだ。乗り込まれちまったら、アウトだからな）

彼のワンボックスカーは、すでに海岸線に着いていた。

「おいおい」

篠原は葵からメールを確認して驚いた。

「全部俺にやらせるつもりか、あいつ……」

これも全部、あの我が儘な姉のせいだ。篠原は菖蒲と本当に縁を切ろうかと思った。

「あれ、所長がいませんね」

葵の分の缶コーヒーを買って来た茜が辺りを見渡す。

「トイレかしら？」

美咲が振り返って言った。茜はニヤツとして、

「きつと、大きい方なので、私達と一緒に行くのが嫌だったんですよ」

「誰が大きい方ですって？」

「わひゃー！」

いきなり後ろに現れた葵に、茜は飛び上がって驚いた。美咲がかさず、

「はい、所長、コーヒーです」

と緊張感を和らげてくれた。葵は美咲を見てニコツとし、
「ありがとう」

茜をギンと睨んでから、葵は助手席に乗り込む。茜は全身から嫌な汗を掻きながら、運転席に乗った。

（殺されはしないだろうけど……）

葵が菅蒲に負けないくらい、自分の悪口に対しては「地獄耳」なのを改めて感じた茜だった。

第十九章 黒幕一網打尽 10月3日午前9時

葵達は、そのまま新潟港に向かっていた。

「一応、こっちのパーティにも出席しておかないとね。私達は主賓でしょうから」

葵は楽しそうだ。茜も、

「よオし、頑張るぞ！」

「偉いわ、茜。そのボランティア精神は、尊敬しちゃう」
「え？」

葵に気になる一言を言われ、茜は一瞬固まりかけた。

「ボ、ボランティア精神で、どういう意味ですか、所長？」

また泣きそうな茜である。葵はニヤツとして何も言わない。

「あああ、許して下さいよお、所長オ……」

「^{わたし}人の事を陰でいろいろと言ってくれてるようだから、一生懸命働いてもらわないとね」

葵はチラッと茜を見た。茜は、

「死ぬ気で頑張りますからア」

「よし、許す」

葵は嬉しそうに茜を見た。

「ありがとうございます！」

茜は「茜号」のスピードを上げた。

「あ」

後ろから迫る高速機動隊のサイレン。

「バカ」

葵の冷たい一言。美咲が頂垂れる。

「茜ちゃん……」

顔色が悪くなる茜。

「前方の白いミニバン、路肩に寄せてゆっくりと停止しなさい」
茜は溜息を吐き、「茜号」を路肩に寄せ、止めようとしたが、

「茜ちゃん、止めちゃダメ！」

と後部座席の美咲が叫ぶ。

「どうしたんですか？」

「罨よ！」

助手席の葵も叫ぶ。ルームミラーで見ると、高速機動隊のはずなのに、黒い覆面を着けている。

「ロシアンマフィア!？」

茜は仰天し、アクセルを踏み込んだ。途端にロシアンマフィアが銃撃を始める。

「一般人を巻き込んでしまっわ！ 茜、振り切って！」

「はい！」

茜はダッシュボードの端にあるレバーを引いた。すると「茜号」のマフラーの隣にジェットエンジンが現れた。

「スーパーチャージャー、オン！」

茜のかけ声と同時にジェットエンジンが噴射し、あっという間に「茜号」は偽高速機動隊を振り切ってしまった。

「な、何だ、あれ？」

ロシアンマフィア達は、啞然としていた。

篠原は、葵からのメールで、ロシアンマフィアが仕掛けて来た事を知らされた。

「連中、とうとう大っぴらに始めたか」

ふと気づくと、彼のワンボックスカーの周辺にも、黒塗りのワゴン車がたくさん集まり始めていた。

「うほ、楽しそうな雰囲気」

篠原は車から飛び出した。それに応じるように、ワゴン車からたくさんのギャング達が飛び出して来た。皆、マシンガンを携帯している。

「飛び道具を使うのは、弱い証拠だぜ、ギャングさん」

篠原はフツと笑い、走り出した。

エクセル達は、国道十八号線を走っていた。

「女忍者には、逃げられたようです」

「かまわんさ。どの道、連中は私達には追いつけない」

エクセルはニヤリとした。

「それより、ナオエツにいるのは、この前この私を殴った男らしいな」

「はい」

エクセルはキツとして、

「同志に伝えよ。殺すなど。そいつは、この私が直々に止めを刺すとな」

「はー!」

エクセルは、葵達より、篠原に大きな恨みがあつた。凄まじい執念である。

大原は、皆村を見舞っていた。

「そうか、事件は解決だな」

皆村は、実行犯を全員逮捕した事を聞き、ホツとしていた。しかし、大原は真剣な表情で、

「いえ、まだです。実行犯は、とかげ蜥蜴の尻尾しっぽですよ。まだ本体は、新潟にいます」

「そうなのか」

皆村はまた美咲が心配になった。

「大丈夫かな、美咲さん？」

「大丈夫ですよ。あの人達は、僕らよりずっと強いですから」

大原は微笑んで言った。彼は皆村を安心させようと思って言ったのだが、皆村は落ち込んでしまった。

「そうか。やっぱりな……」

皆村がションボリしてしまったので、大原は驚いた。

「どうしたんですか、皆村さん？」

「俺より強い女性……。諦めるしかないよな」

皆村が何に落ち込んでいるのか理解した大原は、
「何言っているんですか、皆村さん！ 僕だって、茜ちゃんの方が
多分強いですけど、諦めていませんよ」

と励ます。しかし、皆村はネガティブ思考だ。

「それはお前がイケメンだからだよ。俺はこの面だから、無理だ……」

「皆村さん！」

大原は皆村を叱りつけるように言った。皆村はギョツとして大原を見上げた。

「神無月さんは、男を外見で判断するような女性ではないと思います」

「……」

フォローしてくれているんだろうが、何気にそれ、傷つく言い方だぞ、大原。そう思ったが、言えない皆村だった。

「わー！」

菖蒲はふと目を覚ますと、自分のすぐ横で気持ち良さそうに眠っている麗奈に気づいて仰天していた。彼女はうたた寝していて、そのままソファで寝てしまったのだ。そして、一度は別のソファに横になったのだが、また起き出して菖蒲の寝顔を見ていた麗奈も、そのまま寝入ってしまったらしい。

「う、うーん……。あら、おはよ、菖蒲」

麗奈はニツコリして言った。菖蒲は起き上がった、

「あ、貴女、私が寝ている間に何かしていないでしょうね!？」
ととんでもない事を言った。すると麗奈は、

「あらあ、私にも選ぶ権利ってものがあるのよ、菖蒲」

「フン！」

菖蒲は立ち上がると、
「シャワー浴びて来る」

「一緒に浴びる？」

麗奈がおどけて言うのと、

「冗談じゃないわ！」

菖蒲はプンプンしながら、リビングルームを出て行ってしまった。

「ホント、起きると可愛くないわね、あいつは」

麗奈は肩を竦めた。

「何だ、もうおしまい？」

総勢三十人はいたはずのギャングだったが、やはり篠原の敵ではなかった。

「あの木偶の坊達の方が、ずっと強かったぞ」

ピクリとも動かないギャング達を見渡して、篠原は満足そうに頷いた。

「俺って、強いなあ」

ポーズを決めてみる。ちょっとバカである。

「うん？」

その時、強大な殺気が近づいている事に気づく。

「もう来たか、あのジジイ」

篠原は舌打ちし、エクセルの乗る車を見た。

「ほお。さすがだな、篠原護。隙を突かれたとは言え、先日この私を倒しただけの事はある」

エクセルが車から降りた。

「強がり言うなよ、ジイさん。ガチで戦っても、あんたなんか俺の敵じゃねえよ」

篠原はニヤリとして言い返した。エクセルはキツとして、
「黙れ。それでも、お前はそんな虚勢を張れるのか？」

後部座席から、エクセルの部下によって金村医師が引きずり出された。眠ったままの彼は喉にナイフを押し当てられている。

「あー、きつたねえ。そういう事するんだ、ジイさん」

篠原はさも困ったように言う。エクセルはフツと笑い、

「この男は、お前の姉である皐月菖蒲の思い人だという事はわかっている」

「そうみたいね」

篠原はニヤリとする。エクセルもニツと笑って、

「姉の思い人を傷つけられなくなかったら、大人しくしろ」

「やだね」

「何!？」

エクセルは意外な返答に仰天した。

「き、貴様、脅しだと思っっているな? 違っぞ。逆らえば、本当にこいつの命はないぞ」

「別にかまわねえよ。やれよ」

篠原の目が鋭くなる。エクセルは思わず一步退いてしまった。

「できもしねえ事を言っくんじゃねえよ、三流ヤロウが」

篠原の挑発は続く。エクセルは逆上した。

「愚弄しおって! やってしまえ!」

しかし、無反応。エクセルはムツとして、

「何をしている、やってしまえ……」

と振り返り、固まった。

「残念でした、お爺ちゃん。ゲームオーバーよ」

そこには葵達が立っていた。もちろん、エクセルの部下達は全員倒れている。

「……」

エクセルは、そのまま干物になりそうなくらい、全身から汗を流していた。

「おしまい」

篠原の手刀を首に叩き込まれ、元国王は地面に倒れ伏した。

「護、菖蒲さんに電話してあげなさいよ。金村さんは無事救出しましたって」

「ああ」

何故かそう言いながら、篠原は目を瞑って口を突き出している。

「何？」

鬱陶しそうに葵が尋ねる。

「お礼のチュー」

美咲と茜は呆れて顔を見合わせた。多分、殴られる。それが二人の予想だった。

「え？」

篠原自身、意外だったようだ。葵は本当に「チュー」をしたのだ。

「ありがと、護。助かったわ」

葵は照れ臭そうにそう言うと、

「茜、大原君に連絡して」

「はい！」

嬉しそうに携帯を取り出す茜。

「大丈夫ですか、篠原さん？」

動かなくなった篠原を美咲が気遣った。

菖蒲はシャワーから出て来たところで、篠原からの連絡を受けた。

「そう。わかったわ」

彼女は素っ気ない態度で、金村医師救出の話を聞き、携帯を切った。

「どうしたの？」

麗奈は菖蒲の異変に気づき、尋ねた。菖蒲は泣いていたのだ。

「金村君、無事だった」

彼女はそれだけ言うと、大声で泣き出してしまった。

「おお、よしよし」

麗奈も目を潤ませて、菖蒲の頭を撫でた。

「良かったね、菖蒲」

それでも泣き続ける菖蒲だった。

（ホント、面倒臭い女……）

麗奈はうんざり顔で思った。

結局、沖でエクセル達を待っていた船は、そのまま日本の領海を離れ、逃げてしまった。海上保安庁としても、何をした訳でもない船を追う事はできず、ロシアンマフィアの親玉は逃げ切ってしまうたようだ。

「でも、もう日本に手出しはしないでしょ。こっちの根は断てたんだから」

連行されて行くギャング達を見ながら、葵が言った。美咲が、

「そうですね。後はロシア側の問題ですからね」

何故かシユンとしてゐる篠原に気づいた茜が、

「どうしたんですか、篠原さん？」

「コーヒーショップの店員のテロリストの子、ロシアに引き渡すそうだ。可哀相にな」

「え？」

茜はキョトンとした。葵が、

「多分ロシアに引き渡されれば、極刑ね」

「え？」

茜はギクツとした。

「たまたま、生まれ育った土地がそういう状況だと、子供達の意志なんか関係ないんだよな」

篠原はしんみりと言った。茜も悲しくなった。

「嫌も応もなく、テロリストにされる。悲惨過ぎるよ」

「そうですね」

美咲も涙ぐんでいる。

「良かったな、茜ちゃん、日本に生まれてさ。いくら葵が怖くても、殺される事はないだろ？」

篠原がニヤリとして言った。茜はビクツとして、

「へ、返事に困る事、訊かないで下さい、篠原さん」

「どういう意味よ、それ？」

葵が茜に突っ込む。

「所長、一生ついて行きますから！」

茜はいきなり葵に抱きついた。葵は面食らって、

「ちよつと、茜、あんたまで目覚めたんじゃないでしょうね？」
と慌てた。そして茜を振り払う。

「さてと。もう一人、お礼に行かないとね」

葵が車に歩き出す。

「もう一人？ ああ、岩戸のジイさんか？」

篠原が言った。葵は振り返らずに、

「そういうお礼じゃない方」

と答えた。

エピソード それぞれ、大団円 10月3日午後5時

大原の手配で、本物の高速機動隊が動き、偽高機はすぐに捕まった。銃を所持していたので、手こずると思われたが、さすがに自分達の名を騙って悪さをしようとしていた連中に憤激したのか、高機は装甲車で追い詰め、体当たりしたのだ。ロシアンマフィアも、全員鞭打ちになり、たちまち投降したらしい。

そしてもう一つの組織は、アルバイト感覚で企業のホームページを改竄したり、官公庁のホームページをウイルスで悪戯していた大学生達だった。茜がその力を存分に発揮して情報屋達と連携し、彼らの居所を突き止めた。

「僕らは悪い事なんかしていませんよ。ビジネスとして依頼を受け、仕事をしただけです」

組織のリーダー格の大学四年の男が、警察に踏み込まれた時に吐いた言葉だ。

「そんな子供の言い訳が通るか、馬鹿者！」

刑事の怒鳴られ、そのバカ大学生はシユンとした。

美咲はスーツ姿に戻り、警察病院に来ていた。彼女は前回より大さめの花を買い、皆村の病室を訪れた。

「あ」

美咲は扉を開けようとして、手を止めた。

「もう！ 何度言ったらわかるんですか！ 全治するまで退院はできません！ 少しは大人しくして下さいよ」

女性の声だ。美咲は、その声に聞き覚えがあった。

（確か、最初に皆村さんを訪ねた時、応対してくれた女性だわ）

「お前にそんな事言われる筋合いねえよ。早く帰れ！」

皆村の声は元気そうで、しかも美咲と話をする時とは違って、飾らない調子だった。

「ええ、帰りますとも！　あまり長くいたりすると、署で変な噂を立てられちゃいますからね！」

相手の女性も、憎まれ口を叩きながらも、決して皆村の事を嫌っているのではないのがわかる。

「何だよ、変な噂って？」

皆村が尋ねる。女性は、

「皆村さんと付き合ってるっていう、嫌な噂です」

「嫌な噂ってどういう意味だ！？」

皆村は女性の気持ちに全然気づいていない。美咲はクスツと笑った。

「とことん、不器用なんですネ、皆村さんて」

美咲はそのままナースステーションまで戻り、花を差し出して、「これ、皆村刑事に渡して下さい」

と頼むと、警察病院を出た。

「振られちゃった、のかな？」

美咲は少しだけ寂しかったが、

「よし！」

と気合を入れ、葵が待つミニバン「茜号」に向かった。

「あら、もういいの？」

葵は助手席から顔を出した。美咲は苦笑いして、

「何だか、私、振られたみたいで……」

「はああ。身の程知らずねえ、その刑事」

葵は目を見開いて驚いている。美咲は運転席に乗り込むと、

「私が勝手にそう思っただけですから」

「そう？　じゃ、大丈夫ね」

葵は微笑んで美咲を見た。美咲もニツコリして、

「はい」

「あんたには、外務省君がいるもんね。あ、それから、国会議員さんもいるか」

葵はニヤニヤして言った。美咲はムツとして、

「あのお二人は、そういう関係ではありません！」

「そうなのお」

葵は笑ったままだ。

「それから、今日の締め、私にさせて下さい」

「え？」

意外な申し出に、葵は笑うのをやめて美咲を見た。美咲は「茜号」をスタートさせて、

「今回は、私にさせて下さい」

葵は前を見てフツと笑い、

「いいわよ。美咲が一番恨みがあるもんね、あのおっさんには」

「別に怨みはないですけど」

美咲はハンドルを切りながら、

「公務員の長のはずの人が、公務員を危険に晒すような相手と取引したり、現実に公務員が傷ついたのにも関わらず、自分は無関係だと主張するなんて、長たる資格がありません」

「確かにね。つつか、何であんなろくでなしが首相にまで上り詰めちゃうのかねえ。本当に日本人で、政治に関しては、幼稚園児並みね」

葵は肩を竦めた。

その頃篠原は、拉致されていた金村医師と烏丸からすま医師を乗せ、姉の菖蒲あやめが待つ大病院に向かっていた。二人を新潟の病院で診察させてからの出発だったので、今頃になったのだ。その間、何度も菖蒲からメールや電話があったので、篠原はうんざりしていた。
(せめて、麗奈さんの事務所で会いたいなあ)

篠原が何故そう思ったのかは言うまでもない。麗奈に菖蒲の相手をさせて、自分は麗奈の事務員である沙希を口説くつもりなのだ。懲りない男である。

そして、警察庁の大原の部屋。茜がパソコンを高速ブラインドタッチで操作している。

「よし、終了」

茜は笑顔で大原を見た。大原もニコリして、

「じゃあ、夕食は夜景の見えるホテルのレストランで」

「え？」

茜はギクツとして一歩退く。大原はキョトンとして、

「どうしたの、茜ちゃん？」

「ま、まさか、その後、『部屋をとってあるんだ』なんて事にはなりませんよね？」

茜は顔を赤らめて言う。大原は大笑いをして、

「まさか。だって茜ちゃんはまだ……」

と言いかけ、ハツとして黙る。茜はその言葉にピクツと反応し、大原を睨む。

「まだ？ まだってどういう意味ですか、大原さん？」

大原は冷や汗を垂らしながら、

「あ、いや、別に変な意味じゃないよ。茜ちゃんはまだ僕の恋人じゃないから、そんな事はできないって事さ」

「そうなんですか……」

茜は答えを聞いてションボリしてしまった。

「あれ、部屋をとった方が良かった？」

大原が真面目な顔で尋ねる。茜はその顔を見てプツと吹き出し、
「違いますよ！」

と言った。そしてモジモジしながら、

「大原さんは私の恋人だと思ってるんですけど、迷惑ですか？」

「茜ちゃん」

大原が驚いて茜を見た。茜はニコツとしてドアを開き、

「さ、行きましよ、ホテル！」

「茜ちゃん、その言い方、誤解されるよ！」

大原は慌てて茜を追いかけた。

「臯月^{おつき}さん」

篠原の車から金村が降り、最初に言ったのがそれだった。烏丸医師も、妻と子供が待つていて、涙の対面をしていた。

「金村君、みつともないわ」

菖蒲の第一声がそれだ。篠原も、金村も、そして烏丸達も驚いて彼女を見たほどだ。

「普段から、危機意識を持つていれば、あんな目には遭わなかったのよ」

「おい、姉さん！」

それは金村さんだけじゃなくて、烏丸さん達にも失礼だろ、と篠原は焦っていた。

「そうだね。ごめん、臯月さん」

金村はニコツとして頭を掻いた。すると菖蒲は顔を赤らめて、

「わ、わかればいいのよ。これからは気をつけなさいよ」

と言うと、スタスタと歩き出す。

「姉さん、待てよ！」

篠原が、あまりに身勝手な姉を追いかけようとする、と

「あ、私が行きます」

金村が言い、菖蒲を追いかける。

「臯月さん」

金村が隣に立つと、菖蒲が何かを言った。慌てて下がる金村。まるで召し使いのようだ。

「俺には考えられない関係だ」

菖蒲の一方的な恋だと思っていたのだが、金村は筋金入りの「M」だった。菖蒲に怒鳴られても、ニコニコしている。

「信じられない」

篠原は肩を竦め、車に戻る。烏丸一家が彼に礼を言い、彼の妻の運転でその場を去って行った。

「さあてと。今夜は沙希ちゃんとデートしたいけど、たまには葵を

……」

と言い、ニヤツとして車に乗り込んだ。

その日の仕事を終えた橋沢龍一郎首相は、進歩党最高顧問の岩戸老人が来ていると聞き、慌てて官邸の執務室に行った。

「やっと来たか、橋沢」

ソファに座っている岩戸老人が言った。その隣には見慣れない若い女性がいる。彼女は微笑んで会釈した。

「遅いわよ、首相」

彼の席の椅子に座っている女。確か、「月一族」という忍者の組織で一番強いという女だ。

「お、お前は！」

橋沢は思わずそう言ってしまい、慌てて口を塞ぐ。その女性は立ち上がり、

「はあ？ お前？ あんたのようなおっさんに、お前呼ばわりされる覚えはないわよ！」

「ひいひい！」

橋沢は思わず岩戸老人の後ろに隠れた。まるで悪戯を見つけた子供である。数ヶ月前のトラウマが甦ったようだ。しかし、彼は甘かった。

「貴方には、一國を任せるだけの度量がありません。すぐに総辞職する事をお奨めします」

岩戸老人の隣の女性が立ち上がって言う。橋沢はギョツとして彼女を見た。

「そして、これは私の知り合いの公務員の方の痛みのおすそ分けです！」

橋沢がハツと気づいた時は、もう手遅れだった。女性の平手が彼の顔を捉え、彼はクルクルツと身体を回転させて床に倒れた。

「行政のトップたるお前が、間接的であれ、その下で働く公務員を危険に晒して何とする、馬鹿者！ 美咲ちゃんの言う通り、すぐに

総辞職しろ！」

岩戸老人はド迫力の勢いで橋沢を叱責した。橋沢はポカンとして岩戸老人を見上げた。

「心配するな、橋沢。儂も付き合うよ。引退する」

岩戸老人の言葉に、二人の女性は驚いたようだ。橋沢も目を見開いた。

「先生、今、何て……」

「潮時だよ。こんな馬鹿者を首相にしまった責任を痛感しとるんだ。まあ、それだけではないが、いいきっかけさ」

岩戸老人はそう言うのと、部屋を出て行った。それを追うよう女性二人も続いた。

「岩戸先生、さっきのは……」

葵は廊下を早足で歩く岩戸老人を追いかけて言った。美咲も岩戸老人を見ながら歩く。

「本気だよ。儂が自分の首を差し出さなければ、あいつと刺し違える事はできない。あいつの側近共を黙らせるのには、そこまでせんと無理なんだよ」

岩戸老人はフツと笑い、

「まあ、そろそろ儂のようなジジイは退くべきなのさ。政界には若返りと再編が必要だ」

「先生……」

葵と美咲は涙ぐんでいた。岩戸老人はそれに気づき、

「ありがとう、二人共。こんな老いばれのために泣いてくれて」

「先生、今夜は朝まで飲みますか？」

葵が突然切り出す。

「所長！」

美咲は驚いて寤め^{たしな}ようとしたが、

「おお、いいねえ。盛大に盛り上がりうかね」

「はい」

美咲は溜息を吐いたが、岩戸老人がまだまだ元気なのを知ってホツとした。

岩戸先生を囲む会は、都内の居酒屋で開かれた。岩戸老人の希望だ。

「遅くなりました」

大原と茜がやって来た。

「おお、もう来たのか、大原。って事は、まだか？」

妙に嬉しそうに言う篠原に、茜が、

「な、何の事ですか、篠原さん？」

と言いつ返す。すると岩戸老人が、

「もちろん、あっちの事だよなあ、篠原君」

「あはは」

岩戸老人がそんな事を言い出すとは思わなかった葵と美咲と茜は、一瞬動きを止めてしまった。

「岩戸先生、お疲れ様でした。これから、我々を見守って下さい」

大原が畏^{かしこ}まって言う、岩戸老人は、

「相変わらず、固い奴だな、君は。そんなんじゃ、茜ちゃんに嫌われるぞ」

「はあ」

大原は苦笑いして頭を掻く。すると茜が、

「私は、そういう大原さんが好きなんですよ、先生」と徳利を差し出した。

「おうおう、気が利くね、茜ちゃん」

「どうぞ、お一つ」

茜が芸者張りの「しな」を作ったので、葵が大笑いした。

「まだ間に合ったみたいね」

麗奈が沙希を連れて現れた。おお、と篠原が身を乗り出す。

「はい、沙希ちゃんはここね」

葵の隣は岩戸老人と篠原だが、麗奈が篠原を押しつけて沙希を葵

の隣に座らせ、自分は美咲の隣に座る。追いやられた篠原は大原の隣に座った。

「麗奈君、久しぶりだな。相変わらず、奇麗だね」

岩戸老人が言った。麗奈はニコツとして、

「ありがとうございます。先生も変わらず、お若いすわ」

「ハハハ、褒められても付き合えんぞ」

「オホホホ」

沙希は葵の隣で身体が密着しているので、真っ赤になっている。

「なかなか、複雑な人間模様だな」

岩戸老人が葵に小声で言った。葵は苦笑いして、

「そうですね」

と答えた。

「姉さん達は？」

篠原が麗奈に尋ねた。麗奈は肩を竦めて、

「来られないって。全く、協調性がゼロなんだから、あいつ」

「来なくてもいいけどね」

篠原が笑って言う。麗奈もケラケラ笑って、

「そうね。来ても、座がシラけるだけだしね」

相変わらず酷い言われようの菖蒲である。

「もしかして、今頃あの二人……」

茜が呟く。すると篠原が、

「やめてくれ、想像したくないよ」

と言ったので、皆大笑いしてしまった。

そして、お開きの時間になった。

「皆さん、今日は儂のために集まってくれて、本当にありがとうございます。感激している」

岩戸老人は締めめの挨拶をしていたが、目が少し潤んでいる。

「国会議員は引退するが、人間を引退する訳ではないし、男をやめる訳でもない」

岩戸老人はニヤリとして、

「女性陣に言っておこう。男は若さではないぞ。経験と知恵だ。儂には、若い者にはないものがたくさんある」

「はあ？」

葵達は顔を見合わせた。

「女房に先立たれて随分になるしな。だから、今付き合っている男に飽きたら、いつでも声をかけてくれ。飯くらいはご馳走するぞ」

岩戸老人は、自分が元氣なのをアピールし、葵達を安心させようとしている。篠原にはそれがわかった。

「本当に、今日はありがとう」

岩戸老人は立ち上がり、深々と頭を下げる。葵達はそれに対して拍手をする。それはしばらく鳴り止まなかった。

そして、それぞれ帰路に着く。

「何であんたがあぶれるのよ」

篠原と二人だけになった葵は、剥れていた。

「あのなあ。今回は、俺、随分頑張ったと思うんだけど？」

篠原は必死にアピールした。しかし葵は、

「元はあんたのお姉さんが発端でしょ？ おかげで私達只働きだし」

「あれ？ 俺は報酬を払わなくていいの？」

篠原がニヤツと言うと、

「身体で払おうとしている報酬を受け取るつもりはないわよ」

葵はあっさりと言った。

「それに、あんたの頑張りと相殺して、少しお釣りができたから」

「え？」

篠原は驚いていた。葵がガバツと抱きついて、キスして来たのだ。それもしっかりとしたキスだった。

「はい、これで相殺完了ね」

葵は照れ臭そうに笑った。篠原は、

「これだけで終わるくらいなら、何もされない方がマシだよお、葵

「イ」

と甘えてみたが、葵は素っ気ない。

「調子に乗るな、年中発情男が！」

プイツと背中を向け、歩き出してしまふ。

「ああ、ウソウソ！　せめてあと一軒、二人で飲まないか？」

「それくらいならいいけど……。変な薬飲ませて、襲ったりしないでしょうね？」

「しないしない。する訳がない」

葵は篠原を疑いの眼差しで見、

「まあ、いいわ。付き合うわよ」

「やったあ！」

恋人なのか、そうでないのかわからない二人は、繁華街へと繰り出して行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7150k/>

風の葵 黒い救急車

2011年7月15日23時46分発行